

夢の残照

風野旅人

目次

第1話	夜空に舞うもの	7
第2話	夢の調べ	55
第3話	陽光が照らす雲	135

プロローグ

——例えば、夜空に浮かんでいる自分を想像してみる。

素足の下に広がる光の海——街を彩るイルミネーション——それは必死に暗い何かを覆い隠すように光る灯火……

そして、頭上に輝く星たちは街並みから放たれる光で数多くは見えないけれど、それでも幾千を越える星たちが自分達の存在を示すかのように輝きを湛たえている……

その空の中をパラシュートもグライダーも無く、唯々そこただただに浮かんでいる自分……

「そう、こんな感じ……」

あたしはぼんやりと星々が煌めくその空を眺めていた……

「……って、ど、どーしてあたしが、こんなところにいるのよおおおおお——!?」

そう、あたしは確かに『その場』にいた。

あたしの足元には何も無い。

つまり、言葉通り空に浮いているのだ！

第1話 夜空に舞うもの

「と、取りあえず、落ちる心配は無さそうね……」

ひとしきり叫んで少し冷静になったあたしは、足元を恐る恐る踏みしめてみる。

そこには何も見えないが、足には柔らかい高級羽毛布団を踏みしめたような、ふわふわとした反発感があり、これより下へと落ちるような感じはない。

とりあえず、今のところは墜落の心配をしなくても良いことが確認できたので、あたしは改めて周りを見渡してみた。

地平線の向こうまでその視界を遮るものが全く見当たらないことから、とんでもない高さにいることを改めて思い知る。

そして、眼下に広がる街並みは間違いないあたしが住んでいる町だ。

「あれはいつも行っている本屋だし……あそこにあるのはこの前服を買った洋品店だし……」

あたしは見下ろしている目を皿のようにして、黒く立ち並ぶ街並みから自分の知っている建物の列挙を始めた。

……意外に、普段の視界にはあるはずもない空からの眺めでも建物の判別がつくのね……
つて！

「こ、こんなことしている場合じゃなかったあつ!!」

あたしは自分が通っている高校の学舎まなびやを指差したところでようやく我に返った。

「問題はどうしてここにいるのかと、帰る方法よね……」

今になって気が付いたけど、こんな上空に浮いているのに寒さを全く感じないのだ。

本来、上空は強い風が吹いているというけれど、それを肌を感じる事も無い。

今のあたしは、風のない空中で留まっている風船の如くの状態である。

「分からない……何であたしここにいるの?」

とその時、気付いた事があった。

あたしの服は、薄着……それもパジャマのままであったことだ。

「……と言う事は……」

常識で考えれば一つしかない解答をあたしの頭は導きだす。

「これは夢! そう夢しかない!」

納得顔でいずこかに向けて高らかに宣言するあたし。

「なあ〜んだ、夢かあ〜」

あたしは笑いながら星空を見上げた。

「きつと寝る前に、星の本なんか読んだからこんな夢を見たのね……えっ……?」

その時、あたしの視界の中に星以外の煌めきが映った。

それはふわりふわりと、木の葉のように漂いながらあたしに向かって降りてくる。

あたしの目の前まで降りてきたその『輝くもの』に手を差し伸べると、綿毛のような柔らかい感触が手のひらに生まれた。

「……羽根……?」

あたしに向かって降ってきたそれは、白に光り輝く大きな羽根だった。

「綺麗な羽根……どんな鳥の羽根なんだろう……」

あたしの手の中に収まったその羽根は、まるで真珠か何かの宝石のような白くまばゆい輝きを放っている。

その美しさにあたしがみとれている最中、目の端を同じように輝くものが上から下へと次々に通り過ぎて行く。

「えっ……!?!」

慌てて横を振り向くと、通り過ぎてゆくそれらも、今あたしが手にしているものと同じ——光る羽根——であった。

再び空を見上げると、あたしに向かって無数の光の羽根が舞い降り続けている。

「わあ〜!」

あたしは優雅に舞い下りる羽根に両手を広げながら、その光景を見つめていた。

「すっごく、綺麗……」

あたしは煌びやかな光のダンスに溜め息を漏らす。

舞い落ちるその光の羽根は絶えるどころか、次第にその密度を増し、あたしの視界を埋め尽くしてゆくのだった。

「いったい、どこから降って来ているんだろう……？」

あたしは手で額に庇をつくり、舞い落ちてくる羽根を避けながら、羽根が落ちてくる上空の一点へと目を凝らす。

そして……星の輝く夜闇の空の中で……あたしはそれを見つけた……

あたしを取り巻いている羽根たちが舞い来るその一点には淡色に輝く何か動いている。

まるで川辺の蛍のように動きまわるそれはまるで舞踊のようだ。

その何かがその場で舞うたびに、あたしの周囲に羽根が満たされゆく。

しかし、ここからではそれ以上の事は分からない。

「うう……もっと近ければ良く見えるのに！」

あたしは空を見上げたままもどかしげ言い放った。

けれど、次の瞬間……

ぐうっん！

あたしの体は今の場所よりも更に上空へと舞い上がっていった!

まるで巨大な掃除機に吸い込まれるように、強引に上空へと体が引つ張り上げられる。

「のああああ——!?!」

しかし、それも一瞬のことで、すぐにスイッチが切られたように急停止すると、再び宙に漂う状態に戻った。

「さ、さつすがあ! あたしの夢! 願えばそのとおりになるのね!」

今の現象は夢の中の一出来事として、即座に片付けるあたし。

……冷静に考えると、いくら夢でもそんな思い通りになるはず無いだけどね……

取りあえず、この現象についての考察を瞬時にして片付けたあたしは、再び空を見上げたのだが……

「あ、あれ!? いない!?」

先ほどまであたしの頭上で舞っていた『何か』はその場にはいなくなっていた。

あたしが上空へと飛ばされていたのは、ほんの一瞬の事だ。その一瞬であたしの視界から消える事が出来るほどのスピードなんて、普通の鳥でも無理だと思うけど……

そう思い、あたしは改めて辺りを見渡した。

「あつ!? い、いた……」

それは、本当にすぐそば——実に十メートルも離れていない——にいた。果てしなく間抜け

なことに、あたしはすぐに気がつかなかったわけだけど……

それは『人』だった。

ただし、人の形をしている何かと言った方が正しいかもしれないけどね……

ぱっと見だけでも、背中に翼が生えていると言うだけで、既に十分普通の人じゃ無いと思うし……

あたしはかたわらで未だに何かを舞っている『それ』をまじまじと眺める。

真つ白な素肌……よく『雪のように白い肌』っていうけど、この人の場合はあまりにも白過ぎて、透き通るような白……言うなれば白い光みたい……

その肌上には、これまた白い霞のような薄手の服を身に付けていた。

……こんな上空でそんな格好をしていたら、百発百中で間違ひなく風邪を拗らせそうだけど、パジャマ姿のあたしが言えることじゃないけどね……

その背中から生えている、これまた例に漏れず白いその翼は、夜空の闇に淡く光を放つていた。

あたしが手にしている羽根もその一部だったのだろう、今もその翼から絶え間無く地上の街並みへと羽根が舞い降り続けている。

そして、夢げで……どこことなく憂いを秘めたその表情は、まさしく天使の顔だった。

天使のようなやさしい笑みとは良く言うけど、この人の笑みは、男女分け隔て無く人を引き

付けてやまない何かを持っている。

かくいうあたしも、その笑みを見ていてちよつとくらつとしてしまった。

……あたし……天使が出てくる本とか読んだかなあ……

軽く記憶を辿ってみるが、ここ最近ではそんな本やアニメ（友人に好きそうなヤツがいるけど）を見聞きした覚えはさしあたってない。

しかし、その天使の神々しさは本物で、あたしは思わず直立不動の姿勢のまま、その天使の舞を見とれていた。

しばらく眺めていると、なんらかの定まった舞を舞っているというわけではなく、自分の翼とその手にしている、淡く紅い光を放つ細い糸にじやれているようにも見える。

そして、腰に届きそうな長い栗色の髪は、その天使が舞うたびに輝く翼の光を受けて柔らかく穏やかな光を添えていた。

すっかりその『天使の舞』に骨抜きにされていたあたしは、いつの間にか『天使』がこちらへと振り向いていたことに気がついていなくなったりしたわけだけ……

「えっ、あ、あう……、ええええええ、えつと……」

一瞬遅れて慌てふためくあたしが発した言葉は、非常に怪しいものとなるのは必然か……

しかし、その『天使』はあたしの奇つ怪な反応にも、何事もなかったようにあたしへとその微笑みを向けていた。

「あはっ、あははははははー……」

その天使の態度に、あたしは思わず乾いた笑いを返してしまった。

……しかし、この笑みを向けられて「私のために死んでね」なんて言われたら、世の男どもは惜しげもなく命差し出すわね……

今時いいいわよね。こんな世俗に歪んでそうもない清楚な女の子なんて……

その『天使』は、今もあたしを見つめ、微笑んでいる。

「えっと……ここで何してるんですか？」

その笑みにつられて、あたしはめちやくちや間の抜けた質問をしてしまう。

けれど、その『天使』はあたしの問いには答えず、不思議そうに首を少し傾けると、あたし

へとスーツと近寄ってくるのだった。

かといつても翼がはたために飛んできたわけではなく、そのままの姿勢で平行移動してこち

らへと近づいてきたのだが。

……これを暗闇でやられたら、冗談抜きで怖いわよ……

『天使』はあたしのすぐ側まで来ると、そつと左手を差し出してくる。

「え……あ、はいはい……」

めちやくちや罪作りの表情そのままに微笑みかけている『天使』に、あたしも反射的に手を差し伸べてしまう。

………が………

「美琴お——!!」

唐突に響いた声に驚き、あたしは思わずその差し出した手を引っ込めてしまった。

その声は……あたしたちがいる高さよりもさらに上空から響いてきたのだが……

「だ、誰!？」

聞こえてきた声からすると男みたいだけど。

あたしの目の前に浮かぶ『天使』もその声が聞こえた方へと顔を向けていたが、その表情には少しも変化が見られず、先ほどと同じように笑みを浮かべていたのだった。

「ようやく見つけたぞ！」

その声の主は、あたしたちの頭上から滑るように降りてきた。

あたしと目の前にいる『天使』——美琴って呼ばれていたみたいだけど——の近くに降り立ったその男は厳しい顔をこちらに向けて睨めつけている。

当然、直接あたしを睨めつけているわけではなく、単に男の目の前にあたしと天使と直線上に並んでいるためだけだね。

ぱっと見た感じ、その男はあたしとそう年齢差は感じない。むしろ顔の整い具合から若干幼

さも感じるくらいだ。

正直なところ、普通に（？）美形と呼ばれる異人族に属している人種だろう。……あたしのこれまでの人生において、身の回りにはこれっぽっちも縁のない人種とも言えるが……

そんなうら若き高校生、かつ純真なる乙女の短い人生の中にあつた悲しい話は、今はどうだつていいということにしておき、それよりも今現在で重要なことは、その男の背中にも翼が生えているということだろう。

ただ、美琴と呼ばれた『天使』とは違うのは、はつきりと翼と分かる形をしている事だ。

美琴の翼は、白に輝いており透明感にあふれていて、正に『これぞ天使の翼！』つて感じだけど、この男の翼は本物の鳥——そう例えば鷹とか鷲とか——いわゆる猛禽類の翼をかたど模つてい

る。そして、広げられている翼の片方だけでも、その男の身長のご二倍くらいあるかもしれないほどの大きな翼であつた。

「ち、ちよつと……あなたはいったい何者よ……!?!」

だが、その男はあたしの存在をまるつきり無視して、美琴と呼んだ天使の少女を睨めつけたまま口を開く。

「また、こんな所で遊んでいたとはな……」

などと呟きながら、男は無造作に美琴に近づいてゆく。

ところが、対する美琴の方はさして気にした様子も無く、微笑みを浮かべたまま手にしている紅い糸を指で弄もてあそんでいた。

……のだが……

ぽんっ！

やたらと間の抜けた軽い音を立てて、右手に絡められていたはずの紅い糸が突如として……

「な、なんですつてええええええええ——!?」

黒光りする銃口を備えた拳銃へと姿を変えていた!?

「ちっ!」

男は舌打ちをすると、即座にその場を飛び退く。

あまりの展開について行けず絶句しているあたしを尻目に、目の前でその銃口が火を噴いた!

パアーン! パアーン!

美琴はいい加減としか思えない狙いの付け方をしながら、絶え間なく銃の引き金を引いている。

しかし、その顔からは張り付いたように笑みが消えてはいなかった。それが先ほどまでの優しげな雰囲気と相俟あいまつて異様さを増幅させている。掠めながらも何とか銃弾をかわし続けてきた男だが、殆ど流れ弾のような弾丸が直撃しそうになった！

「ちいつ！」

カーーン！

硬い音を立てて今まさに迫り来ていたはずの銃弾を男は素手で叩き弾く！

嘘っ！

……殆ど……いや完全に常識外れな展開を続ける二人……

あたしは既に傍観者その一に成り下がっていた。

……はずだったのだが……

おもむろに銃口があたしの方向に向けられたあっ!?

「あ、あたしは全然関係ないわよ——!!」

叫びを上げながら横に逃げようとするあたし。

もはや美琴と呼ばれた少女にとって、目の前にいるものすべてが敵なの!?

あたしの訴えをまるつきり無視し（というか聞こえていないかすら、その表情からはこれっぽちも伺えない）、引き金を引こうとする美琴。

「やめろ！ 美琴！」

男は叫びながら美琴とあたしの間を飛び込んでくる。

「風よ！ 我が命に従いて疾風の障壁となれ！」

美琴が引き金を引くより一瞬早く男が呪文のようなものを叫ぶように唱えた。

それとほぼ同時に美琴から無数の銃弾が放たれる！

カーンっ！ カーンっ！ カーン！

しかし、硬い金属音のような音を響かせ、男とあたしに向けられた銃弾はすべて八方に弾き返された！

美琴とあたしたちの間に見えない壁のようなものがあるらしい。恐らくさつき男が唱えた呪文みたいなものは、これを作り上げるためのものだったのだろう。

それを見た美琴はまたしても表情一つ変えることなく、手にしている銃を軽く振るうと瞬間に元の紅い糸へと戻してしまった。

そして……またあの神秘的な笑みを顔に浮かべるのだが……

「あは、あはは……」

「こらそこ！ 油断するな！」

またしてもそれにつられて笑いを返してしまうあたしに、美琴を見据えたままの男が叱咤を飛ばしてきた。

その時、美琴の手に絡みついている紅い糸が再び変化を見せる。

糸は淡い光を放つ玉へと姿を変えると弾けるようにして分裂し、美琴の周りでふわふわと漂いはじめた。

一見、大きい蛍が放つ光のような感じがするけど……

「なっ!? いきなり精霊輝弾か!?!」
ソウルランチャー

光の玉の出現に驚愕した男は、あたしの方を振り向くと、

「逃げるぞ！」

といて、無造作にあたしの手を掴みあげた。

「ちよつ、ちよつと！ どこに連れて行く気よ!?!」

とつさに抗議をして睨めつけるあたしに男は、

「死にたくなければ、大人しく掴ま^{つか}まっている！」

と一喝する。

バリイイインッ！

男の声が終わるとほぼ同時に、あたしたちの目の前で激しい光が爆発し、次の瞬間にはガラスが砕け散ったような音を立てて目に見えない何かが崩れ落ちるのを感じた。

「う、うう、目の奥がチカチカする……な、何なのよ、一体……」

至近距離で強い光を浴びたあたしは目を押さえながら眩く。

「さっき作った防壁が壊されたんだ。今のうちにここから離れるぞ」

あたしの眩きに手をつないでいる男が答えた。

その男はあたしの手を引き、美琴と呼ばれた少女と同じようにその大きく広げた翼をはためかせる事無く、夜の上空をもついでに早い早さで飛翔する。

「……………こ、この翼ってただの飾りなのかしら……………?」

どこからも推進力を得ているようには見えないにもかかわらず、桁外れなスピードであたしと男は先ほどまでいた場所からぐんぐん離れて行く。

あつという間に美琴の天使姿が小さな光点へと変わり、その様子を伺うことが出来なくなる。……でも、後ろから何か別の光るものが追ってきているような気がするんだけど……

「ね、ねえ……………あれって……………何……………?」

あたしは後ろを振り向いたまま、男が背にしている翼の端から見え隠れする輝きを見つめな

がら問いを投げる。

「み、美琴が放った、精霊輝弾だ……」

男はそれを目で確認することなく、あたしの問いに答えを返してきた。

「そうるらんちやー……？　なによそ……」

あたしの言葉が終わるよりも早く、翼の陰からあたしの鼻先へと何か^{かす}が掠め、飛び去っていった……!?

それはあたしの拳くらいの大きさを持った光る物体であった。

「い、今のが……」

あたしは声を震わせて、光弾が飛び去った方向を呆然と眺めながら尋ねる。

「ああ、あれが精霊輝弾だ。まともに食らったら、君くらい一撃で霧散するだろうな」

あたしに向かつて右手の拳を弾くように開きながら、とんでもなく恐ろしい事を軽く言ってくる飛行男。

……つまり、さっきこの男が言っていた『防壁が壊された』というのは、あたしたちを銃弾から守った見えない壁が美琴によって作り出された『精霊輝弾』によって破壊された——ということなのね……

あの銃弾にどれほどの威力があったのかは今となってはわからないけど、それを弾き返した防壁をいとも容易^{たやす}く破壊するほどなのだから、この男の言っていることもあながち間違いとも

思えない。

今現在、その破壊力満点の精霊輝弾団体様御一行がその数を倍々に増やしながらかあたしたちを追いかけて来ているわけである。

これをピンチと言わずなんと言うべきか……!!

「ど、どこまで逃げれば追ってこなくなるのよ——!!」

あたしは懸命に男の手を強く握りかえし、襷たすきの如く風に身体をなびかせながら叫んだ。

「美琴に聞いてくれっ!!」

男は何かを振り絞るかのような調子で吐き捨てるように叫び返してきた。

男の顔を斜め横——二人分の腕の長さは意外と遠い——からのぞき込むと、遙か前方を見据えるその男の唇が強く噛みしめたように白くなっているのが垣間見える。恐らくこんな高速で飛ぶために何らかの力を使っているのかもしれない。その顔には幾らかばかりの疲労の影が伺えた。

「だ、だいたい! 何なのよ! あんたもあの美琴って子も……こんな常識も物理法則もその他諸々も無視したこのやり取りはっ!!」

しかし、あたしは懸命に引つ張ってこれている男に怒鳴り声を浴びせかけまくる。

後から思えば悪かったと思わなくもないが、残念ながらこの時のあたしは、事情を知ってそうなの男やその相手である美琴と違って落ち着いていられるような状況ではなかった。

まあ、そもそも今のあたしもじゅーぶん、物理法則を無視しているかもしれないけど……
「普通の物理法則がここには無いと言ったら、この出来事も常識になるよ……」
先ほどとは打って変わって、男は落ち着いたような口調で呟きを返してきた。

「普通の物理法則がない？　じゃあ、ここは……」

あたしの言葉が終わる前に、背後から無数の光弾が追いつがる。

「ま、まずいわよ！　追いつかれてるっ!!」

こちらも尋常じゃないスピードで飛んでいるはずなのだが、さすがに弾と勝負するのは分が悪すぎるだろう。

「くっ！　すっかり掴まって！」

「えっ……？　って、きやああああ——!!」

男は気合いを入れると、唐突に水平飛行から垂直に上昇する軌道に転換した。

当然引つ張られているあたしもその軌道に追従するしかないわけだが、水平方向への反動が残ったまま上昇させられたため、三半規管が壊れそうな気持ち悪いめまいを強引に植え付けられる。

「ちよ、ちよつと！　急に方向転換しないでよ！」

「あ、あれを避け続けるにはまだ足りないくらいだ！　つ、次も行くぞ！」

あたしの抗議をあっさり受け流し、男は斜めに上昇を続ける。

足元を見下ろすと、先ほどまであたしたちが飛んでいたコースは精霊輝弾の群れが駆け抜け、その輝線を地平線の彼方までのぼし続けているところであった。

確かに上昇しなければ避けきれない状態だったかもしれないけど、出来ればもう少し具体的な予告がほしい……

そのとき、過ぎ去る足下を見つめるあたしの視界の端に再び光弾の輝きが点^{とも}る。

「！ こつ、こつちに向け直しているわよ！」

「……わかつている！」

別に砲身が固定された大砲というわけではないのだから、その軸線が変更されるのは予想の範囲内なのだけど……

「ちい！ 上からもかつ！」

「えっ!? う、上からああ——っ!?」

あたしが目を向ける前に、反射的なタイミングで急旋回する男。

またしてもあらぬ方向を見たまま進路を変えられたため、冗談抜きであたしの華奢な三半規管は狂いかけた。

さながらレールのないジェットコースターである。軌道が全く読めないのどちらに感覚を傾けておけば耐えられるのかすら判断する余裕さえない。

「だ、だーかーらー！ 旋回する前に言つて——!!」

あたしは悲鳴混じりの声を上げて進路予測不能な鳥男に抗議を繰り返す。

しかし、完全にあたしの存在を無視したかのように、男は言葉通り縦横無尽に空を翔る。

しっかりと握られているとはいえ、この男の細い腕を見ていると遠心力で飛ばされないので不思議なくらいだ。

だが、目を回してこの腕を放したりしたら、空中に漂うしか能がないあたしはそれこそあの精霊輝弾の良^まい^とのである。一見頼りなさそうなこの腕とはいえ、あたしにとっては今は命綱に等しい。

紐無しバンジージャンプ——それは既に投身ともいう——をする気なんてさらさら無いあたしは、極めて不本意であるが必死になってその腕にしがみついていた。

とりあえず、あたしは目をつむって周りを見ないことにし、回避行動はすべて男に任せることにする。でないといずれ目を回して振り落とされるだろう。

そんなあたしの葛藤なんぞ思いもよらないであろう、この高速飛行男は光弾の軌跡を巧みな旋回で次々とかわしてゆく。

振り回されるあたしの身になって欲しい……本当に……

だが不思議なことに、目を閉じていると先ほどまで感じていた急旋回に伴う遠心力がほとんど感じられなくなった。

どうしてなのかはわからないし、今それをこの男に確認する余裕なんてない。差し当たって

めまいを覚えるようなことが無いのなら好都合だ。今はただこの攻撃から逃れられることを願うだけなのだから。

「量が多すぎる……！ スピードはこれが限界なのに……！」

目を閉じているため音の情報だけが頼りになっていくあたしの耳に、風切り音に混じって男の絶望的な台詞が飛び込んできた。

それでも何とかかわし続けているが、それをあざ笑うかのような精霊輝弾の雨あられがあたしたちを包んでいるのだろう。目を瞑っているあたしにはわからないわけだけど……

「く、くそおっ！ お、重い荷物を抱えているから……い、いつもよりもスピードが……出ない……！」

「……………」

「ごちんっ……………」

重く鈍い音が流れる風の中に消え去ってゆく。

「いってえ——！ な、何をするんだ！ いきなり!？」

あたしは無言で男の腕を這い上がると、この失礼極まりない男の頭を握り拳で打ちのめしていた。

「お、女の子に向かつて重いなんてどういうことよ!？」

あたしはそのまま男の首根っこを引っつかんで怒鳴りつけた。

「……そ、そんな、細かい事を気にしている場合じゃないっ!」

「な、何ですってええええ!! あたしにとつては、じゅーぶん大事よっ!!」

そう、それは本当に乙女の重大事項なのである——

「——毎夜、毎夜のお風呂上りに体重計へと両足を乗せる瞬間! 一時を置いてメーターの指し示すその数値! そして……摂生という名の好きなものを食べることが適わなくなる辛く……辛く過酷な日々の記憶——くうううううっ! ……お、男のあんたなんかには、一生分からないでしょうけどねっ!!」

あたしは堅く握りしめた拳を振るわせながら、恐怖と苦痛の日々を振り返っていた。

「……いや、確かに分からないと思うけど、そんな力一杯全力全開で力説されても非常に困るんだが……」

なにげに困った顔で頬掻く姿も様になるのは気に入らないわね、コイツは。

「そもそも、普段から摂生しなければならぬほど食べているのが悪いん……ぐへえっ……!？」

鬼の形相で睨み返ししながら、あたしは無礼千万な人体ジェットコースター男の首を鷲掴み、全力でその手の握力に込める。

手足と同時にその翼までもジタバタとはためかせる姿は実に滑稽であるが、男の顔がしやれ

にならないレベルで赤青に変色し出したので、手を緩めることにした。

「げっ、げふお……み、美琴に倒される前に、君に倒されそうだ……」

これまた失礼な言い草であるが、いつまでもこんなところで立ち話ならぬ浮遊話しているわけにはいかないことは確かである。

「……ともかく、今は君と押し問答している場合じゃない。君がいるおかげでこっちは攻勢に出られないんだから……」

男はやれやれといった感じで、まだ痛みの残っている首を横に振る。

「な、なによ！ それは！ あたしが邪魔ってこと!?!」

「当然だよ。美琴が君を攻撃してきても、それを防ぐ事もできないだろ？」

極めて冷静な口調で言葉を続ける男であった。確かにあたしには何も出来ないことは間違いないのだが、さすがにお荷物扱いはあたしのプライドが許さなかった。

「当然よっ！ あんな常識外れなこと、ごく普通のか弱い女の子が出来るわけないでしょうがっ！」

最大限に胸を張って言い放つあたし。

「いや、そ、そんな威張って言われても困るが……」

額に汗を浮かべ、引きつった頬をポリポリ掻きながら本当に困った顔をする男であった。

「ともかく、ここは一体どこなの!? って言うか、どうしてあたしはここにいるの!?!」

あたしは一連の騒動でこれまで口にしてこなかった当然の疑問を未だに困った顔をしたままの男へと投げつける。

「……わからない……」

あたしの質問に小さく呟くように答えると、男はあたしの手を再び握り、虚空へと飛び始める。

「ち、ちよつと！ あなたさつきこの世界がどうこうとか言っていないかった!？」

「俺が知っているのはこの世界の事だけ。君がここにいる理由はこつちが知りたいくらいだよ」
あたしの手を握る力は変わらないが、その言葉は心底疲れたような力のない口ぶりである。

その男の言葉にあたしは沈黙したのだが……

……あたしは……どうしてここに……いるんだらう……？

初めから、そして今も続く疑問だけど、少し冷静になって考えてみる。

ここに来てから……確か、そう夢……夢とあたしは判断したのよね……

あの美琴やこの男と違い、翼もなくこんな夜の空に漂っているなんて、ベッドの上で見る夢以外であり得るはずがない。

あたしはそう結論づけていた。……ただ、その先にこんな騒動に巻き込まれるとは思ってもよ
らなかつたけど。

……でも……夢にしては、いやにリアルよね……

天使のような女の子に、まるで魔法のような光の弾による攻撃とそれを防ぐ透明な壁……どれも常識では計れないものばかり。

「……夢……じゃないのね……これって……」

あたしの口から思わず考えていた事が出てしまっていた。

普段のあたしなら一蹴していただろう言葉だけど、今の今までの出来事は夢の一言で片付けるにはあまりにもリアル過ぎた。

今もあたしたちを標的にして飛び交う光弾を眺めていると、その現実味がさらに帯びてくるのだから不思議なものである。

「……半分あたり。よく気がついたね……」

あたしの言葉を聞いた男が、少し驚いた口ぶりで眩きを返してきた。

「——えっ……?」

バシユウウウ!!

あたしの軽い驚きの声が、貫くような一条の光と爆裂音によって掻き消された。

「つつ……み、耳がギンギンする……」

至近距離で閃いた爆光と鳴り響いた轟音に、あたしは瞳と鼓膜を持っていかれそうな痛みを

感じる。

「やられた……」

突然の爆光に閉じていた目を開けると、あたしの手を放して空中に静止したまま男が顔をしかめていた。

「ど、どうしたの……？ ひ、ひいつ!？」

問うあたしは男が見ていた方へと視線を滑らせ……息を呑む。

そこにはまるで消え去ったかのように半分が無くなってしまった男の右翼が漂っていたのである。

あたしはグロテスクな場面を想像して、反射的に一瞬視線を逸らしてしまっていた。

「だ、大丈夫なの!？」

けれども、そこからは血が吹き出ている様子も無いし、当の男も痛みを訴えているようには見えない。

血まみれのスプラッタよろしく……ということだけは避けられていたけど、それでも片翼が失われているのを見ているのは気分が良いとはいえないわね。

たぶん、あの精霊輝弾っていう光の弾が翼に当たったんだろうけど……

「ああ、運良く身体には当らなかったから……だけど、この調子じゃそれも時間の問題だろうけど……」

あたしたちがこれまで飛んできた方角に目を向けると、相も変わらず凶悪破壊力を秘めた光がこちらへと向かってきているのが垣間見える。

照準が適当なのが幸いしてたけど、今みたいに「下手な鉄砲数うちや当るの法則」で命中することもこれから高確率であり得るだろう。現にこの男の翼はもがれてしまったわけだし。

「……早く、早くここからも動いた方がいいんじゃないの……？」

あたしは狼狽しながらも、声のトーンを落とすし、冷静を装いながら男に問いかける。

さすがに怪我(?)をしている相手に強く出られるほど、あたしは周りが見えていない人間……ではないと信じたいから。

「……そ、そうだね……」

厳しい表情を浮かべながらもあたしの言葉に頷き、男は再び半分にもがれた片翼に視線を戻した。

「取りあえず逃げるには、殆ど支障は無いけど……」

「でも、これじゃ飛べないんじゃない……」

そもそもこの翼、これまで飛んでいる最中も飛行機の両翼のように固定されたままで、羽ばたいている様子は全くなかったけどね。

何の役に立っているのか全然分からない品である。まあ、あたしの方はそもそも翼どころか、パジャマ姿で空に浮かんでいるけど。

「つと、これね。まあこれくらいなら……何とかなるかな……？」

男は折れた翼を自分の近くに寄せ、その手をかざした。

そして両目を軽く閉じると、静かに言葉を紡ぎ出す……

——^{そら}天空にあまねく風の精霊よ……

我と汝らの盟約によりここに願う……

我と汝らを別け隔つ、^{そら}蒼穹の地へと舞う力を、今一度我に与えん！

その言葉の内容はまるでどうか、ファンタジー小説の一節にでも出てきそうな呪文の詠唱そのままであった。

……というか、どこかで聞き覚えがあるような気がするんだけど……

厳かに呪文を唱え終えた男と、その様子を眺めていたあたしの周囲にどこからとも無く砂金のようにきめ細やかな光の粒子が現れ、あたしたちを取り囲んだ。

「な、なにごと……!？」

音もなく煌めきのみを放ちながら周囲を覆っているそれらの粒子は輝きを伴ったまま、一呼吸置いて徐々に男の折れた翼の先へと集まり始める。

そして、黄金色の粒子はさらさらと砂の流れるような乾いた音を立てながら元の翼の形を作

り出すと、その輝きを次々に失ってゆき……

全ての光が消えた後、折れたはずの男の翼は、美琴の攻撃を受ける前の鷲鷹わたがを彷彿とさせる威風堂々とした姿形を取り戻していた。

「ふう……これでよし……つと……」

男は一息つくくと、すっかり元通りとなったその翼を見つめている。

「こ、これでよし……って、この翼は一体何なの!?!」

あたしは、思わず以前の形を取り戻したその翼へと手をさしのべていた。

翼に触れた指先から伝わるその感触は、普通の羽根——たとえばカラスに追い立てられた鳩が道路に落とした羽根とか——とさして変わらない。

先ほどあたしたちを取り巻いていた金色の砂がその姿を変えたものとは思えない。羽根そのものであった。

「これは……自分が空を飛ぶ時のイメージを思い浮かべる時、翼があつた方が自然な感じがするから……」

背中越しに自分の翼を軽くなでながら呟く、翼人男。

「イ、イメージすることは……これって想像なの!?! この空を飛んでいる事が……!」

「そう、君がここに浮いていることだけでなく、闇夜の街並みも、この翼も、あの光弾も……すべてが想像の産物……」

☆

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ あんた、さつき『夢じゃない』って否定していたじゃないの！」

ほんのついさつき、男はあたしの『夢じゃないのね』という言葉を確認していたのである。にもかかわらず、次の瞬間に『これは想像の産物』などと言われては丸つきり話がどの山とも谷とも噛み合わない。

空を飛びながらも男はきよとんとした顔であたしを見つめ、ややあつてから納得したように「ああ」と呟いた。

「その話、詳しくしている余裕が無かったから、ちよつと適当に答えていたけど……この世界は……夢の世界だよ。ただし、さつきも言ったとおり、それは『半分だけ』」

「何よ、その半分だけって……？」

あたしの疑いのまなざしに、男は少し思案顔になってから口を開いた。たぶん、言うべきか言わざるべきかを迷っているのだろう。

その様子から別にあたしをからかっていた、というわけではなかったことだけは悟ることは

出来たけど。

「……この世界のことは……俺にもまだよく分かっていないところが多いんだ。ただ一ついえることは、今俺たちがいるここは『現実に影響がある夢』ということ」

「『現実に影響がある夢』……?」

あたしのオウム返しに男は頷きを返したものの、それ以降、口を開くことは無かった。

……現実に影響を及ぼすことがある夢って……いったい何なのよ……

まさか、ここで怪我したら現実も怪我しているとでも言いたげな表現にしかあたしには聞こえなかった。

そもそも、ここが夢ならば……一体これは誰の夢なの？

あたしでなければ、この男……あるいは……

こうしている間、先ほどまであたしたちを追ってきていた、無数の精霊輝弾の光は一時いっときの夕立のようにピタリとやんでしまっている。

どうしてだかは分からないけど……もしかしたら、先ほどこの男に命中したことを察して、撃墜したのかと思っているのかもしれないわね。

「撃つてこなくなっちゃったわね……」

「さっきの手応えを感じてくれたか、単に休憩しているだけか……」

あの精霊輝弾と呼ばれる光の弾は、この男の背に生えている見た目は頑丈そうな翼を一撃に

して弾き飛ばしてしまうような代物である。

もし、あんなのがあたし自身に直撃でもしたら、この男の言うとおりの一撃で霧散することになるだろう。

……想像したくない……

あたしは、先ほどのものがれた翼を思い出して軽く体を震わせていた。

「怖い……？」

「あ、当たり前よ！　いつ自分の身にあんなのが当たるかと思えば……」

「……その割にはずいぶん威勢のよ……いや、何でもない……」

少しは学習したのか、失言を途中で切り上げる男。しかし、途中まであたしの耳にはしつかりと聞こえていたので、後でまとめてお支払いすることに。覚えてろ。

「ともかく、君をここから帰す事を先に考えた方がいいみたいだな……」

「……って、それを先に考えるのが普通でしょうが!!」

またしても、あたしは男の襟首を引っ掴んで左右に捻じつた。早くも貯蓄をお支払いすることになったようである。

「ま、また……か……や、やめ……く、くるしひ……」

冗談抜きに入っているらしく、再び男の顔色は赤く青くと変色を繰り返すこととなる。

「あなた！　絶対あたしの事をちゃんと考えていなかったでしょう！」

この優男風鳥男のこれまでの行動を見てみると、普段は温和で通っている——はずの——あたしでも殺意が目覚めるのである。

とはいえ、ここで絞殺してしまうと非常にあたしが困ることになるので、取りあえず手を緩めておく。

さっきのように翼を壊されても修復できたことといい、この男は多少のダメージを受けても生き残れる自信があるからなのか、イマイチ緊張感に欠ける言動が感じられる。

「は、はあ……はあ……み、見掛けによらず力が強いな……君……」

「んな事よりも、あたしをここから帰す方法あるんでしょうね!？」

両目の端を吊り上げ、緊張感のない男を睨むあたし。

「……と言うか、普通ならもう帰っていると思うんだが……」

男は先程まであたしの手によって締まっていた首をさすりながらぼやく。

「帰ってるって……どういうことよ……」

「いや、普通の人なら最初に美琴に襲われた時点で元の世界に帰っているはずなんだけどね……」

……

男は虚空を見つめたまま、あいまいな返事を返した。

「襲われた時点で……って……?」

あたしの問いに答える前に、男はその場に急停止した。

当然、手を引つ張られているあたしもその場に釘付けにされたわけだけど……

「ど、どうしたの？」

あたしの問いに答えるよりも先に男は、あたしを……

「きゃあ!？」

あろうことか抱き寄せたのだった!

「ちよ、ちよつと! ま、待ちなさい! いったい何をする気よ!!」

至近距離に顔を近づけられたため、あたしは顔を真つ赤にしながらジタバタとその場で藻掻もがいていた。

腐つても(?)顔だけは良い男なので、気にするなと言われても無理な相談である。

……まあ、顔が悪かったとしても、ほとんど同じ行動を取ったであろうということは容易に想像できるけどね……

「じつとして頭を下げろ!」

男は振りほどこうとするあたしを一喝する。そもそも予想外に強い力で抱きしめられていたので、振りほどくことなど出来なかったけど。

「美琴……!!」

あたしを抱えながら、男は歯ぎしりを交えた厳しい言葉を吐き出した。

「なっ!？」

男は抱き寄せたあたしの方など見ておらず、先程まで何も無かったはずの目先の空間を睨めつけていた。

あたしは男に抱き寄せられたまま（非常に不本意）振り向いたその視線の先には、まさに発射準備が完了している数多の光——あの精霊輝弾とかいう光弾——を従えた一人の天使が、いつの間にかあたしたちの前に立ちふさがっていた。

初めて見た時に浮かべていた微笑みを顔に貼り付けたままの少女——美琴があたしたちの進路を阻むように浮かんでいたのである。

「い、いつの間に……!?!」

「ちっ、俺たちが漫才している間に先回りされていたか……!」

この期に及んで軽口を叩いている余裕なんてこれっぽっちも無いはずだが、それが逆にこちらには余裕がないことを表している。

あたしと男の驚愕の眩きが終わるかいなかの刹那、淡い光の翼を背にして佇む美琴はその白く透き通ったか細い腕をあたし達の方に振り下ろしていた。

それを合図にして、美琴の周りを漂っていた光弾があたしたちに向かつて一斉に殺到する!

「いやあ……!」

「くっ……!」

至近距離での直撃を覚悟したあたしは、男の胸へと顔を預けていた。

ザシュツ！

「あ、あれ……？」

しかし、何か^{えぐ}が抉られたような音が響いただけで、あたしは何とも無かった。

背^{そむ}けていた顔を上げて美琴の方を振り向くと、鷹を思わせる巨大な翼があたしと男を包んでいる。

これが美琴とあたしたちの間を遮蔽して精霊輝弾の雨あられを防いでいたのだった。

翼の外側からは『ザシュツ、ザシュツ』という不気味な衝撃が無数の羽根越しに伝わってくる。

「ちよつとつ！　こんな事が出来るなら早くやりなさいよ！」

しかし、あたしの言葉に男は何も答えない。決して無視しているのではなく、答える余裕が無いのだ。

左手のひらを翼へと向け、男は額に大粒の汗を浮かび上がらせながら、悲痛なほど顔を歪ませて歯を食いしばっている。

「……意識を集中……集中して、翼に力を込めていれば……これくらいはなんとか……」

さつきは精霊輝弾にこの翼は耐えることが出来なかつたが、今は男が『力』を集中している

からこそ、なんとか耐えしのぎ、そして防御壁として使うことが出来ているのだろう。

当然、それだけ男に負担がかかっていることは考えるまでもないことだった。

もし、この場で男が力尽きたりしたら……あたしの頬には冷たい汗が滴り落ちる。

「あたしが帰ることが出来れば……」

あたしがこの場から離れることが出来れば、この男はあたしの事を気にせずには戦うなり、逃げたりが出来るのだ。

「……どうやったら帰れるの……?」

あたしは男の左腕に抱き留められながらその顔をのぞき込むと、男の茶色かかった柔らかい毛先があたしの鼻先に触れる。

「……」

しかし、あたしの問いには答えず、男は無言で意識を翼に集中していた。

とても答えを返せるような状況じゃ無さそうね……

「……方法は……幾つかあるけど……」

ややあってから、顔を青ざめさせるほど力を使い続けている男は呻くように言葉を絞り出す。

「どんな方法?」

「……要は君が意識を失いかけるほど驚けば良いんだよ……この世界はあくまで『夢の世界』であることには変わりない。だから君が目覚ませば……」

……驚く………つて……

「いや……あたしはさつきから命の危険に晒さらされまくって、驚きっぱなしなんだけど……」
今の今まで悲鳴を上げっぱなし、驚愕しっぱなしなのである。男が言うように驚くだけでこの世界から去ることが出来るというのなら、既に帰っているはず。

この男はさつき「美琴に襲われた時点で帰っている」と言っていたのは、普通はその驚きで目を覚ましているという事だったのだろう。

しかし、それでも帰れないあたしは一体……

「……にもかかわらず、この世界から君が離れることが出来ないのは……よっぽど神経が凶太い人なのか……別の理由かも知れない……」

懸命な表情を浮かべながら、男は翼に力を込め続ける。

『凶太い』という言葉にあたしは多少こめかみを引きつらせたが、男の話の腰を折っている状況でも無いので、華麗に無視する事にした。

………後で覚えてろ………

こうしている間にも、光弾が絶え間なく翼へと叩きつけられている炸裂音がその場を支配している。

翼に遮られて美琴の様子は伺えないものの、あの笑みを貼り付けたまま、次々と弾を生み出して撃ち放っているのだろう。

「……な、なんとか君を驚かせられれば……あ……」

ハツとしたような顔をあたしに向け、声の調子をさらに落として言葉を紡ぐ男。

「……方法は……俺のポリシーに反するけど……たぶんこれなら……」

「……あなたの方のポリシーっていうのは、これっぽっちも当てにはならなさそうだけど……
どんな方法……?」

何か良い案が浮かんだようだけど、如何せんこの男が思いつくような方法である。ロクでもないことである可能性は十分あり得る。

「そ、それを言ったら効果が無いよ……どうする?」

確かに『あたしを驚かせる案』なのだから、あたしに伝えてしまつてはその効果は薄れてしまふだろう。

とは言つても、予告有りて何をされるか分からないというのには、極めて判断に困る話ではある。なので「どうする」と言われても……

しかし、ここで断れば少なくともあたしには帰る手立てはないことになり、この訳の分からないところでこの男と心中する羽目になる。

それだけは……それだけは、絶対に！ 絶対にいやだ！

こんな見た目はともかく、見知らぬ男の腕の中で力尽きるなんて真つ平ごめんである。いや、知り合いでも嫌なもの嫌だけど。

この男の考えたあたしを驚かせる方法というのは非常に怪しい……と、あたしはしばしば堂々巡りになりかけながらも思考を巡らせていた。

「ぐ、ぐつ……」

あたしが迷っている間も男は齒を食いしぼりながら、美琴の攻撃に耐えている。

いつまでもこうやって耐えきれぬわけじゃない……！

「わ、分かったわ！ あなたの案……ちよつとどころかかなり不安があるけど、採用することにする！」

その苦しい表情を見てあたしは決断した。もはや完璧にヤケである。

ヤケの結果が逃げる方法であることなのがあたし的に非常に抵抗があるけど、今までの状況を鑑みても足手まといであることは明白なのだからいつまでも意地を張らず、ここは戦略的撤退ということは無理矢理自分を納得させた。

「悪い……ね……取りあえず痛みは無いはずだから大丈夫だと思う……覚悟は……しなくていい。効果が薄れると困るから……」

ドオゴオオオオオオ——ンっ!!

そのとき、ひととき大きな衝撃があたしたちを襲った。

「のああああああああ——!!」

「きやああああああ——!!」

あたしと男は同時に叫び声を轟かせ、その場からはじき飛ばされてしまう。

あたしたちを守っていた翼が美琴の猛攻に耐えきれず、強引にこじ開けられてしまったのだ。

「ひやああああ——!!」

クルクル……と、まるできりもみ状態で落下する飛行機のようにあたしは夜空に投げ出され、少しの間あらぬ方向にその身を飛ばされていた。

あ、あの男は!?

先ほどの衝撃であたしと男は引き剥がされている。このままではあたしは完全に無防備なままであり、こんなところを美琴に狙い撃ちされたら……! —

案の定、美琴はその隙を逃してはくれなかった——

「や、やめろっ! 美琴——!」

男の叫びもむなしく、美琴はまだ残っていた精霊輝弾をあたし目にかけて解き放つ。

次の瞬間、あたしの目の前には光の弾が迫ってくる。無論、あたしの無風の中に佇む風船の如き速度では避けられるようなスピードではない。

そして、光があたしを包み込み、視界が真っ白に染まった瞬間、もはやこれまで……と目を閉じて覚悟したのだが……

バスウウウウ——ンっ！

ド派手な音を立てて光球が炸裂した……のだが……

「……ん？」

いつになつても音だけで衝撃が来ないので、恐る恐る目を開けたあたしは自分の体を見下ろしたのだが……なにも変化は無かった……

「あ、あれ？ な、なんとも……ない……？」

痛みがすぐに感じられないほど激しく身体を破壊されたわけでもなく、本当になにも起きていない。間違いなく直撃のはずだったのに。

あの精霊輝弾の威力は男の翼を易々と折るほどのものだ。あたしの華奢なボディではとても耐えきれたものではないだろう。それなのに傷ひとつ付いていないなんて。

「……ど、どういうこと!?! い、一体なにが……起きたの……？」

無傷のあたしを見て驚き戸惑っているのはあたしだけではない。

放った本人である美琴の方も表情は相変わらずだが、明らかに戸惑った様子でその動きを止めており、精霊輝弾と化していたはずの紅い糸が美琴の手の中に収まっていた。

しかし、このとき動きを止めなかったヤツがいた。一人だけ……

「い、いまだ——！」

「——えっ？」

あたしから少し離れたところに飛ばされていた男は、目にも止まらない早さでこちらへと飛んでくると漂っていたあたしの肩を強引に引つ掴んで抱き止める。

……な、何を……!?

——あたしは、この時目の前にいる男が何をしようとしていたのかをキチンと考えるべきだった——

「……えっ……?」

なんの前触れも無く行われた一連の出来事は、あたしにとって初めてのことだったので『その事』をとつさに理解することができなかつた。

自分の唇に今まで感じたことない柔らかな違和感を感じた瞬間、あたしの意識は陶磁器のようになつて白に塗りつぶされた空間へと放り出される……

「はわわわあああああ——!?」

あたしは自分の上に覆い被さっていた白い何かを跳ね除けて、その場から飛び起きた。

「はあ……はあ……はあ……」

息が荒い……というか苦しい……

あまりにもあんまりな出来事に、あたしは息をすることも止めてしまったらしい。

——つて、

「ここは……どこ……?」

上半身だけ起こしたあたしは、自分の首から下の姿を垣間見る。

服装は……さつきまでと同じパジャマ姿のまま、だけど……

一旦、正面を向いてから首をゆっくりと左右に振り、あたりを見渡した。

「あ、あたしの部屋……?」

ここは夜の上空ではなく、真正正銘、あたし——水月晶みつきあきらの部屋である。

ふと振り向くと、ついさつきまであたしの頭が横たわっていたであろう枕の横には、昨晚、

寝る前に眺めていた星野写真——星雲星団の写真のこと——が掲載されている本が転がっていた。

そしてベッドの下には、今し方あたしが跳ね飛ばした物——羽毛の掛け布団——が床へとず

り落ちてゐる。

急に起きた反動か、寝起きにしては神経がすこぶる高ぶっており、いつもはさして気にならない時計が時間を刻む機械音がいやに大きく響いて聞こえているこの部屋は——間違ひなくあたしの部屋だ——

……………という事は……………

「ゆ、夢……オチかい！」

白地の天井に向かって、誰とも無く突っ込みを入れるあたし。

まあ、あんな出来事、夢で良……くない!!

「ゆ、夢とはいえ、このあたしの……純真可憐なる乙女のファーストキスを無理矢理奪うなど言語道断! 今度会ったら首を絞めるどころじゃ済まさないわよ!!」

今さっきまで見ていた夢に『今度』があるかどうかは分からないけどね。

……………それにしても……………

「みよーに、リアリティに溢れた夢だったわね……」

あたしは膝の上に残っているカラフルなタオルケットに向け、深く、深くため息を吐いた。
まったく……夢見の悪さで疲れるなんて初めてよ……

だいたい、夢なんて見てもすぐにその内容を忘れてしまう事が多いのに、今日の夢はほとんど全部覚えていた。

「ま、夢で良かったという事にしておきましょう……」

最後の部分は記憶から本気で抹殺したいけど、天使に追いかけて回されたり、妙な男と逃げ回ったりするなんて、夢の中で十分だから。

あたしは誰ともなく呟くと、ベッドから落ちていた掛け布団を引っ張り上げ、それを被って再び眠りに就いた。

まだ目覚まし時計が鳴っていない時間ならば、優しく二度寝へと誘う、文明人には防衛不能な魅惑の魔法アイテムこと『柔らかい羽布団』に包まれていても大丈夫……のはずなのだが……

「はれ？ 窓の外がやけに明るいような気がするんだけど……」

遮光性が高いカーテンの隙間から漏れる日差しは、部屋の奥まで照らすには十分な光量を持つていた。

あたしは、ベッド横の出窓に置いてある時計を手に取り、針の指し示す位置を読み取る。

その針の位置は、長い方が十二、短い方が八……？

あたしの寝ぼけた頭がその時刻を正確に認識する前に、部屋のドアがコンコンと少し強めに叩かれた。

「あきらら〜？ そろそろ起きないと遅刻するんじゃないの？」

いつもなら既に朝食を終えている時間にもかかわらず、起きてこないあたしを起こしに来たお母さんの少し間延びした声が部屋に響く。

「……………」

「なああああ!?　ち、遅刻するうううううう——!!」
あたしは掛けたばかりの布団を跳ね上げるとベッドから飛び降りた。

そして、今日も慌ただしく普通の日常が流れ始める……………」

第1話　完

第2話 夢の調べ

「……ちよつと」

ぼんやりと黒板の方を眺めていたあたしの頭の上から訝いぶかしげな声が掛けられた。

もつとも考え事をしているあたしにはまるで聞こえていなかったのだが……

「もう……一体どうしちゃったのよ？」

返事もしないあたしに声を掛け続けてくるその声の主は、あたしの後ろに回り込んで肩を軽く揺さぶってきた。

「……あ、美樹……」

今ごろになって気付いたように口を開くあたし。

「あ、美樹……じゃないよ」

しびれを切らしたような口ぶりでその声の主である女子生徒こと、美樹があたしの机の前に回った。

星野美樹ほしのみき——通称、美樹——とあたしは中学校からの友人である。

天文部などという今時たいして流行らない、どマイナーな部活の部長をしており、所属する部員もあたしを入れても五人くらいしかいない。

『くらい』と言ったのは、それなりに部活に顔を出しているはずのあたしでも部員の数を正確に把握していないのだ。

つまり、こういうマイナーな部活のお約束、幽霊部員の巣窟になっている……というわけである。

——まあ、あたし自身も美樹の強引な勧誘に根負けして入部したようなものだけども……酷い話だけど、基本、定期的に星空を眺めていれば良いだけの部活であり、観測機器の扱いすらも未だに危ういあたしは機材の準備すらも美樹に任せつきりなので、その点は楽とはいえるけど……

その友人兼部長の美樹が顔の輪郭からはみ出るほどの大きな丸眼鏡を掛けた顔に困ったような表情を浮かべながら、あたしの顔をのぞき込む。

「どうしちゃったのよ？ そんなぼんやりして……あなたらしくも無い」

「うー……まあ、ちよつとね……」

あたしは極めて曖昧な言葉で話を濁した。あたしが今考えていた事を説明しても分かってもらえないはずもないしね……

目の前に立つ美樹から視線を外すとあたしは窓から校庭を見下ろした。

南向きに面した三階にあるこの教室の窓からは、校庭を囲い咲き乱れる桜の木々の姿がまだいくらばかりの寒さを感じさせる空模様映えているのが垣間見える。

まだ、三月も明けたばかりだというのに、季節はすっかり春の様相を呈しているのだった。

「……はあ……すっかり春ね……」

ぼんやりと眺めるあたしの口からそんな言葉が突いて出る。

「……なにか……悪いものでも食べた？」

何気なく口にしたあたしの言葉に微妙な反応を返す美樹。

——どう聞いても暴言よね、これは……

「……あたしが『すっかり春ね』なんて呟いちゃいけないかしら？」

「うん」

こくり、と何の迷いも無い真顔で頷きを返してきた美樹である。

——まあ、あたしでもそう思わないこともないけど、即答されるほどじゃないと思っているんだけど……

確かにあたしらしくないかもね。午前中の授業内容、全然記憶にないし……

あたしの最後の記憶がチャイムの音であることで正しければ、今は昼休みのはずなんだけど、美樹はなんの用なんだろう？

「それで？ あたしになにか用？」

「あ、そうそう……、別に大したことじゃないけど、もう昼休み半分終わるけど、いいの？」

美樹は自分の後ろを指さしながらあたしに問いかける。その指が指し示す先には、教室の黒

板の上に備え付けてある丸時計があるのだが……

「……え？」

あたしは指さす美樹の肩越しにその時計をのぞき見る。

「た、確かに昼休みが半分終わっているわね……」

「やっぱり……全然気がついて無かつたんでしよう？ お弁当を食べている様子も無いから、どうしちやつたのかと……」

昼休みが終わる……ちなみに今日はお弁当を持ってきていない……学食及び売店は昼休み終了十分前まで……

「……………」

あたしは、おもむろにスカートのポケットの中から小銭入れを取り出した。

そして、この中に一枚だけ入っている『我が輩は猫である』の人を取り出すと、目の前で呆れながらあたしを見ていた美樹に手渡す。

「何のつもりよ……」

美樹が訝いぶかしげな顔をして『坊ちゃん』の人を受け取る。

そして、あたしは『三四郎』の人——はもういいか——を渡した手をそのまま横へ振り……

「ゆけ！ 我が下僕一号よ！」

と、教室のドアを指差しながら涼しげな顔で言う。

「だ、誰が誰の下僕なのよ！ 誰が！」

あたしの命令にいきなし背く下僕一号……もとい美樹。

「下僕一号が不満なのね……」

「普通、そういうこと言われて嬉しい人なんていないから、絶対」

あたしの顔を軽く睨めつけながらいう美樹であった。

「仕方がない……」

またしても偉そうに言うあたし。

「？」

「ゴー！ ポチ!!」

と、また懲りずにあたしは教室のドアを指さした。

フツ！

「……ちつ、はずしたか……」

美樹はお札を握った腕をあたしに振り下ろしたが、あたしが首を横へとスライドさせる方がわずかに早かった。

「ふつ、遅いわね。あたしを小突くなんて十年はやいわ」

などと、格闘ゲームのキャラみたいなた詞を吐くあたし。

「……いかないわよ……」

ジト目で呟く美樹。

まあ、いつまでも美樹と漫才をやっているわけにはいかないわね、時間的にも。

「冗談よ。悪いけどお昼買ってきて欲しいのよ。ちよつと気分が良くないから……」

「それなら、昼ご飯より保健室の方が良いような気がするけど……何なら連れて行くよ？」

あたしの言葉に、美樹はちよつと心配そうな口ぶりになった。

「大丈夫よ。保健室で寝ているより食べた方がいらいだから、別に吐き気がするってわけでもないしね」

あたしはそういういながら、手近にあつた紙切れに買ってきて欲しい物をメモすると、美樹に手渡す。

「お釣はあげるから、よろしく」

あたしがパタパタと手を振りながら言うと「それじゃ」といって美樹は教室を出て行った。

美樹が教室を出て行くのを見送った後、あたしは頼杖を突きながら再び教室の窓を通して外を眺めていた。

この学校にはこの校舎よりも高い建物は無く、しかもここは最上階であるため——この学校

は最上級生の三年生は一階、一年生は二階となっている——、目の前にあるのは校庭だけで視界を遮るものは南の端にある野球グラウンドのバックネットくらいしかない。

さらにその視界の先には、春の陽気に照らされた白い町並みが広がっている。その中に、あの夢の中で見た建物が目に映った。

——あれを、夢の中では真上から見えていたのよね……

ふと、あたしの頭の中に夢の光景が目に見えかぶ。

静かに舞いおりる白に輝く羽根……

背に一对の翼を持った色白……天使のような美しい少女……

朱に輝く糸……漆黒の弾……

輝く光弾……再生する翼……

……そして……

がんっ！

最後のシーンが頭にフラッシュバックした瞬間、あたしは握り拳を目の前の机に叩き降ろし

ていた。

「……はっ!？」

慌てて振り向くと、教室で時間を持て余していた生徒の視線があたしに向かって一斉に集まる。

何事か、という視線を送ってくる生徒達に、あたしはしまったという表情を隠し、愛想笑いを浮かべて手をぱたぱたと振る。

「な、何でもないから、机に虫がいたから払いのけただけで……」

あたしは適当なことで言いつくろい、生徒の興味が薄れてゆくのを待つて再び視線を窓の外に向けた。

——まったく……こうなったのも、あの夢のせいよ!

今の出来事すらその夢のせいにするあたし。

実は窓の外に顔を向けているのも、怒り心頭で鬼のような形相になっているであろう自分の顔をクラスの生徒に見られたくないからだ。

取りあえず、あの夢の中での忌まわしきラストシーンは記憶から削除しておくことにする。

——それにしても、何でたかが夢にこんなに気になるんだろう……? ?

あの夢の世界は、限りなく『ファンタジー』であるにもかかわらず、奇妙な現実感のある世界だった。

存在に曖昧さが無いというか……普段の夢と違って輪郭がぼやけたような感覚があたしには湧かなかつたのだ。

だから魔法や翼も真に迫っていたと感じたし、幸いあたしに直撃するようなことは無かつたけど、攻撃が当たれば痛そうという印象も感じる事があつたし……

ま、夢の世界なんだからいかなる非現実的な出来事も、その世界においては『現実』なのはある意味当然なんだけど、あの夢はそれがあまりにもリアルさを伴っていたというだけ。

とはいえ、一口に『ファンタジー』といっても、天使に翼に魔法に銃に……と、いろいろ混じりすぎてちよつと統一感に欠ける世界だつたけど。

あたしは軽く溜め息を混ぜ合わせた息を吐きつつ、窓の外を見つめたまま力尽きたように、バツタリと机に突つ伏す。

——なんだか……考えすぎて頭が疲れてきたわね……お腹も空いたし……

あたしはお腹の鈴虫が大合唱しそうになるのを耐えながら、食料の到着を待った。

——美樹の奴遅いな……まあ、ちよつとトロいところがあるからね……

などと、美樹が聞いたなら怒り出すようなことを思いつつ、あたしは突つ伏している机を頬で暖めていた。

「こらく!!」

突つ伏していたあたしはその声を聞きつけて、体を起こすと声のした方……ドアの方を向く

と、あたしが頼んだ救援物資……もとい昼食を抱えて教室に美樹が飛び込んでくるところだった。

「なに？」

あたしはしれつとした顔で美樹を迎える。

「……あまったお金、くれるって言ったよね……？」

「言った」

「あ、あまるところかマイナスよ！ マイナス！」

美樹は売店より仕入れてきた昼食をあたしの机の上にはらまき、文句を飛ばしてきた。

「あれ？ そうだった？」

「またもすつとぼけるあたし。」

「ちなみに、あたしが書いたメモには……」

おにぎり六個

ジュース二本

デザート（プリン）一個

と書いてあるはず。

で、肝心の値段は……

おにぎり 百二十円

ジュース 百二十円

プリン 百五十円

締めて……

「千百十円よ！」

あたしの目の前にレシートを突き出す美樹。

「ご苦労様。そのレシートはあげるから」

それだけいってあたしは、机の上にはらまかれた食べ物を手に取る。

「ちよっと待て！ 食べるのはお金を払ってからにして！」

美樹は素早くあたしの手の中にあつたおにぎりを掠め取った。

「ちつ、何事も無く食べてうやむやにするという作戦は失敗か……」

「何が作戦よ、何が……」

確かに作戦も何もあつたものではないが、しぶしぶとしながらあたしはポケットから小銭入れを再び取り出し、美樹に百円硬貨と十円硬貨を差し出した。

「はい」

ピツタリのお金しか渡さないあたしに対して、美樹は顔色一つ変えずに、

「お釣をくれる件に関しては、調子の悪いというあなたに免じて今回は目をつぶってあげる」
いい奴である。

美樹は性格悪くないし、言葉遣いだってあたしと喋る時以外はとても丁寧なのだ。その容姿は男子全年齢層直撃（謎）の黒髪ロングと一部の人間には打ち勝つことの出来ない魔力を放つというアイテム（？）眼鏡という一見するとお淑やかなお嬢様風なのだしね。

しかし、天体にゲームにアニメ……という極端にマニア……というか完全にオタク趣味のため、実情を知る人からはちよつと敬遠されがちになっているところはあるのだが。

実際、その見た目のため、あたしと一緒に繁華街などで買い物していると、しよつちゆうナンプア男どもに声を掛けられている。

ちなみにあたしには誰も言い寄ってこない……という事実は取りあえず手近な教室の窓から投げ捨てておくこととして……

だが、そのナンパして来た男どもにいきなり美樹は、

『オリオン座の星雲のメシエ番号っていくつですか？』

という質問を投げかけていたのを見たことがある。

普通の一般人はオリオン座に星雲がある事は知っていても、メシエ番号まで覚えている人は

いないと思う。ちなみに答えは四十二。さすがにあたしも天文部に籍を置いているだけあつてこのくらいは知っているけど。

で、この時点で大概の男は退散している。

それでも一人くらいは、この質問に耐えた……もとい答えた奴がいたと思うけど……
だが、次の質問で間違いなく撃沈する。

『南極老人星のもう一つの名前って知っていますか？』

繁華街でたむろって、ナンパしているような輩では絶対解答が返ってくることはあるまい……
そもそも『南極老人星』というものが理解できないだろう。

まあ、それはいいとして……あたしとしては、美樹の家に行くたびに格闘ゲームの相手を延々とさせられるのは勘弁して欲しい。当然、やりこんでいる美樹に勝てることはほとんどないし。美樹に不足分のお金を渡したあたしは、改めて机に並べられたおにぎりを手に取る。

「それにしても良くこれだけ食べれるね……」

美樹はあたしの前の席の椅子を後ろに向けると、それに座ってから感心したような呆れたような顔で呟く。おそらく後者だろうけど。

「今日は寝坊しちやって、朝食を抜いてきたから……」

既に二個目をおなかに入れ終わったあたしは、ジュースを手に取る。

「ふん……」

あたしのおにぎり食べている様子を何ともいえない表情で眺めていた美樹は、ふと教室の窓へと視線を移した。

「それじゃあ、今日の帰り、商店街に寄ってかない？」

美樹は窓の外を見つめたまま、そんなことを呟く。

「え？」

三個目を口に頬張っていたあたしは意外な誘いに驚いていた。

というのも、美樹はあまり繁華街とかは好きではない、前述のようにナンパが多い所せいがその一因にあるからだけど。

「いつも買っている今月号の天文雑誌、まだ買ってないから買いに行くんだけど、どうする？」

「あたし、調子悪いんだけど……」

別に行きたくないわけではないけど、あたしは遠慮気味に答える。

「無理には言わないけど、別に身体の調子悪いわけじゃ……ないんでしょ？」

す、鋭い！

普段の美樹からは想像できないほど鋭い指摘が飛び出した。

「……なんで分かったの……？」

四個目の手を止めたあたしに美樹が得意そうに胸をそらす。

「伊達に四年以上の付き合っていないわよ」

美樹は手をパタパタ振りながら微笑んでいる。

美樹とは中学一年からの付き合いがあり、一緒にいる友人としては今までで一番長いとは思
うけど……

「ま、半分は当てずっぽうだけどね」

軽く舌を出しながら微笑む美樹。

「……でも商店街、あまり好きじゃないでしょう？ 美樹は」

「何を言ってるの。あの雑誌は商店街の本屋さんじゃないと扱っていませんよ？」

確かに天文関係の雑誌は一部の大手誌を除くと大きい本屋でしか扱ってないことがある。

しかも美樹が購入しているのは大手誌ではなく、少しマイナーな雑誌であるため、この付近
で扱っている店は商店街のとある本屋しかない。

「……了解」

あたしはある意味、美樹に根負けして買い物に付き合うことを承諾する。

「それじゃあ、また放課後に」

美樹はあたしの前から立ち上がり、椅子を元に戻して自分の席に戻って行った。

あたしはその後ろ姿を目で追いながら、五個目をたいらげる。

——心配……してくれていたんだ……

あたしが身体の調子が悪いわけではないことを見抜いたのにも驚かされたけど、それを心配

して好きでもない商店街に誘ってくれた事には正直嬉しい。

——商店街……か……少しは吹っ切れるかもね。あたしも買い物でもすれば……

あたしは気を取り直し、目の前に置かれた本日六個目、最後のおにぎりにかぶりついた。

☆

——放課後

あたしは部室へ荷物を取りに行った美樹を昇降口の外で待っていた。

空には黄色い光が彩りを添え始めている。あと数時間もしないうちに空は赤く染まり、そして夜を迎えるのだろう。

思わずしんみりとした面持ちであたしは西の空に傾いた太陽を見つめてしまっていた。

——つと……いけない、いけない。これじゃ、何のために美樹が商店街に誘ってくれたか分からないじゃないの……

気を取り直して空から視線を降ろすと、ちょうど美樹が昇降口から出てくるところだった。

「お待たせく。さっ、行きましょう」

小走りに追いかけてきた美樹はあたしの肩をぽんつと叩いてから一歩前を歩く。

それに併せてあたしも校門を目指して歩き始める。

西の空から放たれる黄色の日差しが並んで歩くあたしと美樹を照らしていた。

「あんまり暗くならないうちに帰りたいけど、まだこの時期は日が短いからねえ」

「そうね……」

あたしは黄色い光に目を細めながら頷く。

桜が咲き始めているとはいえ、日の光が落ちてくると次第に冬の寒さが戻ってくる。

あたしとしても早めに帰りたいところだ。

「で、どこから行くの？」

あたしの隣を歩く美樹に声を掛ける。

「とりあえず、本屋だね。それから……」

「あつ、あと駅ビルにも寄りたいんだけど」

「いいよ」

本日の商店街周遊コースは、数分にわたる検討の末、本屋↓喫茶店↓駅ビル↓解散となった。

検討も何もいつもと大して変わらないという説もあるけどね。

こうして見て回る店を相談している間に目的の商店街に着いていた。

あたしがいつも通学に使っている道とは違って道行く人の数も多い。

時間的にどこの学校も終わる時間だし、夕食の買い物に来た主婦も見受けられる。

しかし、大抵休日しか商店街に來ないあたしには、普段以上の混雑具合に見えた。

「なんだか、休みの日より混んでるような気がするわね」

「うちの生徒なんか、放課後に友人と來る人たちがほとんどだろうしね」

「ま、わざわざ休日昼間を選んで來ているあたし達とは違うか……」

あたしと美樹はアーケードで覆われた商店街の中へと入って行つた。

商店街の通りは外から見た時よりも多少空いているように見える。

混んでいるように見えたのは、學生達がアーケードの入り口の周りでたむろしていたためだろうか？　ほかにも主婦達が井戸端會議をあちらこちらで開催していたりするし……

あたしたちはその合間を縫うように歩き、アーケードの反対側の出口を目指す。実はこのアーケードは商店街にあるすべての店舗を覆っておらず、目的の店はそのアーケードの恵みから外れた場所に位置している。

「それじゃ、とりあえず三洋堂へ行きませんか」

三洋堂とは、この商店街で一番大きな店舗を持つ本屋であり、今回買いに來た雑誌はこのあたりではここでしか扱っていない。

とはいえ商店街の一角に収まるサイズなのだから、郊外にあるような広い床面積を持つていような店ではないけど。

五階建ての店舗に本の棚がギッシリと並んでおり、とてもゆったりとは言えないお店ではあ

るけど、一部かなり特殊な分野の専門書を数多く扱っているコーナーがあり、そのためか学校の先生などが利用しているのを見かけることが多いし、近くの大学の学生が資料探しに来ていることもある。

ただまあ、見た目が非常に古びているせいもあるためか一般の人にはちよつと受けが悪い。「いつも思うけど、三洋堂って奥の本棚に古代魔法書でも眠っていそうな雰囲気があるよねえ」

「たしかに……」

それほど極端に古い建物というわけではないのだけど、隣近所の商店街の店舗と比べてみると確かにそういう雰囲気醸し出していた。

あたし達は並んで三洋堂のドアをくぐる。ちなみに自動ドアなどという現代装備ではなく、ガラガラガラと古めかしい音を立てる引き戸になっている。

「いらっしやい。……おや、君たちか」

「こんにちは、店長」

出入り口の隣に設けられたカウンターで新聞を広げていた店員にあたしは軽く挨拶を返す。

この人はこの店の店長で、唯一の店員……まあ、個人経営の店舗なのだからそんなものだろう。

高校生がこの本屋に来るのが珍しいのか、あたしと美樹はすっかり顔なじみになってしまっ

ている。

「店長さん、いつもの本……月刊スカイガイド、入っていますか？」

「ん？ ああ、いつも君たちが買ってきてくれる本だろ？ 昨日発売日だったからね」

そういつてから、店長はカウンターの後ろに備えられている棚から一冊の雑誌を取り出す。

「はい、スカイガイド空ガ」

店長はこの本が発売されるとあたしたちが買いに来るのがわかっている、いつも取っておいてくれるのだ。

実はこの店で天文関連の書籍は一番上の階・五階の一番奥という配置なのである。

この取り置きのおかげで、普通の女子高生の体格ですらすれ違い不可能な極めて狭い階段を上り下りする必要が無くなるというのが非常にありがたい。

「いつもありがとうございます」

あたしと美樹は店長に頭を下げる。

「いやいや、高校生くらいの子じや君たちがお得意さまだからね」

そういつて笑みを浮かべながら軽快にレジを叩く店長。

「……つと、いや、そういえば昨日の発売日に君たちと同じ学校らしい男子生徒がその雑誌を買って行ったなあ……」

レジを打ち終えた店長があたしたちを見ながら呟いていた。店長の様子から察するに、きつ

とその当人は制服を着たまま買いに来たのだろう。

それはあたしたちの学校の指定制服はブレザーであるため、上着は男子も女子も変わらないからである。

「へえ〜こんなマイナーな本、美樹のほかにも買う奴がいたんだ……」

店長の言葉にあたしは思わず感心してしまった。

「そ、空方は、マイナーじゃないもん!!」

横でふくれっ面になる美樹。

この月刊スカイガイドは、どちらかと言えば少年少女向けの天文雑誌で、それほどマニア向けの内容は扱っていない。

しかし、あたし達を含めて『理科離れ』が進行しているこの世代では売れ行きはイマイチのようである。……休刊という名の廃刊にならないことを願いたいわね……

美樹は店長からお釣りを手渡され、次に紙袋に入れられた雑誌を受け取っていた。

「毎度〜」

店長の声に送られて本屋を後にするあたしと美樹。

「店長さんのおかげで買い物が早く済んだね」

買ったばかりの雑誌を片手に美樹があたしの方を向く。

「早く済んだのはいいけど、もっと見て行かなくていいの？」

美樹はこの三洋堂自体がお気に入りらしく、大抵の本はここで購入しているらしい。そのこともあり、いつもなら空ガを買った後も数時間は粘り続ける美樹らしからぬ行動である。

「ああ、今日はいいの、いいの。これからあなたの悩みを聞かなきゃならないんだから」手をひらひらと振りながら美樹は歩き出す。

「……うん」

美樹の後を少し遅れて歩き始めるあたし。

三洋堂を後にしたあたしたちは、この商店街の外れにある喫茶店へと歩き始めた。

——悩み……ねえ……

確かに『悩み』であることは間違いないんだけど、そもそもどうして高々たかだか一夜見た夢がこんなに気になるのか自分でも不思議でならない。

なお、断じてあのセクハラ男が気になるとかいう浮ついた悩みではないことをここでハッキリさせておく。自分的に。

ただし、殺意は沸くけど。

それはともかく、内容が内容である。人に話してなんとかなるようなわけでもないけど、美樹が心配してくれることだけは素直に受け取っていいよと思った。

「それにしても、空ガを買っていった他の生徒って誰だろうね？」

あたしの前を歩いていた美樹が話題を切り替えてきた。

「うちの部の誰かじゃないの？」

「なにいつてるのよ。うちの部員がこの雑誌買うような人たちじゃないのは、よーく知っているでしょ？」

あきれた顔をして言う美樹。

確かに、他の部員はとりあえず入っておこうという程度か、又は元々美樹が目当てだったナンパ野郎である。

前者はいるだけマシ——部費確保のためとは美樹の言——なのだが、後者は鬱陶しいことこの上ない（特に美樹にとっては）。

まあ、大概是美樹の性格についていけなくて惨敗するのがオチだけど……

どちらにせよ、星空に興味があるような連中ではないことは間違いない。

「まあ、店長が言うにはつい昨日って話だから、転校でもしてきた人か、最近興味を持ちだしたかのどちらかでしょうけど」

「そういう人がうちの部に入ってくると、ものすごくありがたいんだけどねえ」
ため息を吐く美樹。

こればかりは美樹とあたしの力だけではどうにもならないが、少しでもいいから天体に興味を持って、部室に顔を出してくれるような人材がほしいところだ。

毎回の観測会が二人プラス顧問の先生だけでは、さすがに寂しすぎるしね。

「まあ……興味があれば向こうからやってくるでしょ……」

とあたしが言いかけたとき、

「ちよ、ちよつと……いいかな？」

見知らぬ男Aが歩道を並んで歩いてきたあたしと美樹を小走りで追いかけているが、声をかけてきた。

しかしこの場合、正確に言うと言をかけられたのはあたしたち……ではなく『美樹だけ』というのが現実である。

……実に悲しいことに……

そこらの芋に声を掛けられるのならば同情もするが、美樹に対しては老若男女……ではなく、美男美女……でもないか……とにかく、商店街など人が多いところを歩いていて、男に声を掛けられることが無い方が珍しい。

それでも最近は美樹の正体がばれてきたのか、以前よりも減ってはきているのだが。

うらやましくない……と、思いたい……

「おい！ 待ってくれ」

あたしが切実な願いを胸に秘めていることなど露にも思わないであろうその男はなおもしつこく声を掛けてくる。

美樹とあたしは声を掛けてきた奴は大概無視している。こういう輩の大抵はただのナンパ野郎だからだ。

ほとんどの場合は、一回無視しただけでそれ以上迫ってくることは少ないが、今日のは少し手強いようである。

「美樹、お呼びよ」

あたしは心底めんどくさそうに美樹を促した。

「ええええく!? あなたじゃないの?」

こちらもきわめて不服そうな顔をして口を尖らせている美樹であった。

「んなことあるわけないでしょ! ほらほら! さっさと追い返す!」

想像することすら出来ないような戯たわけたことを抜かす美樹の背中を強引に反転させ、なおもしつこく追いかけてくる男に向けて突き飛ばす。

「き、きやつ!」

不意打ちとなった美樹はバランスを崩してそのまま男に向けてつんのめるように雪崩れ込む。そして、突然なことなのは男の方も同じであった。

「な、なにつ!」

ほすつ!」

よける間も無く美樹のぶちかましをまともに腹に受ける男。

ちなみに美樹のどたまがもろにみぞおちに入っていた。あれは痛いわね……

「ぐはあ……」

「い、痛たたたあゝ」

美樹は頭を抱えたまま地面にへたりこみ、男の方はその場で七転八倒していた。

しばらくすると美樹はなんとか立ち上がってきたが、男は打ち所が悪かったか、いまだピクピクと身を悶えさせている。

「悪しき存在ものは、滅するが定め……」

明後日の方向を見つめながら、どこぞのゲームの主人公のような台詞を呟くあたし。

「わ、私を犠牲にしないで!」

「美樹という尊い犠牲もあったがこれで平穏な日常が守れた……さらば美樹……君のことはたぶん三十秒で忘れるだろう……」

後ろでわめく美樹の抗議を一切合切無視して続けるあたし。

「き、君たち……め、滅茶苦茶するな……」

なおも口上を続けようとしていたあたしへと、復活した男がうめくような声を発した。さすがにさっきの攻撃によるダメージは大きいようである。

「はっ!? 美樹を尊っていたら復活してしまった!」

「死んでない、死んでないから……」

すっかりあきれている美樹に、

「あんたがやったんだからとりあえず謝っておきなさい」

と無責任な事を言うあたし。

「ど、どうして私が謝らなければならぬのよお〜!」

ぼかぼかとあたしの頭を叩く美樹。

「まあいいわ。美樹、いつものヤツでさっさと追い返しなさいよ」

「ぜんぜん良くないけど、あなたの追求はあとまわしにして目の前の敵を殲滅するのが先決……

よね!」

すっかり悪の帝王役にされてしまっている不憫な男であった。

それよりもあたし達のやり取りを見ていた男の表情は、声を掛けるべきではなかったかと思つているようで、あからさまに目があらぬ方向に泳いでいるけど。

「ゴホン、それでは改めて……。私になんのご用ですか?」

男の目の前に立って、につこりと微笑みながら言う美樹。

「い、いや、ちよつと君たちに用があつて……」

「では、次の問題に答えてください」

「……………へ？」

美樹の言葉に間の抜けた返事をする男。

男の態度にも美樹は変わらず、にこにここと笑みを顔に貼り付けている。

実のところ、この『問題攻撃』がすっかりお気に入りになっていたのである、美樹は。

まあ、ナンパ男うるさいハエに囲まれるの覚悟で態々わざわざこれをするために商店街へ来ることはない…………と思

うけど…………

「では、第一問、『オリオン座の大星雲のメシエ番号は何番でしょうか？』」

「M42」
メシエ

「……………！」

「……………!？」

そ、即答!？」

……………ちよ、ちよつとはやるようね…………

美樹も少し驚いているようだが、気を取り直して再び口を開いた。

「……………正解です。それでは続けて第二問、『南極老人星とは一体なんでしょう？』」

「全天で二番目に明るい一等星・竜骨座りゅうこつざのカノープスのこと」

スラスラと美樹の質問に答える男の態度は少しの迷いも見せない。

——そ、即答の上に、きちんとした説明付きなんて……………!？」

あたしは思わず心の中で身構えてしまった。

こいつ、かなり手強い……！

「……この試練に、ここまでたどり着けた人はあなたが初めてです」

質問を投げかけている美樹自身も正直かなり驚いている様子である。

無理もない。ただのナンパ男だと思ったら、夕暮れ時の街中で真つ正直に天体関係の問題に素で答えてくるヤツが出現したのだから。

「し、試練って……」

ちよつと引き気味に呟く男を無視し、何やら思案をはじめた美樹。

恐らく次の問題を考えているのだろう。実際、この第二問を突破した者はあたしが知る限り未だかつていない。

なので、次の問題が何になるかはあたしにも分かってはいないのだ。

「……では、第三問、これが恐らく最後の問題になります」

「はあ……」

「『植物の名前の付いた星座は？』」

男はちよつと首をひねり思案顔になったが、次の瞬間には顔を上げきっぱりと言った。

「……………無いよ」

ぐはあ!?

男の回答にあたしと美樹は激しい衝撃を受ける。

せつ、正解……

そう、全天八十八星座ある中で、植物の名前の付いた星座は存在しない。

これで適当な名前が出てきたりしたら、一発で似非えせであることがばれるのだが……
つまりこの男は少なくとも全天の星座の名前を一通り見たことがあると言うことだ。

「……正解です」

美樹はあきらめ顔になって呟いていた。

「では、私に何の御用ですか？」

「おおおおおおおおお!!」

あたしは思わず感嘆の声を上げてしまう。美樹にここまで言わせたヤツは当然ながら初めてだからだ。

これでこの男はほんの少しの間、あたしの記憶にとどまるという栄誉が与えられるだろう。

「……い、いや、君じゃ……ないんだけど……」

少し身構えた表情を見せている美樹に対して、申し訳なさそうに呟く男。

「……え? じゃ、じゃあ……」

男の言葉にあっけに取られた美樹が後ろを振り返る。

そこには固唾を飲みながら成り行きを見守っていたあたしが当然立っているわけだが……

「……も、もしかして……あ、あれ？」

「あ、『あれ』って——っ！ ゆ、指さすなあああああああああ!!」

あたしを指さしながら唾然としている美樹に力いっぱい怒声を浴びせかけた。

「あたしは異形の人か!？」

即座に突っ込みを入れたものの、とりあえず美樹の不敬な発言・行動はおいといて……

「……じゃ、あたしに何か用なの？」

あたしの言葉に頷く男。

今までただのナンパ男としか認識していなかったが——あたしと美樹から見ればこの程度の識別である——よく見るとうちの学校の制服を着ていた。

そんなものにも気付いていなかったのかと突っ込みが入りそうなものだが、女子の制服に比べ男子の制服はあまり特徴が無く、近隣の学校の制服と大してデザインが変わらないのである。見分けを付けることが出来るのはネクタイのデザインくらいなものだが、そのネクタイに織り込まれている糸の色からするとあたし達と学年は同じみたいだ。

……が、その容姿はそこらの芋の煮っ転がし男に比べれば遥かにマシ……というか、かなりいい方、いわゆる美形とかいう稀少異種族に属していると思う。

これだけ『顔が』まともな男子生徒が同じ学年にいれば、他のクラスであろうとも噂に聞かえてきてもおかしくないのだが、あたしや美樹にはさっぱり見覚えがない。

「うちの生徒みたいだよ？」

美樹もそれに気がついたようである。

「そ、そのようね……」

「……ということは……」

いきなり美樹が男に向けて一歩前に出ると、

「はい決定！ おめでとうございます！ パチパチパチ！」

などとこやかに言いながら、口と手で拍手を響かせ始めた。

そして、おもむろに鞆の中から茶封筒を取り出すと、正体不明の天体男にそれを手渡す。

「……これは？」

「これまで誰も成し得なかった全問正解の景品です。どうぞ開けてみてください」

訝しげな表情を見せつつも男は美樹から手渡された封筒を開封——元々糊付けはされていなかったけど——し、二つ折りで中に収まっていたコピー紙を取り出す。

「こ、これは!？」

取り出した紙に書かれた内容を見て、驚愕の声を上げる男。

一体何が書かれていたのか……あたしは男が手にしているその紙を横からのぞき込む。

『入部届』

そこにはそんなタイトルが書かれていた。

「霧ヶ崎高等学校天文部によくこそ！ 我が部はあなたのような人材を求めています！」

美樹は満面の笑顔を浮かべながら、唾然とする男とあたしに向けて高らかに言い放つ。

ちなみにうちの学校の入部届は各部共通の書式なのだが、その入部届には既に入部希望部名の欄が『天文部』で埋められているのが、なんとも……

美樹……あんたいつもそんなもの持ち歩いていたのか……？

四年の付き合いがあるけど、美樹は未だにあたしの知らない隠し技を色々と持っているような気がする。

「……いや別に、天文部に勧誘されに来た訳じゃ……」

入部届を手にとっても困った顔をしている男。

そりやそうだ、道ばたで人に声を掛けたら入部届を渡されて「天文部に入ってください」なんて勧誘されたらあたしだって困る。

「……まあいいわ、あなたの入部の件はまた今度にして……それよりあたしへの用ってなに？」
このままにしておくとは本題にいつになっても入れそうになかったので、話を戻し改めて尋ねるあたし。

「そうしてほしい……」

心底疲れたのか、ため息を混せて呟く男。

本題に入る前に当の本人が力尽きかけているわね……

「とりあえず、君に話があるんだけど……、とつ、その前に俺の顔に見覚えはない？」

男は気を取り直しながら、自分の顔を指さし、そんなことを宣った。

覚えてないかっていわれても……ね……

うちの学校は一学年はそれほど人数が多いわけでないけど、それでも二百人くらいは優にいる。

廊下ですれ違った程度くらいでは、顔を覚えているはずもない……のだが……

何故か、あたしには一つだけ思い当たる節があった。

そう、出来るものなら記憶から削除したことも忘れたいくらの忌まわしき出来事に出てきた、一人の人物……

額から脂汗が浮かんでくるような暑苦しさを我慢し、忘れたい記憶の中からその面影を手繰り寄せて……そして、間違いないことを確信する。

背中から生えていた『アレ』は存在しない、だが、しかし………

「その様子だと、やっと思ひ出したみたいだな……」

あたしが腑に落ち切れていない顔を見せると、様子を伺っていた男が呟いた。

「……まったく……君のおかげであの後も大変だったよ……」

その言葉でハッキリとした！

「ごしやつ！」

次の瞬間、あたしの渾身の力を込めたりパー撃ちが、見事に男の腹へと突き刺さっていた。

「ぐはあ!？」

またも地面にひれ伏して悶絶することになる男。

「はあ、はあ、はあ……」

普段では考えられないほどに力をその一撃に込めたためか、殴り飛ばしたあたしの息まで荒くなっていた。

「な、なにを……」

息絶え絶えで呟く男へさらに掴み掛かろうと息巻いていたあたしを後ろから美樹が押しとどめる。

「ちよつ、ちよつと！ 一体どうしたのよ!? こ、この人あなたの知り合いなの？」

「知っているけど、知りたくない！」

我ながらわけの分からない言葉を発しながら、力いっぱい腕を伸ばして男につかみかかろうとするあたし。

「は、放せ！ 美樹！ 可憐なる乙女を冒涇した罪は重いのだよ!!」

「あ、あなたが、可憐とか乙女とかはぜんぜん違うと思うけど、お、落ち着いて……!!」

「こ、こいつは……こいつは！ あたしの大事なものを奪ったのだよ!!」

あたしの叫びに美樹はおろか、周りを歩いていた道行く人々までが一斉にあたしを凝視した。
……あ………

自分で言っておいてとんでもないことを口走ったような気がする……

「……あ……」

後ろであたしを止めようとしていた美樹までが口を開けて啞然としていた。

……がはっ!?

周りからめちやめちや微妙な視線がザクザクと突き刺さってくるのを感じ、恐る恐る横目で辺りを見渡すと案の定、学生やら主婦やら通りかかった人々から生暖かい好奇の視線が集まっている……

と、ともかく、この場は逃げるのみ!

「……と、とりあえず来なさい!」

あたしは未だ悶絶している男を無理矢理引っ張り上げ、ズカズカとその場から逃げるように歩き去ろうとする。

「え？ あつ、ま、待つてよ……！」

それを追いかけるように、美樹が律儀にもあたしと男の鞆を抱えながらついてきた。

「……げ、現実世界でも全然かわらん……君は……」

後ろからついてくる男が力なく呟いた言葉をあたしは聞き逃さず、

「黙れ！」

振り向きざまそのアホ面へとカウンター気味に拳を叩き込んだ。

「とつとつついてきなさい！」

顔面を抱えながらも、大人しくついてくるようになった男を引きずりながら、あたしは商店街の外れはずの方まで歩いていった。

☆

「……で、あたしに何の用なの？」

目の前に座り、懺然ぶぜんとした顔で静かにしている男に向かって、あたしは怒気やら殺気やら……とにかく負のオーラをしこたま詰め込んだ言葉を言い放つ。

あの後、商店街の外れにある喫茶店にこの不貞の輩を引っ張り込み、向かい合わせのテーブル席に無理矢理座らせたのだ。

ちなみに、あたしの隣には荷物を運んでくれた美樹も興味深そうにしながら座っている。

「まあ、大した用じゃ無いんだけど……」

男はあたしの表情を見ながらため息をつくように呟いた。

「そんなに目くじら立てないでくれ……親の敵じゃないんだから……」

「お、親の敵より憎いわあ！」

「それは親も可哀想に……」

………!!

「ふが!？」

あたしは不屈きなことを宣う男の口に両手を突っ込み、強引に左右へとこじ開ける！

「ふ、ふがつ！ ふがふがあ!？」

「ぎ、戯れ言を言うのはこの口かああああああうっ!!」

あたしは軽口を叩く男に制裁を加える。

「お、落ち着いて！ 大切な新入部員なんだから！」

律儀に止めに入ってくる美樹である……が、どさくさに紛れて不当なことを口走っていたりするけど。

「……うぐ……」

あたしの腕は美樹に掴まれてその動きを止め、解放された不貞男が口を押さえて痛みを訴え

ていた。

それを黙殺し、あたしはテーブルに置いてあつたナプキンで手を拭いてから再び席に腰を下ろす。

「……で？ 用件を聞こうじゃないの」

ようやく落ち着いてきたあたしは口を開いて、男に用件を促す^{うなが}。

「いや、ちよつと一緒に来てもらいたいところがあるんだけど……」

「……なんで、あんたみたいな怪しいヤツなんかについて行かないよ!?」

テーブルを叩きつけかねない勢いで拳を振り上げたあたしを見て、
たの男が腕を交差させて身構えた。

「い、いや……、あ、『あの事』について、話をしたいんだ」

「……『あの事』……?」

『あの事』と言われて思い当たる節が色々あるけど、とりあえず一纏めにすればあの『夢』の事でしょうね。

さっきこの男があたしに向かつて呟いた言葉『現実世界でも、全然変わらない』からすれば、あれは夢であり、その同じ夢をあのとこの男とあたしは共有していたことになる。

——ひっじょーに不本意だけど……

そして、その事をあたしも、そしてこの男も覚えているわけだが……。

夢の通りなら、この男はあの夢の世界がどのようなところなのかを知っているはず。

「……夢のことね……?」

あたしの言葉に軽く頷きを返す男。

「夢?」

隣で首を傾げている美樹を無視してあたしは言葉が続ける。

「あの世界が一体どういう世界なのか知らないけど、あたしを巻き込まないで頂戴! それだけよ!」

「いや、まだよくわからんけど……このままだと、たぶんまた巻き込まれるよ」

あたしの一喝をさらりと流して、事も無げに言う男。

「巻き込んでいるのはあんたじゃないの!」

エキサイトし始めたあたしはテーブルに両手を突き立てながら叫ぶ。

「いんや、俺のせいじゃないよ」

困ったような表情で手をぱたぱたと振る男。

「それじゃ……!」

「あの……」

あたしの横から申し訳なさそうな声がある。

「なに!」

振り向くと、目尻を尖らせたあたしの顔と声に吃驚びっくりしたウエイトレスのお姉さんがそこに立っていた。

「ひっ!? も、もうしわけありません……た、他のお客様にご迷惑が……」
「はっ!？」

あたしは我に返り、慌てて周りを見ると他のお客の視線があたしを中心に集まっていた。

……かああ!？」

ま、またやってしまった……

「……すいません」

あたしはウエイトレスさんに頭を下げてイスに腰を下ろす。

ちなみに男は平然と周りからの視線をもとせず、美樹に至ってはもはや他人のふりをしていた。

「……で、あたしをどうするつもりなの……?」

恨めしげな視線で男を睨め付けるあたし。

「だから一緒に来てもらいたいだけだ」

「何のためによ?」

「会わせたい人がいるんだ」

といて男は腕にはめていた時計へと視線を落とす。

「十七時か……まだ、間に合うな……」

男はあたしに視線を戻してから「どうする？」と問いかける。

そこでしばし考え込むあたし。

……確かに夢の中とはいえ、わけも分からずあんな事に巻き込まれるのはごめんである。ここは一つ、その理由を確かめるのも悪いことではないと思うが……

あたしは目の前に悠然と構えている男を見た。

……ども、信用ならないのよね……コイツ……

「……分かったわ……ついていってあげようじゃないの！」

あたしは意を決して返事を返した。

「やれやれ……もう少し素直についてきてくれてもいいようなものだけどな……」

肩をすくめると大げさに首を左右に振る男。

「あんたなんか言われたくないわよ！」

「……何も知らない仲じゃないだろう。だってキス……」

男の言葉が空気に伝わるよりも早くあたしの手が動いていた。

「ま、ま、ま、ま、まだ！　い、言うかこの口はあああああああゝゝゝゝゝ!!」

今度は縦に口を無理矢理こじ開けるあたし。

「ふがつ！　ふがつがつ!!」

何やら抗議の声を上げてゐる男を無視して、あたしはひたすら口を広げる手に力を込め続ける。

後ろからあたしの腰をつかんで止めようとする美樹がいたりするが、怒りの火のついたあたしには全く無駄である。

……この騒ぎは、ウエイトレスのお姉さんが店長さんを連れてきて、あたし達が店を追い出されるまで続いたのであつた……

☆

「まったく……酷い目にあつた……」

男は顎をカクカクと捻りながら呟いた。

「それはこつちの台詞よ！　これで二度とあの店には入れなくなつちやつたじゃないの！」
先ほどの喫茶店を追い出されてから、あたし達は駅の方に向かって歩いてた。

当初の予定通り、駅ビルに向かつているのだが……

「ねえ……あの人と一体どういう関係なの？」

当然の質問を今更ながらしてくる美樹。

……まあ、今までの騒ぎでそれすらもできなかったという説もあるが……

とはいえ、どういう関係と言つても説明には非常に困る。
あたしだって、あの男を『知っている』わけではないのだ。
夢を共有していたと言う不可思議なことを除いて……

「……………」

あたしが返事に窮して沈黙していると、前を歩いていた男が振り返り、

「まあ、一応知り合いつてところかな……」

と勝手に回答する。

「……知り合いにはなりたくないけどね……」

無然とした表情で突き放すあたし。こんなやつと知り合いになるなんて、あたしにとっては不本意以外のなものでもないのだから。

お互いの言葉を聞いた美樹は、あたしと男を交互に見ながら呟く。

「夫婦漫才……」

ぐげっ

あたしが放った電光石火のラリアートが美樹の首に突き刺さる。

これにより美樹はしばらく大人しくすることになった。

「……し、親友でも容赦しないな……」

崩れゆく美樹の姿を男は呆然と見ている。

「親友じゃ無かつたらこの程度では済まないわよ……」

あたしは冷たい視線で地面で藻掻もがいている美樹を見つめながら静かにぴしやりと言い切った。

「これが……この程度なのか……？」

首を押さえながら歩道の上で、のたうち回っている美樹を男は不憫そうに見下ろしている。

「不適切な発言をした美樹が悪い」

きつぱりと言い切つて男に振り向くあたし。

「で、どこにつれて行くつもりよ？」

「とりあえず、あそこまで……」

といいながら、男はその場所を指で指し示す。

その指の先には夕闇に染まった街外れの小高い丘があり、その中には薄暗い光の中でも映えて見える白い建物が浮かんでいた。

「あそこつて……病院じゃないの……？」

目を凝らしてそれを眺めているあたしの言葉に男が頷きを返す。

この町で唯一、入院病棟がある大きな病院で、周りを綺麗な森で囲まれた場所にあることもあり、他所の人からは希にホテルか何かと勘違いされることがある。

「そ、これからあの病院に行く」

そういつて歩き始める男。そして、そのうしろを渋々と黙って付いて行くあたし。

この男を信用しているわけではないが、全くの嘘をついているような気はしないからだけだね。

「美樹、今日はつきあってくれてありがとう……これからあたしはこの男について行くから……」

そこで言葉を区切って、あたしはビシツと指を男の背に向ける。

「あたしに何かあったらこいつのせいだから、よおつく顔を覚えておいてね！」

「……信用ゼロかい……」

振り向いてジト目で呟く男。

「……分かったわ」

美樹は静かに微笑む。

しかし、その瞳はどことなく生暖かいというか、非常にいやらしい目をしていた。

「……な、何よその目は……」

「……全く、何を悩んでるかと思えば男とはね……」

いやはやと言った表情でわざとらしく首を振る美樹。

「……んな!? じよ、冗談でもそんな事言わないでよ！」

あたしは、思わず叫び声をあげた。

「なんで、あたしがこんな変態に！」

「どーでもいいが、人を勝手に変態呼ばわりしないでくれ……」

うしろで疲れた声を上げる男。

当然そんな呟きを無視してあたしは言葉を続ける。

「いい！ この男に付いて行くのは確かに悩みを解決するためには違いないけど、そんな浮ついた話じゃないのよ！」

「はいはい、全く羨ましい事で……」

あたしの言葉を全く意に介していない美樹であるが、町に出れば声を掛けられまくるヤツには死んでも言われたくない台詞である。

「いいじゃない、取りあえず顔もいいし、なおかつ天体に詳しいなんて私が代わって欲しいくらいよ」

美樹……あんたの場合、後者の方が重要だろう……

まあ、天体の事はともかく顔がいいのは取りあえず間違い無い。

何度も繰り返し返して申し訳ないけど、悔しいことにこの男、顔は悪くない。だが、如何せんこの性格の悪さである。

これまでどれだけの子を泣かしてきたか想像に難くない。

「……もしもし、もしかして俺の悪口考えてないか？」

何やら思案をしているように見えたあたしに向かって男が言う。

「気のせいよ。何も顔がいいけど性格悪いとか、これまでどれだけの女の子を泣かしてきたのかとか考えていないから」

「……十分、考えていたみたいだな……」

顔をしかめる男。

「それより遅くなるとまずいんでしょ？」

「……ああ、そうだったな」

再び歩き出す男。

「それじゃ、また明日」

あたし達を見送りながら、手を振る美樹。

日に陰って良く見えないが、その表情がにやついた笑いである事は間違い無い。

くっ！ ……み、美樹のヤツ……明日、覚えてなさいよ……!!

☆

あたしはこの正体不明の性悪優男に連れられて、丘の上にある病院の前まで来ていた。

実はこの病院にはあまり来た事が無かつたりする。

入院病棟が併設されているくらいだから、よっぽどの大病を患わずらわない限り用の無いところだからかもしれない。

以前来た時も、入院した友達のお見舞いの時だったし。

「ちよつと待ってて、手続きしてくる」

男は受付に面会の手続きを取りに行く。

——面会手続き……?」

という事は男は喫茶店で言っていた通り、誰かにあたしを会わせようという事なのだろう。

一体誰に……?」

この男の知り合いということなのだし、あたしの知らない人であることはほぼ間違いないだろうけど、何の面識も無い人とあたしの『あの夢』とどういう関係があるのだろうか?

頭に浮かぶ疑問は尽きないが、あたしが考え込んでいる間に窓口での手続きを終えて男が戻ってくる。

「さて、行こうか」

男はエレベータに向かつて歩き出し、あたしは黙ってそれに付いて行く。

虎穴に入らずんば虎兇を得ず……とは良く言ったものね。コイツが虎ということには異議を唱えたいところではあるけど。

むしろ藪から蛇かもしれない、などと考えていたあたしは、男とともに降りてきたエレベータに乗り込んだ。

「分かっていと思うけど……」

上昇するエレベータの中でおもむろに男が口を開く。

「……ん？」

誰かに会わせるという事に気が付いているだろうか？ とか言うつもりだろうか？

「病院の中では騒がない様に……」

「そっちかい！」

注意されたばかりにも関わらず、思わず大声で突っ込みを入れるあたし。

「一応、注意しておかないとな」

コイツの中であたしは一体どんな扱いになっているのか、今更ながら非常に気になった。

いや、考えるのは止そう、どうせろくでもない扱いに決まっている。

エレベータが停まり、音もなく目の前の扉が開く。どうやら目的の階に着いたらしい。

「こっちだ」

エレベータを出ると男は、廊下を奥に向かって歩き出す。

廊下は静かだった。

病院の中だからという事だけではない。

人の気配がしないのだ。

あたしの横を幾つもの病室のドアが過ぎて行く。

これだけ部屋があるのだから、その一つくらいから人の気配がしてもおかしくないはず。あたしと男の足音だけが、廊下に響く。

まるで誰もいない夜の校舎のようだ。

「静かだろう？」

あたしが不思議に思っているのに気付いたか、男から声を掛けられる。

「この階はこの病院の最上階、そしてこの階に入院している人は一人しかいないんだ」

「どうして……？」

うつむき加減になりながら男が呟く。

「まず、入院している人がいないのは、この下の階までで病室が足りているという単純な事」

「それじゃ、その一人は……」

「それは、本人が望んだからだ……この病院の最も最上階にある部屋、そして……」

男が立ち止まった。

その前には周りにあるドアと同じデザインのドアがある。

「もつとも空を見渡せる部屋……ここだ……」

男はそのドアをコンコンと軽くノックしてから、

「俺だ、起きているか？」

と病室の中へと声を掛けた。

「どうぞ」

ドアの向こうから女の子の声で返事が返ってくる。

「入るぞ……」

ノブを回し、ドアを開ける男。

「調子はどうだ？」

「お兄ちゃん、いらっしやい」

お兄ちゃん!?

ということとは、この男の妹だろうか？

病室に入った男に続いてあたしも中に入ると、窓際に設置されたベッドの上で一人の女の子が文庫本を広げていた。

「失礼しま、あ、あああああああああああああああつ!？」

あたしはその少女の顔を見た途端、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「しっ!! 静かに!」

咄嗟とっさにあたしの口を塞ぐ男。

「×※+¥&(*<!?)」

声にならない叫びを上げながら、口を押さえる男の手を振りほどこうとするあたし。

「その人……誰なの？」

その女の子があたしを見て言った。

雪よりも透き通った白い肌。

さして力をかけなくても折れそうなほどほつそりとした手足に、整った顔立ち……町に出ればあの美樹にも負けないくらい声を掛けられまくりそうな女の子がそこにいた。

しかし、あたしが驚いたところはそこではない、その顔に見覚えがあったのだ。

「いや、俺の友達だよ。美琴」

男は女の子を落ち着かせるように小さく声を出す。

あの夢に出てきた『白い翼を持った天使』のような少女……

言葉を発さずに微笑みながらあたしに攻撃をしてきたあの天使の少女と、その顔は瓜うりふた二つであつた。

でも……ちがう。

だが、あたしの中で沸き上がったのは、それとは違うという違和感だった。

たしかに姿形はそっくりなのだが、その身から感じ取れる雰囲気……なんと言えばいいのかよく分からないけど、その表情から感じとれる儚はかなさが更に増しているような気がする。

「お兄ちゃんのお友達でしたか。はじめまして、東陽美琴とうようです。お兄ちゃんがお世話になつて

います」

微笑みながら丁寧にお辞儀をする女の子、美琴ちゃん。

あたしはその言葉に返事を返すことも出来ず、石像よろしく固まったままになっていた。

「……お兄ちゃん……この人どうしたの？」

あたしを見ながら不安げに呟く美琴ちゃん。

「大丈夫だよ。美琴があまりに可愛いから驚いているだけだよ」

などと背中が痒かゆくなりそうな事を言っている。

この男がやると様になるのが、実に悔しくもあるが……

「そんな事無いよ……」

と赤らめた顔をうつむかせる美琴ちゃんであった。

やっぱり、夢で見た『美琴』とどこことなく違うような感じがする。

「ところでお名前は……？」

美琴ちゃんが再びこちらを向き、尋ねてきた。

「えーっと……」

あたしを紹介しようとして男が声を詰まらせてしまった。

そういえば、まだ名前を教えていなかったわね。

……まあ、教える気にもならなかったというのもあるけど。

「あたしは晶……水月 晶よ」

隣で頭を搔いている男の代わりに、ようやく硬直状態から抜け出したあたしが名を名乗った。

「……………えっ？」

搔いていた手を止めて男が短く驚きの声を発する。

「？ なに驚いているのよ…………？」

「い、いや別に…………」

「……………？」

挙動不審な男の様子にあたしは首を傾げたが、男の方はあたしから視線を外して押し黙ってしまう。

「みつき…………とは、どんな風に書くんですか？」

「水に月で水月よ。晶は水晶の晶」

自分でも『水月』ってちよつと変わった苗字だと思う。『晶』っていう名前の方は気にしているんだけどね。

「すつごく、綺麗な名前ですね」

感心したように美琴はベッドの上からあたしを見上げている。

こんなかわいい子に綺麗って言われるのはなんか恥ずかしいわね…………それがたとえ名前のことだといつても…………

「ホント、名前だけは綺麗だよなあ」

先ほどから押し黙っていた男が意外そうに呟く。

『だけ』の部分をやたらと強調しているのが非常に気に入らないけど……

「だがしかし、その名に反して中身は非常に^{どうも}獐猛かつ凶暴で暴力的で……、まさに綺麗なものには棘が……」

フツ!!

ごしやあ!?

あたしの風を斬るようなスパイラルキックが脇腹に命中し、体をくの字にしてその場で倒れ伏せる男。

「何か言ったかしら……?」

冷たい表情で床に倒れている男の首根っこを引っ掴むあたし。

「た、ただいまの発言にお聞き苦しい点がありましたことを深くお詫びいたします……」

男はまるでトンデモコメンターターの暴言を謝罪するテレビアナウンサーのような、やたらと丁寧な言葉遣いで謝る。

「……そう……」

あたしは襟を掴んでいた手を少し緩める。

それに男がほっとした表情を浮かべた。

「だからといって、許したとは言っていない！」

ごすっ！ ごすっ！

「おうっ！ おうっ！ おうっ！」

あたしは再び襟を強く引つ張り、男の頭に拳を連発で打ち下ろした。

「……いい？ 今度あたしの名前とあたしを比べたりしたら、これじゃすまないわよ……？」

あたしは目を据わらせて男に睨みを効かせる。

「は、はひ……」

首をガクガクさせながらうなづく男。

あたしだつて名前負けしていることぐらい分かっている。

でも、それを改めて指摘されると本当にムカツク！

「……いいな……」

あたしが男に殴りかかっている様子を眺めていた美琴ちゃんが眩しそうな表情で目を細めていた。

「……なにがいいの！」

思わずあたしは強い口調で言葉を放ったのだが……

「わたし……体弱いから……兄妹ゲンカ……とか、したこと無いんです……」

「あ……」

あたしはその言葉に沈黙してしまった。

「だから……とつても……うらやましいです」

あたしにはあたりまえでも、美琴ちゃんには手の届かない『体の自由』というものがあることに今更ながら気が付かされる。

口を閉ざしてしまったあたしの隣では、ヨロヨロと体をふらつかせながら男が立ち上がった。きた。

コイツは逆に憎たらしいほどしぶといけど。

性格が全然似てないし……ほんとにこの二人兄妹なのか？ と疑いたくもなってくる。

「ところで美琴。この人に見覚えはないか？」

あたしの方を向きながら男が言う。

「うん……見覚え、ないよ……だってわたし……」

何かを言いかけて口籠もる美琴ちゃん。

「そうか……そうだったな……」

それだけで男は納得すると、手にしていた紙袋を美琴ちゃんに手渡した。

「今月のスカイガイドだ」

「わあ、ありがとう。お兄ちゃんはもう読んだ？」

「ああ、もう読んだ。だからじっくり読んで構わないぞ」

「うん」

……なるほど、三洋堂の店長さんが言っていた最近スカイガイド——空ガ——を購入しているうちの生徒ってこいつのことだったのか……

美琴ちゃんは紙袋から『空ガ』を取り出し、両手の中で広げる。

「星……好きなの？」

あたしもまだ今月号の内容は見ていなかったもので、横から内容を覗き見ながら声を掛けた。

「はい、大好きです」

本から顔を上げ、屈託のない笑顔で答える美琴ちゃん。

「そう……」

あたしはそれだけというと、その場に立ち尽くした。

美琴ちゃんはページをめくりながら、色鮮やかな星々の写真に目を細めている。

どう見ても……姿形はあの『美琴』にしか見えない……

しかし、本人は兄であるこの男とは対照的にあたしの事を全く覚えていないようだ。

男は考え込んでいるあたしをちよつと見てから、美琴ちゃんに、

「今日はもう遅いし、面会時間もそろそろ終わりだから俺たちは帰るよ」

「そうだね……」

男の言葉に美琴ちゃんは本から顔を上げ、窓の外を見ながら呟いた。

病室の窓先では、白かつた街並みが夕闇に包み込まれそうになっている。

窓に映る空には宵の明星——金星——が既にその強い輝きを浮かび上がらせていた。

確かに、空が良く見渡せる部屋ね……

小高い丘の上にあるうえ、ここはその最上階にあるのだから当然と言えば当然なのだけど。

「それじゃ、また明日来るよ」

男はドアの前に立つ。

「うん……また明日……」

本を手にしたまま、あたしたちを見送る美琴ちゃん。

その表情は元々持っている儂げな印象と相まってとても寂しそうに見える。

「それじゃ、またね美琴ちゃん……」

あたしも挨拶すると男に続いて病室を出た。

「ちゃんと静かに休んでいるんだぞ」

「うん、お兄ちゃんも気を付けて」

「ああ」

そして男はドアを閉めると、エレベーターホールに向かって歩き出す。

エレベーターで一階のロビーに降りるまで、あたしと男は終始無言であつた。

☆

「——どう思った？」

ベンチに座っているあたしに、目の前に立つ男が尋ねてきた。

あたしは病院前のロータリーにあるベンチに座っている。

「あんたが『シスコン』であることがよく分かつたわ」

「論点が違う！」

大声でツツコミを入れた男の声は、面会時間を終えて静かになつた病院の壁を響かせた。

よほど『シスコン』という言葉が気に入らなかつたようである。

「確かに美琴はそこらの婦女子とくらべても、月とすつぽん！ 比べるのが可哀相なくらいとても可愛い！ だがしかし、だからと言って俺は断じてシスコンなどではない!!」

きつぱりハッキリ言い切つたよ、この男は……

……はい確定、この男は正真正銘どうしようもないシスコンである。

「どうって……あなたの妹、美琴ちゃんってあの『美琴』なの？」

あたしは居住まいを正してからまじめに答え直す。

「ああ……」

少し落ち着いた様子で男が頷いた。

「でも、あたしの事知らないって……とても嘘をついているようには思えなかったわ」

確かに姿形は『美琴』のそれそのままのだが、受ける印象がまるで違う。

病室にいた美琴ちゃんは、夢の中で見た、ぞくつとするような、見ているだけで引き込まれ

そうなあの笑顔は無かった。少なくとももつと暖かみのある表情を見せていた。

あたしが受けた印象だけなら、先ほどの現実の美琴ちゃんと夢の中の『美琴』では別人に思

える。

「とりあえず、妹のことはおいといて……あの夢について話そうか？」

思考の迷路に入り込もうとしていたあたしに、男がようやく本題を切り出してきた。

「ええ、そうね。結局……あの世界は一体なんなの？」

男はあたしの横に腰を下ろしながら言葉を紡ぐ。

「言葉通り、夢の世界さ。但し、俺の夢でもなければ君の夢でもない」

「それじゃ……」

確信を込めたあたしの呟きに、肩を竦ませながら男が頷き返した。

「そう、『美琴』の夢の中さ」

……美琴ちゃんの夢……他人の夢の中に入り込んでしまうなんて……

そんな馬鹿なことが本来あり得るはずもないし、普通なら信じようとも思わないが、實際夢を共有した人物が目の前にいれば話は別である。

しかし……

「今までそんな事経験したことないわよ」

つい昨日までそんな事は一度も無かった。

もちろん夢の中に知り合いが出てくることなど幾らでもあったが、これっぽっちも面識のない人間が出てきた上に、その中に出てきた人間と夢の記憶を共有したことなど当然あるはずも無い。

「俺と美琴がこの町に来たからだろうな……」

男は一つ溜息を吐くと、暗闇に覆われた空に目を浮かせる。

まだまだ日が短く、薄ら寒い春のこの季節、既に星々が空を飾りはじめる時間になっていた。「元々、俺にもそんなことは無かった……だがある時を境に俺も美琴の夢の中に入るようになっていたんだ」

「それって自分の意志……で……?」

あたしの問いに男は首を横に振る。

「いや、自分の意志ではなく夜、寝たと思つたら気が付くとあの夢の世界さ」

「あたしの時と……同じね……」

あたしの言葉に頷きを返し、話を続ける。

「それからだった……美琴がおかしくなり始めたのは……」

以来、男は美琴ちゃんの夢の中に入る事が日課となつていった。

そして、夢の中では決まつて『美琴』がいる。

美琴ちゃんの夢なのだから当たり前と言えども当たり前なのだが、それにしてもおかしい事が

幾つもあった。

それは夢の中の『美琴』は何も喋ることは無くただ微笑むばかり。唯々一人、ただただその場で舞い

踊っていることが殆どだったという。

そして、その背には必ずあの白い翼をはためかせていた。

「もちろん、俺は何度か美琴に話し掛けようとした。だけど……」

「攻撃……してきたのね？」

「ああ……」

何の理由かはわからないが、『美琴』はこの男が近づくと攻撃を仕掛けてきたという。

それも手加減無しの攻撃で、たまらず今回のように逃げ回る事もしばしばだったらしい。

「でも、夢ならいくら攻撃されたって、死ぬわけじゃないんでしょ……？」

あたしの当然の疑問に男の顔があからさまに曇った。

「いや、確かに死にはしない……が、恐らく一生原因不明の眠りから目覚めなくなる可能性がある」

「なあ……!？」

あたしは飛び上がるような声を上げてしまった。

「最初の頃……『美琴』の攻撃を食らってしまった時、俺は三日ほど目を覚まさなかったそうだ……」

男が言うには、あの世界での攻撃は言わば精神攻撃。

外傷的な傷が付くようなことはないが、精神……つまり心そのものが弱まってしまおうということだった。

「あの時、夢で受けた傷は重傷だったが致命傷にはならなかった。そのおかげか三日で回復できたのは、まだ御の字といったところなんだろうな」

「それにしても、何でわざわざ攻撃を受けるのに『美琴』に近づくわけ？」

それほど攻撃が恐ろしいものなら、夢の中で会わずに逃げ回っていればいいのである。

昨日の夢の中で男は「ようやく見つけたぞ!」と言っていたのだ。

そう、『美琴』が夢の中にいるといっても、いつもすぐ近くにいるわけではないのだろう、男はわざわざ探していた……と言う事になる。

「……………」

あたしの言葉に、暫く男は口を閉ざしてしまった。

その間、病院の玄関で何台かの人を乗せたタクシーがあたしたちの前を通り過ぎて行く。それを見送った後、ロータリーには人の気配が殆ど無くなった。

もう、面会時間終了からかなり時間が経っているし、急患でもない限り今日の診療も終わっているのだから、人が来たり出たりする事もないだろう。

ふと隣を垣間見ると、かなり悩んでいるような男の横顔があった。

話すべきかを迷っているようね……

「……実は……」

ややあつてから男はようやく口を開ける。

「無理に話さなくてもいいけど……」

「いや、話しておくべきだろう。この様子だと解決するまで付き合わせる事になりそうだからな」

男は微笑んでいるけど、その力のない笑みを浮かべるのすら相当無理をしているのが手に取るようにわかった。

しかし、どうしてそれほどまでに悩んでいるかは分からないけど。

「さつきも言ったけど美琴がおかしくなった……と言ったよね？」

「ええ……」

「もつと深刻だったのは、現実の美琴の方だったのさ……」

男が美琴ちゃんの夢に入つて、一度も『美琴』に会わなかった時が一度だけあったという。

その次の日、病院にいた美琴ちゃんは目を覚まさなかつた。

前日もその前も特に変わった所は無く、その日突然だったらしい。

男がいつも通り病院へ面会に来た時、主治医や看護婦が美琴ちゃんのベッドを取り囲んでいた。

命には何ら別状はない。

でも、目を覚まさない……

医者もお手上げだった。

その日、男と呼び出された両親は面会時間ぎりぎりまで病室の前にいたが、面会時間の終わる間際になって、母親から明日の学校のことを心配され、男だけが先に家に戻つた。

疲れ果てたままベッドに潜つた男は、また美琴ちゃんの夢の中にいたという。

そして『美琴』を探した。

それも懸命に……

ようやく、男は『美琴』を見つけることが出来た。もちろんいつも通り攻撃を受けたが何とか凌ぎきり朝を迎えたという。

男がベッドから身体を起こした直後、電話のベルが鳴った。

美琴ちゃんが目を覚ました……という両親からの電話だったらしい。

「つまり、あんたが意地でも美琴ちゃんに会わないと、次の日に目を覚まさなくなるのね……」
「……そういうことだ」

男のこれまでの説明に、あたしは深い深い溜息を吐かざるを得なかった。

これだけ妹思いの男である。妹が目を覚まさないということは由々しき事態だろう。

「それで……あの子は、その事を覚えていたの？」

男は再び首を横にゆつくりと振った。

「全く覚えが無いらしい……自分がそれほど長く眠り続けていたことすらも覚えが無いと言っていた」

そうか……兄であるこの男のことすらも覚えていないのだ、現実の世界においても顔見知りでもなんでもないあたしの事など覚えていないはずも無いわね。

「美琴は、な……幼い頃から病気がちでさ。いつも入退院を繰り返していたんだよ。それでも最近は大きな病気もしなくなり、元気になってきた矢先だった……」

男は両手で顔を覆っていた。泣いているわけではないけど、歪んだ顔を見られたくないのだろう。

「……それで、あたしはどうして美琴ちゃんの夢の中に入ってしまったの？ あたしはあなた

のように美琴ちゃんの身内でもなければ知り合いでもないのに」

「それは……恐らく夢の中の『干渉力』が強いのだろう、君は」

「干渉力……？ なにそれ？」

あたしは聞き慣れぬ言葉に眉をひそめた。

「干渉力、つまり夢の中でどれだけ強いかを表わすもののようなものだと思って構わない。もちろん決まった単位があるわけでもないし、俺が便宜上そう考えているだけだ」

男が干渉力と呼んでいるものは、その世界の中でどれだけ力を発揮できるかのことを指しているらしい。

その力が大きいほど夢の中で様々なことが出来ると言う。

「夢の中で、俺は翼を持っていただろう？ あれは夢の中で自由に飛ぶための補助として俺が想像したものだ。あの世界では想像力が強いものほど強力な力を使う事が出来る」

「何で翼がいるわけ？ 普通、夢の中で翼も無く自由に空を飛ぶってお約束じゃない？」

事実、あたしは翼も無いのに空を飛んでいたのだ。

「それはある意味想像力が無いからだ。翼が無いのに鳥が空を飛べるはずが無い。自分の夢の中ではそれでも通用する。人の世界ではない分、想像力があまり必要じゃないようだからな」

「それじゃ、さっきの話と矛盾しているじゃない……」

『干渉力』が無いと人の夢に入る事も出来ないのに、想像力の無いあたしはその『干渉力』

を持つていない……ということになる。

「これは俺の推測だが、あの世界で重要な『干渉力』を表わす力は想像力ともう一つあると思つてゐるんだ」

「もう一つ……?」

「そのもう一つは、精神力……つまり純粹に心の強さのことだよ」

あたしは想像力がない分、それを強い精神力で補つてゐるので翼を想像しなくても空を飛べたのだと男はいう。

「精神力ね……普段はそんなこと考えたことも無かつたけど」

「見た目の強さじゃないからな。それに特に鍛錬もしていないのに精神力が強いのは生まれつきみたいなものもあるのかもしれない」

「生まれつきねえ……」

あたしはその『生まれつき』のおかげで、こんな事に巻き込まれてゐるのか……? 思わずため息の出るあたし。

「干渉力が強い人ほど『美琴』の夢に引き込まれやすい。前に住んでいた町でも、幾度か『美琴』の夢に引き込まれた人を見たことがある」

「その時はどうしたの?」

「いきなり攻撃してくる『美琴』に驚いて夢の中から消える。……つまり目を覚ましてしまう

ということが殆どさ……君みたいに攻撃を食らって驚いてもいつまでも目が覚めない凶太い人はいなかったよ」

「ず、凶太いとは失礼ね！」

本当はこの場で殴り倒したいくらいなのだが、話の腰を折りたくないなので叫ぶだけにするあたりし。

「ちなみに俺が攻撃で驚いたりしても目が覚めないのは夢の世界を『認識』しているからみただ。ま、攻撃食らったら食らったでそのまま眠り続ける事になるしな……」

男は立ち上がると、病院とは反対側——町の方——を見下ろす。

小高い丘から見える町並みはすでにイルミネーションに包まれている。

この風景……昨日の夢の中に似てる……

「ここから見える風景が昨日の夢の中だったみたいだな……」

男もそれに気が付いたようである。

「美琴はこの町に来たがっていた。正確に言えば、この景色を見たかった……と言うべきかな……」

「どうして……？」

「この町は……以前俺達が暮らしていた町だからな……」

男と美琴ちゃん、そして両親は昔ここに住んでいたらしい。

そして男が十歳くらいの時、両親の仕事の都合でここを離れ、別の町へ引っ越していったそ
うだ。

「この原因不明の状況に陥ったころ、美琴が言ったんだよ……幼い頃見たあの町並みが見たい
……ってね……」

両親からすれば、一向に良くなならないどころか悪化したようにすら思える娘を見て何かしな
くてはと思ったのだろう。

数日後、両親は美琴ちゃんをこの病院に転院させたそうである。

「もちろん、両親には仕事がある。仕事の関係でこの町から移ったくらいだからな。一家揃っ
てこっちに戻ってくるなんて出来ないから、当面俺だけを転校させて美琴の面倒を見る事にな
ったんだ」

この男にすれば目に入れても痛くない可愛い妹である。恐らく自分から面倒を見ると言い出
したのでしようね。

こんな中途半端な時期での転校など、いかほどの障害にもならなかったことが容易に想像で
きた。

「……さてと、すっかり遅くなつたな。悪かつたね、こんなに遅くまで付き合わせて」

男は腕時計から時刻を読み取るとあたしを促して、病院の門を目指して歩き始める。

あたしもベンチから離れ、その後について行った。

病院の門を通り過ぎた時、ふと振り返ると入院病棟の最上階、最も街が見渡せるその一室には明かりが灯っていた。

あの部屋にいる女の子、美琴ちゃん……一体何者なの……？

この男の妹であるのだから、人間である事は間違い無いとは思うけど。

まあ、この男もある意味、十分規格外なような気もするけどね……

——でも……

☆

男とあたしは病院の敷地を出てから終始無言のまま夜道をトボトボと歩いていた。

男が送るといふ申し出をしてきたのを割りと素直に受け入れたのである。

——コイツはシスコン男だから、対象外であるあたしは安全そうだ……と思ったのは秘密にしておくけどね。

小高い丘を下り、町の中心街を通り過ぎた辺りであたしは口を開いた。

「……で、結局の所、あたしはどうしたらいいわけ？」

そう、未だ分かっていない事がそれである。

このままではまた夢の中で巻き込まれる……と言う事は分かった。

しかし、今回の話を聞いただけでは、状況の説明を聞かされただけで、結局あたし的にも解決になっていない。

「俺もそれについては困っているんだよ。さつきも言った通り、すぐに夢から覚めてくれればそんな問題にはならないんだけど……」

「驚く以外に戻り方とか無いの？」

あたしは隣を歩いている男の横顔を見ながら尋ねた。

「基本的に、驚いたりして夢から覚めるくらいしか手段が無いと思う」

「あんたの場合は？」

「俺の場合は、朝になって美琴が目覚めますまで抜ける事は出来ないみたいだ」

「ということは……」

あたしの頭の中に最悪の答えが浮かんだ。

「そ、俺と同じく美琴が目覚めるまで逃げ回る……という事になるよな、実際」
当然とばかりに、軽く答えてくれる男であった。

「そんなの無理に決まっているでしょ!？」

何せあの手加減、武器加減、魔法加減無しに猛攻撃なのだ。避けることすら至難の業であったことは今回の夢で明白である。

「まあ……その辺は君の方で何とかしてくれとしかいえない」
いい加減な答えを返す男。

「他には方法はないの!？」

「他にね……うーん、おっ!」

あたしの問いに、男はピンと来たらしくポンツと手を叩く。

「最終手段としては、毎日寝ないという強引な技もあるけど……」

「却下!!」

男の身も蓋も無い回答を一語にて廃案にするあたし。

「うーん、それじゃ……おっ!？」

再び手を打つ男。

「今度はなによ？」

大した期待もせず聞くあたし。

「本当の最終手段が思いついた……が、リスクが大きすぎる……特に俺が……」

「……何よ一体……」

男は妙に神妙な顔をして口を開いた。

「前回と同じくキス……」

「あ、あほかあああああああ……!!」

ごすうつ

顔を真っ赤にしたあたしが放った渾身のアツパーカットが男の顎を突き上げ、跳ね上げる。

「い、いいパンチしてるぜ……」

お約束な台詞を吐きながらよろめいている男であった。

「そもそも既にわかっているんじゃないの！ それに何であんたの方がリスクが大きいのよ！」

「あ、後でこういう結果になりそうで……、……すみません、口が過ぎました」

般若の面へと変化したあたしの顔を見て、男はですます調で謝ってくる。

「いい案だと思っただけど……」

「ど、どこがよ!？」

そういえばシスコン男だと油断していたけど、こいつには『前科』があつたのを今更ながら思い出した。

くっそおおお！ 思い出したらまた腹が立ってきた！

夢の中とはいえ、乙女の大切なファーストキスを……顔はいいとはいえこんな得体の知れない男に奪われたあたしの心理的ダメージは計り知れない。

本来なら百回殴つても飽き足りないけど、あたしを助けてくれたことには変わりはないのでこれくらいにしているのだ。

そうこうしているうちに、あたしの家の前まで辿り着く。

「あたしの家、ここだから」

あたしは門の前で足を止め、男へと振り返つた。

「そうか……すまなかつたな……」

男はもう一度あたしに謝ってくる。

戯言を曰っているときとは打つて変わった、本当に申し訳無さそうな顔だったので、あたしは何も言わなかつた。

「また、夢で会うかもしれないが……」

「あたしは、そうならないことを願っているわ……」

無然とした顔を見せているあたしに背を向けると、男は駅の方角に向かって歩き始めたのだが、数歩進んだところで足を止めるとこちらを振り向く。

「夢の中に全ての答えがあるはず……今はそれだけしか分からない……」

独り言のようにそれだけ呟くと男は再び歩き始める。

「じゃ……」

あたしは男の背が角の先に消えるまで見送つた後、家の中へと入つた。

☆

家に戻った後、既に夕食が用意されていた。

あたしはさっさと食べて、お風呂に入る。

湯船に浸かりながら、あたしはぼーっとしていた……

『夢の中に全ての答えがあるはず……今はそれだけしか分からない……』

あの男はそういつていたけど、そうなった理由は本当になんなのだろうか？

あの子——美琴ちゃん——とてもあんな事をしでかすようには見えないし……

……あたしが考えてもしょうがないか……

暫く考え込んでいたものの、結局あたしが今ここで悩んだところで答えが出るはずもない。そう結論つけてあたしはお風呂から上がる。

お風呂から上がると、自室で髪を解かしながら今日、今から寝る事について考えていた。今日も『美琴』の夢の中に入りそうな気がする。

それは予感ではなく、決定付けられたなにかのような気がしてきた。

「ハッキリ言って嫌なんだけど……」

といつても、寝ないわけにはいかないもんね……

今日一日幾度となく吐いてきた溜息を部屋の空気に溶け込ませながら、あたしは灯りを落とし、ベッドの中に潜り込んだ。

.....

暗闇に包まれ、蛍光灯の残光だけが灯る天井を眺め続けるあたし。

.....寝付けない.....

怖い夢を見た子供じゃあるまいし.....

我ながら呆れたが、眠れないものは仕方がない。

「.....そういえば、美樹から借りていた文庫本があつたつけ.....」

たまらず、あたしは机の上に置いてあつた文庫本を手にとって、ベッドサイドのスタンドに灯りを灯した。

この本は美樹が「絶対に面白いから読むように！」と、半ば強引に貸し付けてきたのである。.....まあ、美樹が持つてくる本は、本当に面白いからいいんだけどね.....

内容はファンタジーもの.....剣戟が響き渡り、魔法が飛び交い、精霊が集い、モンスターが跋扈するといふ.....まあよくあるお話である。

「魔法.....ね.....あの世界であたしにも使えれば、苦勞しなくても済みそうなんだけどね.....」
ちようどしおりを挟んでいたページには挿絵が描かれていた。

そこにはシヨートカットの可愛い女の子が掌を目の前に突き出して、自分の体よりも大きな

魔法陣を迫り来る敵へと展開させている姿が描かれている。

「そうそう……こんな風に……ね………くう………」

あたしはこの眩きを残して、眠りへと落ちていった。

一日中、あれこれ考えすぎて、さすがにあたしの頭は眠りを拒否できなくなっていったのだからか？

——眠りへと落ちたあと、次に見るものは……

第3話 陽光が照らす雲

……というわけで、あたしは『雲の上』にいた。

「ふっ……ふっふっふ……さすがに二度目となると早々驚かないわよ！」

力いっぱい握りしめたコブシを大空目がけて突き上げて勝ち鬨かちどきを響かせるあたし。

だが、あたしの叫びはなにも遮さへぎるものが無い青空の中へと消えて行くだけであった。

とりあえず、あたしから見える範囲には誰もいないようである。

下を見ればふつくらとした白い雲が辺り一面に敷き詰められており、上を見れば雲一つ見つ

けられない青い空。

空の中には燦々さんさんと輝く太陽が浮かんでおり、足下に広がる雲の絨毯を白く浮かび上がらせて

いた。

理由も理屈もまだ何一つ分かっていないけど、今回もちやんと空を飛んでいるのだろうか？

「でも、ちよつと感覚が違うみたいなのがするけど……」

昨夜のようにふわふわ空に浮いているというより、何かの上に乗っているような感じを受ける。

足を上げたときに感じる引つ張られるような感触……つまり、重力の作用を感じたからだ。

「うくん……えいつ！」

あたしは足を振り上げて思いつきり足下の雲を踏みしめてみた。そこからは『ふかふか』とした真綿のような柔らかい感触が返ってきて、まるで高級な絨毯の上を歩いているように感じる。

「これは空を飛んでいるというより、この雲は乗ることが出来る……ということのようね……」
さすが夢、常識外なことこの上ない。あたしは一度経験しているからまだ冷静でいられるけど、何も知らずにこんなところに放り出されたら途方に暮れるしかないだろう。

改めてぐるっと辺りを見渡すと、雲は地平線——と言うべきだろうか？——の彼方までどこまでも続いていて、その最果てを伺うことは出来ない。

とはいえ、昨晩の真つ暗な夜闇の空の上ということではないので、その途方もない広さだけは知ることが出来たけど。

「で、問題はどうかよね……」

あたしがこの世界から脱出するには、何らかの方法で気を失うほどにビツクリするか、この世界の主である美琴ちゃんが目を覚ますか——のどちらかになると、あのキス魔男から聞いているけど……

少なくとも現時点で前者はボツ、一人でどうやって驚いたらいいのやら……

後者は待つていればそのうち勝手に終わってくれるはずであり、人畜無害・平穩無事を何よ

りも望む平和主義者のあたしとしては、こちらでの帰還を切実に望んでいるわけである。

「とりあえず『美琴』が現れない限り、ただ待つているだけでいいわけだし……」

極めて他力本願というか、ただただ状況に流されていることしかできないどこぞのヘタレ主人公——美樹が持ってきた文庫本にそんなのが混じっていた——のような台詞を呟いていた。

投げっぱなしな台詞を自分で言っておいてなんだけど、あたし自身がその駄目主人公な人と思えてきたが気にしないことにする。

その柔らかさを確かめてある雲の絨毯の上に、あたしは土手の草むらに寝転がるようにごろんと転がった。

夢の中で『寝転がる』というのも変な話だけど、背に敷かれている雲から返ってくる感触はとてもふかふかして気持ちがいい。

「このまま眠れたら最高なんだけどなあ……」

さすがにこんなところで眠りこけるわけには行かないので、目の前に広がる青く澄み切った空をぼーっと眺めていた。

雲一つない、只々青いだけの空。普段は地上から見るのが希などこまでも続く蒼穹。

……青々として……とても綺麗な場所^{ゆめ}だけど、なんで美琴ちゃんはこの世界に閉じこもったりするんだろう？

もちろん美琴ちゃんが故意に閉じこもっているとはまだ断定できない。まだこれはあの兄馬

鹿から聞いただけの話だ。

昨日見た夢は、空に星の輝きと眼下に広がるイルミネーションに彩られた美しい世界。

そして今日は、まばゆい輝きを放つ青い空と白の雲のコントラストが織りなす空の世界。

どれだけ『夢の世界』が美琴ちゃんの中にあるのかはわからないけれど、どちらも一言では言い表せないほどの美しい景観をもった世界であることは間違いない。

美琴ちゃんの兄である、あのシスコン男は言っていた。

夢の中で『美琴』に会わなければ、翌日現実の美琴ちゃんは目を覚ますことは無い……となぜ目を覚まさないのか？

そのとき『美琴』は……いえ、美琴ちゃんはこの夢のどこにいるのだろうか？

積もりに積み重なった疑問は尽きることがないけれど、今のあたしにはそれを積むことは出来ても崩していくことは出来ない。今はじっと待っているしかないのだ。

あの変態男を過剰に心配する気は無いけど、ノコノコと『美琴』の前に出て行って、前回のように足手まといになるのはあたしのプライドが許さない。

「あくあ……いつそのことあたしも反撃出来ればいいんだけどなあ……」

残念ながらあたしは今のところこの世界で自分の思い通りになつた例たふしがない。

あたしが攻撃なり防御なりを仕掛けるには……どうしたら良いんだらうか？

あの翼人男は想像力と精神力で攻撃・防御をするようなことを言っていた。

実際にこの目でその姿は目撃しているわけなのでそれは間違いいのではないのだろう。ただし具體的にどうすれば良いのかこれっぽっちも思いつかない。

「まずはその『想像力』をうまく働かせるようにしないと駄目な気がするけど……」

あの兄馬鹿男は、あたしは意志力のみで力を使っているのだろうと言っていた。

もちろんそんな意識はあたしの中にもないのだから、無意識で力が働いているのだろうけど……

「……ま、『美琴』に行くわさなければそんな必要は無いけどね……」

行く先の見えない思考に、あたしはまたも投げやりな言葉を交えた溜息を空に向けて放つ。

そのまま空を眺めていたが、しばらくすると飽きてきたのか、あたしは急激な眠気に襲われていた。

「ふああ……眠い……」

夢の中で寝たら、その中でも夢を見る事があるのだろうか？

以前起きたらそれが夢の中で、再び起きるとまたそれが夢の中だった……ということがあった。

夢のまた夢……遠く叶わない事を指す言葉だけど、その言葉の意味が違えどそれを良く表していると思う。

普段の布団よりも柔らかかな雲とちようど良い暖かさであたしを包む日差し……このまま寝たらぐっすり心地よく寝られるのは確かなんだらうけど……

などと考えていたのも束の間、あたしは本当に眠りに落ちてしまっていた。

「雲の上で寝るって気持ちがいいのね……」

『……すけて……』

意識を手放そうとしたその時、掠^{かす}れるような細かい声を耳にした……ような気がした。しかし、半分眠りに落ちていたあたしには、空耳としか受け取れなかったのだが――

☆

『……たすけ……』

また声が聞こえた。

耳にというより、あたしの頭の中に直接響いているような……

意識しないと聞き取れないほどの微かな声。遠くから響いてきたというより、発せられた声自体があまりにもか細すぎて聞き取れないのだ。

聞くというより、感じ取るといった方が正しいその『声』へと、寝ぼけ眼^{まなこ}なあたしは知らずに意識を傾けていた。

『……たす……』

……助けて……？

「……………い」

しかし、その繊細な声の意味を感じ取ろうとしたとき、本当にあたしの耳へと響いた別の声でかき消されてしまう。

「……………おい、こちら」

この声は……………あたしを呼んでいるのだろうか？

海の底から這い上がってくるような深い眠りから覚めたばかりのようで、濃い霞が掛かったみたいにぼんやりとしていて上手く頭が回らない。

低血圧でもないあたしにしては珍しい現象を感じながら耳に伝わってきた声を確かめようとした。

……………少しだけ聞き覚えのある声だ……………この声は……………確か……………

プニプニ……………プニプニ……………

あたしの眠りを妨げるため、誰かがあたしの頬を突つついている……………普段ならこんなことをされたら即座に起きるのだが、今は意識してもなかなか目を開けられなかった。

「……………起きないなら……………最後の手段を使うぞ？」

そして、なかなか起きないあたしに痺れを切らしたのか、その声の主が警告を発する。

……………最後の……………手段……………？

あたしの思考はまだハッキリしていない。

それでも『最後の手段』という言葉が気になり、なんとか薄目を開けることが出来たあたしの瞳が映したものは……

げしっ!!

次の瞬間、あたしの眼前にあつた『顔』にアッパーカットが炸裂する。

「き、きやあああああああ——!!」

あたしの拳は叫ぶより早く、条件反射的にその『見知った顔』を空へと弾き飛ばしていた。「……ぐ、ぐはっ……よ、避けられなかった……」

雲の上に背中から倒れ込んで、翼から数枚の羽根をまき散らし、痛打された顎を抱えて雲の上をのたうち回っているのは、もはや言わずと知れたあの『シスコン兼婦女子の敵』こと美琴ちゃんの兄である。

「き、き、き、きつ、貴様ああああくくく!! い、一度ならずも二度までも……! そのゾンビより腐った性根を叩き直してやるうううう——!!」

あたしは一気に捲まき立ると、自分でも信じられないもの凄い早さで起き上がり、雲の上でのたうちまわっている変質者の首根っこを無造作に引っ掴む。

「や、やあ……き、奇遇だね……こ、こんなところで会うなんて……」

顎を両手で押さえたまま、やたらと白々しい台詞をほざく美琴兄。

その非常に不快かつ軽薄な態度は、夕方美琴ちゃんのことを語って悩んでいた妹想いの立派な兄（と感じた）とは別次元の人間ではないかとさえ思った。

「か、可憐な女の子の寝込みを襲うなんてえっ！ お天道様が許してもこのあたしが絶対に許さああああん!!」

あたしの許容値を遙かに超越した態度を取る不貞の輩にキレたあたしは、そのまま掴んだ洋服の襟を絞め上げる。

「く、くるしひいいいい……ゆ、ゆ……るし……」

あたしに絞められた変質者は、釣り人に釣り上げられたウグイ（食用不向き）のように口をパクパクとさせて許しを請う。

「だ、誰が許すかあ……!!」

男の口端から漏れる懇願を一切聞き流して、あたしは更なる力を込め、その首をねじあげる。だが、白目を剥きそうになったところで、さすがにあたしは襟を緩めた。

こんな奴でも死んだら寝覚めが悪い。

……まあ、こういう乙女の敵は早めにしばき倒しておくのも良いかもしれないけど……

あたしが襟を手放すと、雲の上にドサリと崩れ落ち、男は首を押さえて息を吐く。

「た、助かった……ほ、本当に死ぬかと思った……」

「当たり前よ。殺意を込めて締めてたから」

先ほどとは打つて変わったあたしの淡々とした言葉に男の顔が青ざめてる。

多分冗談に聞こえなかったのだろう。

当たり前である。冗談じゃないんだから。

「……で、あんたはどうしてこんなところで乙女の寝込みを襲っていたわけ？」

まだ醒めぬ怒りを言葉に練り込め、おもむろにあたしが尋ねる。

「だ、誰も襲っていな……」

「……………」

針のように細めたジト目で睨めつけるあたしの顔を見て、即座に語尾を細らせる男。

「い、いやあ、美琴を探していたんだけど、これがなかなか見つからなくて……で、この雲の上を通りかかったら、君が寝転がっているのを見かけたから声を掛けようとしただけ……」

「……ほほう……あんたの声をかけるってのは、ああいうことをすることなのね……？」

あたしは未だに鋭角に尖らせたジト目で男を睨めつけていた。

「……俺を変質者を見るような目で見ないでくれ……あきらちゃん……」

「真つ当な人間はああいう事はしない！」

何故か困ったように呟く男に一喝するあたし。

「はっ、はい!!」

直立不動の姿勢になつて返事をする男。

「だいたい！　なんであんななんか『あきらちゃん』なんて呼ばれなきゃなんないのよ!？」

「いや、そう呼んだほうが親しげに聞こえるかなあ〜つと……」

「あ、あんななんかと親しくなる気は毛の先ほどもなああああ!!」

そこまで叫んであたしはなんだか疲れてきた。

なんでこの男はこんなことばかりするんだろう……

「まったく……、美琴ちゃんはあんなに素直でいい子なのに、なんでその兄がこんなヘンタイシスコン残念男なんだろう……」

心底ウンザリした顔で首を振るあたし。

「……シスコンの上にヘンタイ……しかも、残念……」

実はそれなりにシヨックだったのか、あたしの言葉に男はぼそぼそと呟いている。

「それで美琴ちゃん……いえ、『美琴』は見つかって無いわけね……」

男は「『美琴』を探していた」と言っていた。こんなところではからぬ油を売っているこの様子だとまだ見つかっていないのだろうか。

「ああ」

頭を縦に振ったと思ったら、男は再び首をさすり始めた。まだ絞められた痛みが残っているようである。

首をさする男の肩越しから畳まれた一対の翼が顔を覗かせた。昨晚の夢同様、今日もこの翼で空を飛んでいたのだろう。

「そういえば夕方の時はあんまりよく聞かなかったけど、この翼ってイメージなんでしょ？」
「そうだよ」

男は翼を揺らして見せながら答える。

「この世界は、夢は夢でも妙に現実感があるだろう？」

男の問いにあたしは頷く。

確かにこの世界、『夢の世界』というわりにはやたらと現実感があった。

そもそも普通の夢の場合は、あまり自分の意志というものがあるようには思えず、ただ流れている話に身を任せているだけという感じである。

でも、この世界は違う。

あたしは自分の意志で行動しているし、夢と認識しているにも関わらず、目が覚めるようなことはない。

端的に言えば『夢の世界』という名の『異世界』と言った方が正しいのかもしれないと思う。「で、奇妙な現実感のため、自分が空を飛べるという想像がうまくできない。そこでそれを補うために翼がある自分を想像し、自分が飛べるような感覚を大きくしてるんだ」

「それじゃ、あの呪文みたいなのは『翼自体』を想像するための補助をしているわけね……」

あたしは、昨夜この男が美琴の攻撃で失った翼を復元していたときに唱えていた呪文を思い出す。

「そういうこと。ホント理解が早くて助かるよ……」

あたしに感心したように幾度か頷きながら、男は雲の地平線の先を見つめる。

「それにしても、『美琴』の奴どこに居るんだよ……」

さすがに疲れたように呟く男。

「結構……というか、かなり広いけど、ここ……」

あたしは辺りへとグルッと視線を巡らせた。

先ほどと変わらず果てしない彼方まで雲の絨毯が敷き詰められている。

切れ目一つすらも見当たらない上に、透けるほど薄くも無いので、この雲の下がどうなっているのか伺い知ることもできそうにない。

見渡すだけで疲れが溜まりそうなの、こんなただっ広いところでも『美琴』を見つけれられるのだろうか？

「当てもなく探し回るしかないの？」

「大抵はそう。まあ、たまに夢に入った途端、目の前にいたときもあつたけどね」

「心臓に悪そうね……それ……」

「えっ？ 君の心臓なら大丈夫そうだけど？」

がすっ!

あたしはけしからん言葉しか話せない、このどうしようも無い生物のすねを無言で蹴りつけた。

「い、痛い……」

人語を解すので辛うじて人類と識別せざるを得ないこの存在は涙目になりながら痛みを訴えているが、当然無視。

コイツはあたしの神経を逆なでして楽しいのだろうか？ 毎回毎回結果が見えているというのに。

その理由を聞いてみたい気もするが恐らく良からぬ返答しか得られないと思う。なのでそのような徒労に精を出す気もないけど、あたしは。

「ともかく、この調子だと今晚は大変なんじゃないの？」

あたしは気を取り直して、大げさにすねをさすっている男に問う。

「た、確かに……昨夜みたいな暗闇なら、美琴自身が光っているから見つけやすいんだけどな

……」

難しそうな声で唸る美琴兄。

『美琴』の背で輝いていた翼はそれなりに強い光を放っていたけど、さすがにこの真つ昼間な世界ではその光をあてにすることは難しいわね……

「これは……かなり手強そうだよな……」

「ほんと、一面、雲と空しか無いわよね……」

あたしたちはあまりの広大さに呆れて、あたりを呆然と眺めていた。

目立った目印も無く、これでは例えここから歩き出したとしても、どれだけ移動できたかを推し量ることすら出来そうにない。

いわゆる『ホワイトアウト』——雪や雲に覆われて方向・高度などが正確に認識できない状態——に近いだろう。

空が見えている分、高さだけは推し量れるとしてもこの場ではあまり意味がない。

これでは下手に動いても無駄骨に終わりがねないだろう。とはいえ、このまま此処ここでこんなのとジツとしているわけにも行かないのだが……

ずぼっ

二人揃って漠然ぼくぜんと辺りの様子を探っていたが、唐突に何か突き抜けるような音を耳にした。

「えっ!？」

「なっ!？」

慌てて顔を見合わせるあたしたち。

「い、今の音なによ……?？」

「いや、俺じゃないぞ……」

男は警戒しながらあたしと背中合わせの位置に立って身構える。

つられてあたしもその逆の方向に注意を向けた。

「あ、あれは……なに……?？」

あたしはこれまで殆ど変化の見られなかった雲の大平原の中に初めて変化を認め、後ろに立

つ男に問いかける。

「何があつた?？」

「ほら、あれ……あの山のとっぺんみたいに突き出ている雲……さっきまで無かつたわよね?？」

あたしは少し離れた場所にいつの間にか出来ていた奇妙な雲を指さした。

そこにはまるで火山の噴火口のように突き出た雲の穴がある。

あたしは恐る恐るそれに近寄ってみると、雲の山は子供が頑張つて作った大きな砂山程の高

さがあり、そして頂には人が通り抜けられそうな穴が開いていた。

「何かが、ここから飛び出してきた……みたいだな」

男の言葉はどこか確信を持っていた。

いや、この場では『それ』以外の可能性は有り得ないのだから、このあとの、

「何かかって……何が？」

あたしのこの問いは、あくまでも確認以外のなものでもなかったのだが。

バサ……………

羽根と羽根が擦れた音が耳に届き、その場に立つあたしと男に覆い被さるように黒い影が雲へと落ちる。

先ほどまで太陽が照らし続けていた雲の絨毯に、あたしたちの部分だけが影が浮かび上がっていた。

白い絨毯の上にその影だけが異様なほど鮮やかに黒い穴をあけている。

「っ!？」

男とあたしは同時に空を見上げた。

バサアア……………

そして……あたしたちを包むように無数の白い羽根が舞い降りる。

そう、そこにいたのは……

「ここふお」

悲鳴を上げそうになったあたしの口を美琴兄がとっさに塞いだ。

隙間が無いくらいに力いっぱい塞がれたあたしの声は掠れ、上空にいる『美琴』まで届かない。

「お、大声を出すな！ まだ『美琴』がこちらに気が付いたとは限らないんだぞ！」

あたしの耳元へ潜めた声で叱咤する男。

「だ、だって……」

少し緩められた手の中からはぼそと口を濁すあたし。確かにうかつだったことは間違いない。

上空の『美琴』はあたりをぐるりと見渡しているようだけど、こちらに気がついている様子は無かったのだから。

それが本当に気が付いていないのかどうかは確認しようは無いけど……

少なくともほぼ足下に当たる位置に立っているあたしたちへと目を向けてくる素振りは見えなかった。

そして、また昨晚の夢のように『美琴』は空を舞台にして舞い踊る。

その翼からは、無数の白色に染まった光る羽根が陽光を浴びて更なる輝きを纏いながら、あたしたちとその足元にある雲の地面へと降り注いだ。

簡素ながら純白を纏った天使の舞踏はまさに夢の中の光景……

これがただの夢なら、その神々しき舞をうつとりと眺めていられるのだが、残念ながら今のあたしたちにはそのような余裕は無い。

「……どうするのよ……」

「……どーするのよ、って言われてもな……」

心底困った顔でぼやく男。

さすがにすぐに何とかしろとはあたしもこの期に及んで要求する気はさらさら無い。

……の、だがしかし……

「いつまで抱きついてるのじゃ!? おのれはあああああつ!!」

がすっ!

「おごあつ!」

あたしは後ろから覆い被さるように抱きついてた男を目がけて、その顎を砕きかねない勢いで拳を振り上げていた。

先ほどからあたしの口を塞いでいた男は、あろうことかあたしをうしろから抱きしめていたのだ。

さらに……

「し、しかも！ あ、あたしのむ、胸を……」

右の拳と言葉を激しく震わせ、二の句が継げないままあたしは左腕で胸を覆い隠しながら『その事実』にワナワナと身体すらも震わせ始める。

「へっ？ む、胸？」

「ど、どさくさに……どさくさに紛れて！ あたしの胸を握ったでしょう!? アンタ！ いま！ ついさつき！ ゆ、油断も隙もあったものじゃないわね！」

顔色を紅蓮に染め上げ、あたしはいつにもまして仰け反っている男へと激しい言葉を叩きつけた。

そう、よりもよってあたしの口を片手で塞ぐと同時に、この変態男のもう一つの掌はあたしの胸にあつたのだ！

事情が事情だけに口を塞いだのはまだ許せる、後ろから抱きつく格好になったのは二百五十六歩譲って仕方が無く許そうと思つた。が、あたしの胸に触れたことは星の数ほど譲つても許されることではない。

「い、いや、いやいやいや！ ぜ、全然全くこれっぽっちも胸に触つたなんて気が付かなかつ

たぞ!? そんなこと!」

あたしの激しい怒りの炎に触れ、痛みも忘れて素っ頓狂な声を上げながら全力で首を横に振りまくる男。

しかし、男のその言葉はあたしにとって禁句。正に逆鱗に触れるとはこのことだっただろう。「だ、だ、だだだだ、誰があ! 誰が触つたのにも気がつけない、ま、まな板大草原ですつてええええええつ!!」

「落ち着けつ! 誰もそんなこと言つてねええええええ!!」

男としては予想外の反応だったのか、大絶叫しながら抗弁するが既に男の言葉はあたしの耳には届いていなかった。

「も、問答無用おとおお! 天誅ううううう!!」

「ま、まて……」

あたしは失言男へと原野を駆ける野牛の如く猛然とタツクルをぶちかまし、雲の絨毯へと叩き伏せる。

「うげっ!」

潰れたような声で呻く男に構わず、あたしはそのままマウントポジション、しかも両腕も自分の両足で押さえ込み、無礼男が抵抗できない状態に落とす。

「……じゃあ……覚悟はいいわね……うふっ……ふふふっ……」

まるつきり悪役の歪んだ形相で男を見下ろし、あたしはエンジンシリンダーもビツクリな速度で拳を振り上げる。

「こ、こんなことをしている場合じゃないだろう!？」

確かにそれはもうちよつと状況を考えてやるべき行動だったということのを次の瞬間悟った。

先ほどまでのこの変態への制裁に伴って発せられた各種打撃音とあたしの叫びは、当然辺り一面、空まで届くわけで……

シユン……………

大気を切り裂くような鋭い風切り音を伴いながら、頭上から『何か』が急降下してくる。

「はっ!? ヤ、ヤバ……」

その音を聞きつけ、今まさに男の顔へと拳を突き立てようとしていたあたしは動きを止めた。あたしが力を抜いたタイミングを見計らって、男はあたしの下から素早くすり抜けるとその降下してきたものを見据えていた。

とりあえず、男への制裁はまた次の機会に持ち込むことになったようである。

……次があれば良いけどね……

一呼吸おいて、あたしの肩へ光の羽根がそつと舞い落ちてきた。

そう、あたしと男の目の前には、雲の上、一メートルほどの高さで浮いている――

「……『美琴』――」

あたしと隣に立つ男は同時にその名を口にした。

変わらずあの天使の微笑みをその顔に浮かべたまま、あたしたちをその瞳に捉えた『美琴』が目の前で浮遊している。

「な、なんてことなの……。こいつのせいで見つかるなんて……」

「責任転嫁している場合じゃないぞ……」

上空から降りてきた『美琴』の手の中には、昨晚の夢の中で銃やら精霊輝弾ソウルランチャーとかいう魔法の弾に変えたあの淡く赤い光を放つ糸が絡まっている。

『美琴』はおもむろに赤い糸を絡ませた右手を指を弾くように振った。

すると身構えるあたしたちの前で赤い糸は宙に溶けるようにしてその空間から消え去って行く。

……何を……するつもり……？

そして、宙に漂う『美琴』はおもむろに両の腕を左右に広げると、空を仰ぐように身を反らす。

その姿の通り、まるで天使が空へ歌声を飛ばすように……

だがしかし、『美琴』から生まれたのは歌声などではなかった。

先ほど姿を消した糸と同様の——深紅に染まった細長い帯が美琴の背にしている空間から次々と浮かび始める。

まるで半透明のセロファンのようにその先の空の色を赤に染めて見せているアレは……

「な、なんだか……ものすつごく、ヤバそうなんだけど」

「かなりやばい」

悟ったというか、諦めたというのか……場違いなほど落ち着いた面持ちであたしの言葉に頷いている男。

……お願いだからそんな冷静にうなずかないで……

その態度から相当まずい状況であることをさらに突きつけられるあたしであった。

一呼吸置いて『美琴』は反らしていた背をピンっと伸ばし、今一度あたしたちを見据える。

「ど、どーするのよ!？」

「そんなの決まっているだろう」

男はそう言い切って、おもむろにあたしと『美琴』から背を向けた。

「全力で、逃げる!!」

あたしの腕を強引に握り、男はそのまま『美琴』の前から走り離れ始める。

「ま、またなのっ!? また逃げるしかないの!？」

「しよ、しようがないだろう! 君を引き連れたままじゃ戦うわけにいかないだろう!？」

「いや、たしかにそうなんだけど……」

非常に情けない話だけど、結果的にまたもこの男の足を引つ張ることになってしまった。

この前の銃弾と精霊輝弾は辛うじて避け続けることが——最後は除いて——出来たけど……
今回ののはそのどちらの弾でもなく……

男に腕を引つ張られながら後ろの様子を伺おうとしたあたしの目の先を掠めるように赤い閃光が走りぬけた。

「レ、レーザー……光線!？」

間違はなくシューティングゲームでお馴染みのレーザーだ!

次々とあたしと男の横を赤い輝線を描きながら光が走りぬける。

あたしたちから逸れた閃光が投擲の槍のごとく雲の地面に鋭く突き刺さってゆく。

「ひよええええ——!!」

妙な叫び声を上げながらあたしと男が雲の上を疾走する。

すでに握り拳大の大きさにしか見えない発射点そのものである『美琴』本人はその場から動いた様子はまるでない。

しかし、その後方からは次々と赤い閃光が浮かび上がっていることだけは垣間見える。

「ちよ、ちよっと! なんとかなさいよ!」

あたしは斜め前を走る男に怒鳴る。叫ぶだけ無駄なのはわかっているのだが、それしか出来

ない自分が実に齒がゆい。

「な、なんとかつて、何とかしたいのは山々なんだが……っ、晶！」

突然、引つ張つている腕をさらに強く引き、あたしを抱き寄せる男。

「きやつ!? な、なにを……」

あたしが文句を言うよりも早く、あたしが先ほどまで走つていたラインを紅い光条が駆け抜けた。

もし男が引き寄せなかつたら……今の光で……命中でもしていたら……

『いや、確かに死にはしない……が、

恐らく一生原因不明の眠りから目覚めなくなる可能性がある』

この男の言葉が鮮明に脳裏に浮かび、首筋に冷たいものが流れたのがハッキリと感じられる。

冗談じゃない! こんな奇つ怪な出来事で一生を棒に振る気なんてこれっぽっちも無いわよ!

あたしは!

「だ、大丈夫か!？」

「え、ええ……当たらなかつたから……」

恐怖で青ざめた顔をしていたあたしへ走りを止めずに真剣な眼差しを向けてくる男。

昨日の縦横無尽な空中旋回の時もそうだったけど、コイツって妙に勘が鋭い気がするわね。それに助けられたのだから感謝すべきところなんだろうけど。

「……そうか、よかった……それじゃ、このまま掴まっついて……くれ！」

男は雲を力強く蹴り、背で折り畳まれたままになっていて翼を大きく広げた。

そしてあたしを抱えたまま雲の上すれすれを滑るように飛び始める。

そういえば、翼があるのだから最初から飛んで逃げればよかったような気がするんだけど。

いや、たぶんそうしなかったのは距離を取ってから飛ばないと昨晚のように空中で狙い撃ちにされることを恐れたのだと思う。

実際今だって高く飛ぶわけではなく、あくまでも走る代わりに超低空飛行しているだけだ。

しかし、そうこうしている内に『美琴』から放たれている赤い閃光はみるみるその密度が増していた。

これでは昨日と同様、遠からず直撃は免れない。逃げているだけでは……

男は少しでも『美琴』から距離をおくべく、さらにそのスピードを速めてゆく。

ただ、この赤い閃光、ある程度カーブを描くところから誘導が効いているみたいだけど……

「レ、レーザーがねじ曲がつて飛んでくるとか、ひ、非常識きわまりないぞっ！」

男もそのことに気がついたのか、誰ともなく悪態をついていた。

確かにレーザーは直線にしか飛ばないからこそレーザーなわけで、誘導され曲線を描いて目

標に向かつてくるなんてナンセンス極まりない。

「……『非常識』なんて言葉、あんたにそのまんまそっくり返してあげるわよ……」

「さ、さすがに今のこの状況下じゃ……それに同感するよ、つたく……」

二人とも軽口を叩きまくって余裕ありまくりな言動をしているが、これは単なる現実逃避である。

後方から矢のように迫り来る紅い輝線からの……

上方から放物線を描いて飛んでくるレーザーを巧みに避ける男の急旋回機動だが、またしてもそれに振り回されるのはあたしである。

幸い今回は高さを上げることが出来ないため、上下の変化は殆どない。その代わり連続ヘアピンも真つ青な鋭角旋回がたびたび行われているけど……

こんな奴に抱きかかえられたままなのは本当に心外なのだが、ここをやり過ぎすためにジツと我慢をしていた。

それに目を閉じていれば、目を回すような機動も殆ど感じることがなかった。

……そっか……この理由^{わけ}、何となくわかってきた……

昨晚この男に曲芸飛行で振り回されたとき、目を瞑ったら三半規管がめっちゃめっちゃになりそうな鈍痛が消え去ったのは、目から状況を認識しなくなつて『目眩がする』ような想像が軽減した』からなのだ。

この世界は『想像』によって事象が動いているのだから、想像を認識しなければその効果は薄れる……ということになる……

まあ、それは自分自身に対してだけだろう。ほかから攻撃されたりしたものも同様に目を瞑ただけで耐えられるかどうかは甚だ疑問だし、そんな分の悪い賭け事をする気は毛頭ない。

そのとき、弧を描いたレーザーが進路をふさぐようにあたしたちの前を掠めた。

「くっ！」

「き、きやあああああ——！！」

男は急上昇することによって辛くもそれを避けたのだが、バランスを崩してしまい、二人とも雲の上に落下することになってしまった。

上昇したときに速度は殆ど無くなっていたため、クッションに少し高めの高さから落ちた程度の衝撃で済んだのは幸いだっただろう。

「いたたた……だ、大丈夫……？」

「あ、ああ……速度が落ちていたからなんとか……危ない！」

「え……」

男がスライディングタックルをするようにして、地面にへたりこんでいたあたしを押し倒し、雲の絨毯に二人そろって倒れ込む。

ザシユツ！ ザシイツ！

えぐり取られるような生々しい音があたしの耳に叩きつけられる。

「ぐあ……」

あたしの目の前にあつた男の顔が激痛に歪む。

「アンタ……あたしをかばって……だ、大丈夫!？」

「ちよ、ちよつと掠めただけだ……。もつとも翼を二つとも持つて行かれちまったけどな……」
男はあたしから身を離して起き上がると、自分の後ろを指さす。

そこには先ほどまであたしたちを運んでいた翼の姿はなく——片翼の残骸と、もう片側は抉られて血まみれになっている男の背中があつた。

「こ、これつて！ ちよつとどころじゃないじゃないの!？」

「たいした……事は無い……」

見るからに痛みを堪えているそぶりを見せつつも、地面にへたり込んでしまっているあたしの手を取り、再び駆け出そうとする男。

しかし、あたしはその手を逆に引っ張り、男をその場に引き戻した。

まさかあたしが引き寄せれると思っていなかったのか、男は思いつきりバランスを崩して背中からひっくり返るようにあたしに向かって倒れこんでくる。

「つて！ 何をするんだ……!?」

「黙りなさい！ 手当てをしないとだめじゃないの！ 手当てする方法は……」

あたしは地面に倒れた男に耳に向かって叫んだ。

手元に何も無いがせめて出血を抑えるくらいしないと……と思い、方法を考え始めたのだが

……

「そ、そんな暇は無いだろう？ それに此処は夢の世界だ……これは現実には傷にならない。ただの痛みの想像……だよ……」

そうはいつでも男には痛みが断続的に響いているのだろう。顔をしかめて声を絞り出していた。

「で、でも……!」

「こうしているうちにも……来たぞ!」

男が再びあたしに覆い被さるのと同時に、あの赤い閃光が真上から降り注ぐ。

「ど、どきなさい！ また、あんたが……」

「……こっちの都合で巻き込んでいるんだ……このくらい、どうってことない……」

あたしが言うのもかまわず、痛みを堪えながら男はレーザーからあたしを守るために覆い被さりつづけた。

唐突に閃光の雨が止み、静かな雲の情景が戻ってくる。

「う、運良く……当たらずに済んだな……」

男はあたりを警戒しながら起き上がり、そしてあたしの手を引つ張り上げた。今度はあたしも素直に立ち上がる。

「……あ、あの……」

「……ん？」

「ありがとう……」

「いや、気にしないでくれ……」

あたしが素直に礼を述べると、男は少し驚いた顔をするが、それだけ言って駆けだした。

……やな奴だけど根はそんなに悪い奴じゃないわよね……

男が翼を失い、飛んで逃げるのが叶わなくなったあたしたちは雲の上を再び走ることになつた。

これまで雲の上を、ひたすら走り、ひたすら飛び、またひたすら走り……『美琴』から大分距離をとつたつもりであるが、如何せんこの広い上に真つ平らな雲の上であるため、はつきりと現在位置を推し量ることが出来そうなものが無い。

まっすぐ走っていたつもりでも、どこかで曲がっている可能性も否定できない。

下手すれば『美琴』のまわりを回っているだけで、実は殆ど距離がとれていないということも考えられる。

しかし、今のあたしたちにそれを確かめる術も、余裕も無い。ただひたすら駆け抜けるだけである。

赤い閃光は距離をおいたためか、だいぶ拡散して放たれていた。

「ふう……さすがに雲の上で持久走は厳しいな……」

「軟らかすぎて走りにくいもんね……」

現実の空の上と違って空気が薄いということは無いのだが、さすがにあたしも男も息切れをし始めている。

ここまで速度を落とさずに走れてこれたほうが不思議なくらいだった。

『……耳を……か……』

「え……？」

不意にまたあの声が聞こえた。

妙にか細い女の人——女の子って言った方がいいかな——どこかで聞いた覚えがあるんだけど、さつきはこの男が声をかけてきたおかげでよく分からなかったのだが。

あたしは走る速さを少し落とすと、後ろを走っている男を振り向く。

「さつきから声が聞こえない……？」

「……声？ いいや……何も聞こえていないけど……」

「途切れ途切れにしか聞こえないから言葉の意味は判らないんだけど……」

「幻聴じゃないのか？」

赤い閃光に気を取られているのか、興味の無いような台詞を返す男。

……ゆ、夢の中で幻聴って一体……

『……お……がい……』

まただ……

段々とハッキリ聞こえてくる気がするのに、すぐ隣にいる男に聞こえていないなんて……
その時、不意に赤い閃光が止んだ。

青空に赤いセロハンを貼り付けたような光の筋は次々と輝きを失って消えてゆく。

あたしと男は足を止め、思わず互いに顔を見合わせる。

「ど、どうしたんだろう……」

「……………」

男は無言で先ほどまで閃光が放出されていた点を見据えている。

しかし、そこからはあれほどしつこく放たれていた閃光は見る影も無かった。

「疲れたのかな……？」

確認も何も無いが、あたしは何気なく呟いていた。

「……いや……そろそろ夜が明けるのかもしれない……」

「どういこと？」

「『美琴』は夜が明ける頃……つまり現実の美琴が起きる直前、トドメとばかりに猛攻を仕掛けてくる事がある。ちやうど昨日も最後の時はそんな時間だったんだよ」

なるほど……そういえばあたしが目を覚ましたのも朝だったものね……遅刻しそうなくらい遅かったけど……

「……って、ということは……!?!」

「そういうことだ」

空の彼方から陽光を反射し、白い輝きを放ちながらこちらに向かってくる『それ』を男は指で指し示した。

「どうして……飛べるんだから……最初から飛んで追いかけてこないの……?」

昨日もそうだったけど、何故『美琴』は精霊輝弾やレーザーを放ちながら接近するようなことをせず、ひとしきり打ち終わってから来るのだろうか?

「……遊んで……いるのさ……」

男のその声には、疲れともやるせなさともつかない響きが含まれている。

「遊んで……いる……?」

「俺は……何度か見たことがあるんだ……。俺を攻撃しているときの残忍で不敵な『美琴』の笑みを……あれは獲物を追い詰めた肉食獣のような顔だったよ……」

男は顔を歪めながら言葉を懸命に紡ぐ。

「そんな……」

そのときあたしの脳裏には、病弱とはいえ健気な笑みを浮かべて病室のベッドの上で空気に目を輝かせていたあの少女が浮かんだ。

まだ一度しか会ったことはないあたしから見ても美琴ちゃんは素直で可愛い子だった。

この男にとって、その最愛の妹が自分に対してそのような残酷な笑みを浮かべていたなどということを直視すれば気が狂ってもおかしくないと思う。

それでも男は妹を助ける術すべを見つるべく、こうして夢の中を彷徨さまよう毎日を送っているのである。

……その助けるべきものがこうして攻撃してきたとしても……

「……………」

あたしはそれ以上紡ぐ言葉を失い、沈黙するしかなかった。

ややあつて隣を見ると、男が険しい表情で先ほど指差した方向を凝視している。

その先には青空の中、陽光を受けて輝くヴェールのように光を放つ翼を優雅に羽ばたかせながら近づいてくる『美琴』の姿が写った。

「……逃げ切ることはもう不可能だろうな……」

男が力なく呟き、あたしはそれに無言で頷いた。

……逃げるだけの力も残っていないんだから……

実はちよつと前から男には翼を再生させるほど精神力が残っていないことをあたしは薄々感づいていた。

でなければとつくに翼を再生させて、もう一度飛んで逃げることも不可能ではなかったはずなのだから。

恐らくあたしをかばって受けた傷のダメージが想像以上に大きかったのだろう。

「気にするなよ。別に君が悪いわけじゃないからさ……」

あたしが顔を曇らせているわけを男の方も気がついていたようだった。

「でも……」

「それにさ、逃げる事は不可能になっても、耐えるのは不可能とはいっていない……だろ？」

バサア……

羽音が頭上で止まる。

間を置いて、『美琴』はあたしと男の目の前にふわふわと綿毛が宙を舞うように降りてきた。あたしたちの前に再び姿を見せた『美琴』の顔には相変わらず微笑みが浮かんでいる。

だがしかし、その笑顔はまるで絵に描いたように見えるほど微動だにしない。

感情が無くただ笑っているだけ……その中でいったい何を考えているのか、全く窺うかがい知る事

が出来ない……

兄であるコイツには悪いが、はつきり言つてこの『美琴』は動く人形と表した方が正しいのだ。

「耐えるつて言つたけど、今は羽根も無いのにどうやって……」

男に小声で話し掛けながら、あたしはとつきに目の前の『美琴』に向かつて身構えてしまう。正直、構えたからといってどうなるわけじゃないんだけど……

「……昨日の夜、『美琴』が銃を乱射した時に使つた『想像』がある。今は翼を復元することは無理だけど、あれくらいならまだ張る余力は残っているから、残つた力をすべてかければ夜明けまで耐えられるかもしれない……」

男は小声で答えながら、意識を集中するように右手に力を込めて広げる。

「がんばつて、としかいえない……」

非常に悔しいのだが、何も出来ないあたしは本当に足手まとい以外の何物でもない。

あたしと男の話が終わるのを待っていたかのように『美琴』はそつと右の掌を上に向け、まるで手鞠を放り投げるように軽く手を上げる。

「……なにを……」

あたしの言葉がその続きを発する前に『それ』は来た。

あたしたちの足下、雲の絨毯に赤い斑点が次々と浮かび上がる。

……まさか……あたしの想像が正しければ……

「まずい！」

男もそれに気が付いて、とつさに真下へと手を広げると昨夜のように呪文を唱え始める。

——蒼穹に放たれし、そらの精霊よ。

力あるものを断ち切る殻となりて、我らを護れ！

「『風霊防除』！」
エアリアルシールド

その詠唱とともに、雲へと突き立てた男の掌を中心に薄く水色に光る薄膜が球状に広がり始めた。

「ま、間に合ったか……!?!」

男がそう呟いた瞬間。

カン！　カン！　カン！

甲高い衝突音が隙間無く膜の外側から響いてくる。

光の膜に対して、先ほどと同じ赤い閃光が叩きつけられていた。

閃光の量が膨大すぎて、水色の膜に赤い光が覆っているようにしか見えなくらいである。

「ぐうっ!」

雲の地面に手をついて、懸命に防壁を維持している男が呻き声をあげた。

「ど、どうしたの!」

「な……何て力だ……今までの『美琴』が出していた力とは比べ物にならない……」

愕然としながらも男は防壁を維持しようとするが、その額には汗が滝のように湧き出している。

昨晩、翼で攻撃を防いでいたときも相当苦しい顔で耐えていたが、今はそれ以上に男の顔が歪んでいた。

「そ、そんな……」

あたしは絶句した。

ただでさえ絶望的なのに、今まで以上だなんて……

先ほど男が発案した『夜明けまで耐える』という戦法は敢え無く打ち砕かれそうな様相を呈してきた。

……なにか……なにか方法は無いの!?

あたしは必死になって考える。

考えてもどうなるというわけではない。だが頭が超高速で空回りしたとしても考えずにはい

られなかった。

それが、例え来たる恐怖を抑えることになるわけではなかったとしても……

「ぐっ！ お、圧される……」

閃光の持つ強大な力を押さえ込もうと男は膝を突きそうになりながら掌に力をこめているが、少しずつ防壁に凹^{くぼ}みが生かひ上がっている。

「が、がんばって！」

応援しか出来ない自分が本当に悔しくてたまらない。

『……こえを……』

「……え？」

また、あの声が、頭に響いた。

そのとき、悠然と宙に浮かんでいる『美琴』が何故か顔を引きつらせた。

……どういう……こと？

あたしが疑問を解き始めようとする前に、あたしを見据えていた『美琴』が眉をつり上げ、邪魔なものを寄せ付けぬかのような瞳を覗かせる。

次の瞬間、下から突き上げてくる赤い閃光がさらに輝きを増した。

「今日の『美琴』は特に様子がおかしい……いつもはこれほどの攻撃をすることなど無い。それにあんな表情を見せたことなんて……」

足下の防壁を維持しながらも『美琴』から片時も目を外さずにしていた男もその変化に気が付いたらしい。

あたしは藁わらにでもすぎる思いで、意識を集中して声を拾う努力をする。

『美琴』とあたしにしか聞こえていないこの声に何かがあると確信して……

『耳を傾けてください……』

今、確かに聞こえた。

耳を傾けてください……その声の主はそうあたしに語りかけている。

意識をそちらに向けていけば、絶え間なく叩きつける閃光が他のすべての音を掻き消していたとしてもその声だけははっきりと聞こえた。

あたしが少しそちらに集中しただけなのに……

……どうするの……？

あたしは自分に問いを投げかけた。この声が味方である保証は何もないし、怪しいことこの上ないことは間違いない。

視線をずらし、全力で閃光を防ぐ防壁を維持している男を見る。

あの華奢な体から放たれているとは思えぬ無尽蔵な『美琴』の攻撃に、今でこそ持ちこたえているものの、このままでいれば男の方が先に力尽きてしまう。

そうなったら……

そのとき、一際大きな閃光が防壁を突き抜けてあたしの右腕を貫いた。

「くう……!?!」

たまらず、腕を押さえて膝をつくあたし。

不幸中の幸いか、閃光はあたしの肌を焦がしただけで腕を動かすことには支障はない。だが、普段は感じることはない痛みの衝撃の方が大きかった。

「あ、晶! 大丈夫か!?!」

「だ、大丈夫よ! 気にしないでそのまま……」

ぼ、防壁の力が弱まっている……夜明けまであとどれくらいあるのか正確にはわからないけど、やはりこのままでは絶対に保たない。

もはやあたしに残された選択肢はなかった。

「い、いいわ! 誰だか知らないけど、聞いてあげる!」

あたしはその見知らぬ声に向かって叫んだ。

……フツ……

その瞬間……あたしを包む空間が暗転した。

身の回りから光と音が消え、闇と静寂に包まれる。

「……え……、こ、ここは……?」

あたしは急な変化に右往左往する。

ここには閃光を防ぎ続ける男の姿も、その閃光を放っている『美琴』の姿も無い。

『やっ……逢えました……』

あの謎の声がまたあたしの耳へと届く。

しかし、今の声は先ほどまでと違い、頭に直接響いてくるのではなく、耳を通して聞こえてきた気がした。

「誰!」

あたしは短く叫んだが、その声は響くことなく黒く塗りつぶされた虚空へ消えてゆく。

『わたしです』

あたしの前にふわりと白い光が浮かび上がった。

その光の中には……

「……美琴……ちゃん……?」

あたしたちを攻撃していた『美琴』と同じように透明感のある純白の翼と、薄布のような白い簡素な服を着ている美琴ちゃんがそこに立っていた。

『はい……』

美琴ちゃんはあたしの問いかけにそつと頷く。

その顔は先ほどまであたしと男を追い詰めていた『美琴』とは全く違う。そう、昼間あたしたちに見せていた優しい笑顔を薄く覗かせている。

「それじゃ……あの『美琴』は……？」

『あれも……わたしです……』

美琴ちゃんは顔をうつむかせ、笑みを消した。

……あれも……わたし……？

あのあたしたちを攻撃してきた『美琴』と、今、あたしの前にいるこの美琴ちゃんは同一だ
というのだろうか？

「いったい、どういうことなの……？」

あたしの問いに首を横に振る美琴ちゃん。

『今は……詳しく話している時間がありません……こうしている間にもお兄ちゃんが……』

そつと首を振りながら顔を上げた美琴ちゃんの目からは、頬にかけて一筋の雫が翼の光で煌めきながら下ってゆく。

そうだ……今こうしている間にも美琴ちゃんの兄である男が必死であたしたちを襲っている
赤い閃光から身を守っているのだ。

「ところで……ここは……どこなの……？」

『ここは……晶さんの精神……心そのものの世界です』

「こころ……?」

『はい……今のわたしは晶さんの心に同調して、この場所とこの姿、そして言葉を伝えていきます』

そんなことができるなんて……

目を丸くしているあたしに向かって美琴ちゃんが微笑んだ。

『晶さんに気がついてもらうのにはちよつと苦労しましたけどね』

「それで……あたしになんの用なの……?」

あたしは単刀直入に尋ねた。

『そうですね……先ほどの通り、時間がありませんから手短にお話します』

そういつて美琴ちゃんは目を伏せ、ふわりと翼を揺らしながらあたしへと頭こがへを垂れる。

『お兄ちゃんを……助けてあげてください……お願いします』

「いや、助けて……って言われても、こつちが助けてもらっているくらいなのに……あたしにどうしろと……?」

思わずあたしは真顔で問い返してしまった。

『……晶さんには、お兄ちゃんや晶さん自身も気が付いていない「力」があります……』

……ちから……?」

『力』と言われて思い出すのは、あの男が言っていた『精神力が強いのだろう』という言葉。

しかし、精神力が強いだけでは殆ど役に立たない。この世界で自由に力を発揮するには『想像力』がいるのだから。

では、あたし自身ですら気が付いていないという『力』とはいったい何なのだろうか？

『不思議そうな顔をしていますね……』

「それは……いきなり『力』があります……っていわれてもねえ……」

ファンタジックな物語でもそこまでストレートなのは無いだろう……と思ったけど、あの美樹が好きな小説——ライトノベルとかいうお気軽お手軽なヤツ——や漫画とか最近の傾向だと、いきなり英雄とか勇者とか魔王、果ては神様だとか『もはや普通すぎて特徴でも何でもない』らしいけど。

最初っから限界ギリギリまでパワーインフレ起こしていて、物語が成り立つのか微妙そうな気がするのだけど、どうも力そのものに意味は無いことが殆どとのこと。

それはともかく、美琴ちゃんもあたしの態度に少し困ったような笑みを見せ、

『そうですね……では……』

右腕の掌をあたしの方に向けた。

『わたしが……晶さんが自由に「力」を使えるようにお手伝いします』

「そんなこと……可能なの……？」

ここまで不思議なことが起こっていたとしても、自分がその範疇に入るとなれば話は別。ま

だまだ疑いの念は晴れない。

『はい……晶さんの「力」の正体まではわかりませんが、わたしが手助けをすれば可能になると思います——強力な干渉力を生み出すことが……』

「干渉力……」

『そうですね……。干渉力というより「攻撃想像」とでも名をつけた方が分かりやすいかもしれませんね』

確かに、男もそしてあの『美琴』も、精神力と想像力を組み合わせた『干渉力』を振るって攻撃したり、防御をしたりしているわけだけど、それらはすべて想像による起動を前提にしている。

そう考えれば『攻撃想像』という名称もあながち間違いではないし、確かに分かりやすい。

「それにしても、美琴ちゃんにそんな能力があるなんてね……」

『——「想いがすべてを生み出す」それがこの世界の理ことわりですよ』

美琴ちゃんがそうしたいと願ったからあたしの力を引き出せる……そういうことか……

『ですから……お願いです。お兄ちゃんを助けてください……』

涙ながらも美琴ちゃんは真摯な瞳で訴えてきた。

……どうするの……？

あたしはもう一度自問しようとした……が……

「答えなんて決まっているじゃない！ もちろん助けてあげるわよ！」
殆ど間を置かずあたしはそう叫ぶように答えを返す。

「は、はい……」

美琴ちゃんがはつとしたように顔を上げた。

もう迷っている余裕なんて一時すら無い。こうなったらとことん付き合っ
てあげようじゃないの。

そもそもいくら巻き込まれたからって、二度も三度もあの変態兄馬鹿男に助けられてはあたしの沽券ただただに関わる。

あたしは唯々泣き叫ぶだけの役なんてまっぴらごめんなのだから。

『あ、ありがとうございます……！』

「それで？ あたしはどうすればいいの？」

『では、わたしの手を取ってください……』

あたしは美琴ちゃんから差し出されたその透けるような細い手に右手を重ねた。

握ったその手からは綿をつかんだような感触が返ってくる。同じ女の子とは思えないほど、

柔らかく、そして儂げな素肌の感触……

『……本当にありがとうございます……』

美琴ちゃんが首を横に傾けて微笑みを浮かべたその瞬間、握り合ったその手を中心に白銀の

輝きが生まれその場を包み込んだ。

あまりの強い光にあたしは思わず目を閉じてしまう。

「うくつ……!? み、美琴ちゃん……!」

なんとか薄く開いた目にその輝きの中で美琴ちゃんの姿が光を失って消えて行くのが映った。『安心して下さい……しばらく会えなくなるかもしれませんが……わたしは大丈夫です……』その声はあたしの頭に直接響く。

ようやく光が収まりあたしが目を大きく開けたときには、美琴ちゃんの姿はそこには無かった。

「美琴ちゃん……!! 本当に……本当に大丈夫なのよね!」

さすがに目の前で消えてゆくのを見せられては、気にするなというのが無理な相談である。

『はい、大丈夫です……お兄ちゃんを……よろしくお願いします……そして……』
逡巡するしゆんじゆんような短い間において、言葉の続きが伝わってくる。

『……わたしを……『みこと』を止めてください……』

「わかったわ……」

あたしは誰もいないその視線の先に向けて頷いた。

——そして、頷いた顔を上げたとき、

目の前には白の地平線と水色の空で分けられた空間が広がっていた。

足下の雲では絶え間なく赤い閃光が防壁に跳ね返されて、耳につく甲高い音と光を放っている。

「おい！ どうしたんだ!!」

雲の地面に手をつけて防壁を維持している男があたしに叫んだ。男としてはあたしが突然叫んだことが気に掛かったのだろう。

つまりあたしが『聞いてあげる!』と叫んでから殆ど時間が経過していなかったことになる。

「戻ってきた……?」

ふと、あたしは赤い閃光を放ちつづけている『美琴』を見据えた。

今まで余裕の笑みを見せていたはずのその顔は硬く険しい表情に変わっている。

「……どうしたんだ……」

男もそれに気がついたのか、少し首をかしげている。

『……お兄ちゃんを……よろしくお願いします……』

美琴ちゃんの願いを叶えるために、あたしはここに戻ってきたのだ。

「分かったわ……美琴ちゃん……！」

そのとき、あたしの中に何かが沸き上がる。

それは言うなればイメージ……自分の中にあつたとは思えないほど明瞭で強い想い……！
具体的な形へと変化する。空を覆うかのような巨大な光り輝く翼のイメージへと……

あたしはすうっと大きく息を吸った。

「『光の翼』！」
カタリスト

あたしの叫びが響き渡り、どこからともなく光の粒子——昨晚、男が翼を再生させたときに現れたものに似ている——が現れ、あたしの背中へと収束する。

そして、羽根一枚一枚に光そのものを塗り固め、それを組み上げたような半透明の巨大な翼が組み上げられてゆく。

「ま、まさか……あれだけで……」

愕然としたように眩く男の眼前には『美琴』の翼と似た透明感のある無垢の翼が生み出されていた。

パジャマ姿のあたしの背中には一対の翼が今にも飛び立とうとせんばかりにゆったりと羽ばたいている。

——『時と世界を渡る翼』
カタリスト 光の翼——

とある物語で使われていた魔法だったはずだが、具体的にどこでどのように登場したかまで

は覚えてはいない。

ただ、強力な力がある……ということだけは間違いなかつたはず。

「こ、これが……想像の力……」

その時、あれほど激しく抉るえぐように放たれていた赤い閃光が唐突に止んだ。

「どうしたんだ……一体……」

突然の変化に戸惑いつつも、男は油断することなく防壁を維持している。

あたしを睨めつけていた『美琴』の手にはあの赤い紐がいつの間にか握られていた。

『美琴』はそれをあたしの方に放り投げるように腕を振るう。

距離的にとてもただの紐が届くわけがないのだが、

「……まさか……伏せろ！」

些細な変化に気が付いた男があたしへと叫ぶ。

放り投げられた紐が突如として赤い閃光へと変化したのだった。

しかも、その光はこれまでとは比較にならない凄まじい輝きを纏まとい、翼を背負つたあたしへと

とまっすぐに突き進んでくる。

そう、今まであたしたちを護っていた防壁をあつさり貫通・破壊する威力を伴って……

「なっ!？」

閃光は防壁をたやすく砕かれて驚愕する男の目の前で、威力の衰えも全く見せずに標的であ

るあたしをも貫こうとする。

「……………ふんっ！」

パンアアアアン！

しかし、鉄板を叩くような堅い音とともにあたしを打ち倒そうとしていたはずの閃光はあさつての方角へ飛び去っていった。

何のことは無い、はじき飛ばしたただけだ。

あたしの……『光の翼』で……ね……！

「な、なんだったって……」

美琴兄であるこの男が驚くのも無理はない。

昨夜は「精霊輝弾」の猛攻に耐えた男の翼を『易々《やすやす》とはじき飛ばし、そして防壁すらも砕いたあの赤い閃光を軽々とはじき飛ばしたのだ。この翼は。

しかも、先ほどの閃光は今までにない威力を誇った一撃だったはず、それを防いでなおビクともしていない。

実際、あたしの方がビククリしているのだけだね。

でも……これならば……いけるわね！

「さあ〜て……よくも今までさんざん好き勝手に追いかけて回してくれたわね……」

「も、もっしもしょしく……め、目が怖いぞ……お〜い……」

右手の指をポキポキ鳴らしながら、プリティーかつサディステイクな閃きを浮かべるあたしの瞳に思わずたじろいでいる美琴兄。

「きっちり利子付き、しかも法定利率ぶつちぎりオーバーで返してあげるから！ 覚悟なさい！」

指を突きつけて高らかに宣告を打ち立てた。

そして右の腕を軽やかに振り、その掌に意識を集中する。

掌に浮かび上がったイメージはそのまんま光の刃。これもどこかで知った気がするけど今はどうだっていい。

問題はこれがどれほどの威力を持つか、である。

「いくわよ！」

手の上に生み出された半月状の刃を携え、あたしは翼を広げて『美琴』目掛け突撃する。

対する『美琴』も先ほどの閃光を拡散レーザーのように多方面から滅多撃ちし、向かってくるあたしを数で押さえ込もうとしているが、すべてあらぬ方向に弾き飛ばす。

「……………!?」

「ば、馬鹿な……………！」

驚愕する男を尻目に、動揺しているそぶりを隠し切れていない『美琴』への特攻をあたしは止めない。

そもそも空を飛ぶのに翼を広げる必要はあたしには無い。だから雲の上を滑るように飛びながらも、翼を使って攻撃を弾くことが出来るのだ。

「とりやああああ!!」

さらに加速をつけて『美琴』との距離を零^{ゼロ}まで詰めると、手にした光の刃をすれ違いざまに解放する。

「『蒼月光刃』!」
アルテミススライサー

あたしのかげ声とともに『美琴』の翼へと青白い刃が吸い込まれていくが、それはあっさり弾かれて衝撃で翼からはがれ落ちた羽根とともに宙に消えた。

それでも羽根が舞う程度にはダメージはあったようだけど、さすがにこの程度ではお話にならないか……つと!

「——おっと!」

『美琴』は閃光をまるで孫悟空が持つ如意棒のように長い棒状に変化させ、あたし目掛けて振り下ろしてきた。

とっさに空中で飛び跳ねるような動きでそれをやり過ぎし、振り下ろされた紅の棍棒は雲の大地へと沈んでゆく。

あたしは背中中の翼へ力を込めるイメージを思い描き、急カーブで旋回して体勢を立て直す。それにしても、これくらいの威力なら男のように呪文の詠唱などを必要としなくても干渉力——いえ、攻撃想像を繰り出せるなんて……

美琴ちゃんが力を貸してくれているとはいえ、いったいあたしの『力』って何なのだろう……？

今は考えている余裕は無いけど、いずれちゃんと知らなければならぬでしょうね。

そのとき、あたしの前方から視界を埋め尽くすほどの光の弾が迫ってくるのが見えた。

……こちらに余裕を与える気は無いようね！

だが精霊輝弾の威力くらいなら翼で防げてしまうことは向こうもわかっているだろうから、

これは……

迫り来る光弾を間近まで引きつけると、あたしは逆立ちするようにして眼下に広がる雲を見据えながら翼を最大限に展開する。

「はっ!!」

そして、そのまま体を捻るよう一回転して広げた翼ですべての弾をはじき飛ばす。

視界を遮っていた精霊輝弾が消え去った後、そこには『美琴』の姿はなかった。

あたしはそれにかまわず、思い描いていた攻撃想像を真下の雲へ解き放つ。

「『裂光縛呪』!」

雲に向けていた掌から編み目のような雷光が生まれ、それは雲の上を走り……

バシユウウウウ！

真下の雲から突き抜けて来ようとした『美琴』を絡め取る。

「……！」

『美琴』は硬い顔のまま、体を翼ごと紫電の帯で組まれた網に拘束されてしまう。

「残念だったわね！」

あの精霊輝弾おとくりを「囷おとくりにしたつもりだったのだらうけど、あたしの判断の方が早かった。

雲の上に捕縛された『美琴』から離れ、あたしは男の前に降り立つ。

「あ、晶……その力は……」

あまりの事の成り行きに呆然とあたしたちの戦いを見ていた男が口を開く。

「説明は後回し！ 来るわよ！」

『美琴』を押さえつけていたはずの雷光は赤い紐に逆に絡められ、あっさりとズタズタに引き裂かれてしまった。

「さすがにこのくらいで大人しくなってくれるわけにはいかない……か……」

あの網を切られた程度では驚かない。相手はあの『美琴』なのだから。

そして、再びあたしたちの前にふわりと姿を浮かせる『美琴』。表情からは全く読めないが、ダメージは殆ど無いのだろう。

「……！ 伏せて！」

あたしは自分の頭を下げるついでに男の頭を雲に叩きつける勢い——本当に頭を雲に突っ込んで——で身を伏せ、翼で自分たちの体を包み込む

ザシュ！ ザシュ！

あたしの翼に何か固いものが突き刺さったような音が外側から響く。

振り払うように翼を広げると、翼の外側には輝く羽根が突き刺さっていた。

『美琴』が羽根を手裏剣のように飛ばしてきたのだろう。さすがに羽根本体で攻撃されるとあたしの翼でも傷がついてしまうのか……

翼の状態を見極めている間に『美琴』は両腕を広げて力を溜め込むようなしぐさを取っていた。

これまではこちらの力を様子見していたのだろうが、手強いと判断したのかもしれない。「本気でくる気ね！ そうはいかないんだから！」

あたしは高らかに叫び、左手を右手首に添え、そのまま右腕を目の前に突き出すと頭の中に

次々と現れる『呪文』らしきものを唱えだす。

「な、何を……」

雲からずぼつと頭を引き上げ、男が何事かとあたしを見上げていた。

際限なく溢れ出てくる想像力に身を任せ、あたしは思い浮かぶその呪文を高らかに詠み上げる。

——朱に輝きし星のたもとにありて……

どうやらあたしは美琴ちゃんの兄であるこの男と違い、呪文を詠唱したりすることで想像力を高めなくてもこの世界で力——攻撃想像——が使えることがさつきまででわかった。

——この地にあまねく邪なる存在ものを滅せしものよ……

でも、それは呪文を唱える必要が全くないわけではなく、詠唱する行動を伴わせることによつて……

——我が呼びかけに答えよ！

さらに想像力が拡大し、そして繰り出せる力を高められることが出来る！

あたしの掌から、寝る前に読んでいたファンタジー小説——例によって美樹からのレンタル品——のヒロインが展開させていた魔方陣と同じものが浮かび上がった。

その魔方陣はあたしの掌を中心にしてどんどんと面積を広げ、あたしの背丈を遙かに超える大きさまで膨れ上がってゆく。

「いくわよ！」

あたしが掛け声をかけると、魔方陣は急速に紅い光を帯び始め、その色を白からオレンジ、そして真紅へと輝きを変化させる。

魔方陣の光にあわせて光の翼もその輝きを増大させてゆき、あたしそのものも燐光を纏う。

「……って、見とれている場合じゃない！」

あたしが何を詠唱しているのか分かったのか、慌てて男も呪文を唱えだす。

——紅き星の輝きを導きし光の柱よ！ 闇の炎を撃ち砕く鍬やじりとなれ！

魔方陣越しに『美琴』の方も両腕をこちらに向け、攻撃に移ろうとしている姿が垣間見えたが、あたしの方が……一足早い！

そして——あのファンタジー小説の攻撃魔法が完成する——

「ルビーライトイレイザー『紅星滅殺』！」

「エアリアルシールド『風霊防除』！」

あたしと男の声が重なる。

紅い稲妻を纏った魔方陣からは『美琴』が放っていた閃光など比較対象にすらならない巨大な光の円筒——もはや、紅いサーチライトと表した方が正しい——が撃ち出され、雲の地面を剥ぎ取り、巻き上げながら『美琴』めがけて突き進む。

対する『美琴』も両腕をこちらに突き出し、黒い何かを放出して応戦しようとするが、向かってくる『紅星滅殺』の威力にあっけなく蹴散らされ、発動すらしなかった。

「……………!!」

あたしが放った『紅星滅殺』が炸裂する瞬間、終始無言を貫いていた『美琴』の叫びが微かに聞こえた気がした。

ドオオオオオオオオオオン!!

『美琴』に直撃したであろう光の柱があたりを真っ赤に染めながらど派手な爆光を解き放つ。……が、至近距離で炸裂した爆風があたしと男に跳ね返ってきたのだっ……たあっ!?

「や、やばっ!」

今のあたしはいざ知らず、疲労とダメージが蓄積している男の方はこの爆風に耐えられるはずがない。

しかし、あたしが振り向いた瞬間、迫ってきた爆風は風に巻き取られたかのようにあたしと男を挟んで左右に霧散する。

「ふう……あ、危なかった……。もうちよい考えて力を使ってくれ……」

「あなたなんかしたの……?」

「なんか……エアリアルシールド『風霊防除』がギリギリ間に合ったよ……その代わり力を使い果たしてへトへトだけど……ね……」

男は手を下ろして防壁を解除し、雲の上に崩れ落ちると大の字になってひっくり返った。

「……あの魔法……確か、炸裂した後に爆風を周囲にまき散らすから……こんな至近距離で使う魔法じゃなかったはずだけど……」

「よ、よく知っているわね……ということは、あなたもあの小説を読んだことがあるのね……?」

「ああ、以前美琴に勧められてね……」

そういつて上半身だけ起こして『美琴』が立っていた場所に目を向ける男。

「勢いで思いつきり攻撃しちやっただけど『美琴』……大丈夫なの……？」

さすがにこれはやり過ぎたと思ったけど、あのときあたしの中に浮かんだイメージはこの魔法・ルビースライトイレイザー紅星滅殺だったのだ。

そもそもあたしはこの魔法の存在を本を通して知ってはいたものの、呪文の文言すべてを覚えていたわけではない。

恐らくは——あたしの力を引き出している美琴ちゃんがこれを選択し、それを行使させたのだろう。

それにしても、大切な妹を攻撃したのに、この妹命な男はあたしに文句のひとつも言わないなんて……

「……正直、気分がいいもんじゃないけどな……とっさの事で止めることも出来なかったというのもあるけど、『美琴』に反撃した君に怒りをぶつける権利は、俺には無いよ……」

男は肩を落としてしんみりと呟いた。

確かに巻き込まれているあたしにとっては『敵』以外の何物でもないが、この男にとって『美琴』は大切な妹である。

しかし、その妹が殺すような勢いで他人を攻撃しているのだ。

その攻撃対象になったもの——あたしが反撃しても非難する事は出来ないのだろう。

「……それに美琴は大丈夫だよ……これくらいじゃなんとも無いだろうから……」
「いや、大丈夫って……」

あたしの危惧は現実となつて襲いかかつてきた。

ザンっ！

爆風によつて吹き散らされた雲はまだ晴れきっていない。

その場所を突如として日本刀のような刃の煌きが打ち下ろされたのだつた。

銀に染まった刃が通り去つたあと、障子をカッターで切り裂いたような鋭い雲の切れ目が残る。

「……だろ？」

「そんな場合じゃないでしょうが！」

あたしと飛び起きた男が一步退いて構えると、霧状に吹き散らされていた雲の中から抜き身の日本刀を携えた『美琴』が浮かび上がつ……え!?

「なっ!？」

男の方も短く叫ぶ。

雲間から姿を現したときは、確かにそれは『美琴』に見えたのだが……

その髪はやわらかそうな栗色ではなく闇を塗り固めたような艶やかな漆黒、そしてその瞳は血の色で染められたような寶石——ルビーのように輝いている。

顔つきも先ほどまでの『美琴』と比べて、やや大人びた面持ちをしていた。

その顔には微かに残っていた元々の美琴ちゃんのやさしげな表情は無く、魔性の笑みが薄く貼り付けられている。

そして、今まで布のような服を着ていたはずだが、その少女はこれまで見た事も無いセーラー服を身につけていた。

「だ、誰っ!？」

しかし、目の前で抜き身の刃を構えたその少女は答えない。

それどころか無言で刀を横に風ぐ。

「うわっと!」

あたしは反射的に身をスライドさせて刃をかわす。

しかし、左右に開いていた翼にその刃が掠め、燐光を纏った羽根が散った。

「何者だ!」

やっぱり男の方もこの少女のことを知らないみたいね。

「……いのちの『命』……」

黒髪の少女は男の問いに答えたかのようにそれだけを口にした。

「なんだって……!!」

男が詰め寄るように問いかけるが、命と名乗った少女は左手に持っていた鞘にその日本刀を収めてしまう。

「……また……」

そしてぽつりと呟いた後、その少女はそれまで刀を手にしていた右手を軽く振るい――

バシユウウウウウ――!!

突如として現れた赤い閃光にあたしの翼はあっさりと貫かれてしまう。

幸いあたし自身には掠りもしなかったのでダメージにはならなかったのだが、その事實は衝撃的であった。

「そんな……!!」

あれほどの防御力を誇ったこの光の翼をいとも簡単に……

「き、消えた……?」

あたしたちがそれに気を取られている間に、命はまるで蜃気楼のように掻き消えてしまった。「お、おそらく朝が来たんだろ……う……」

男は全身から力が抜けたようにドサリと音を立てて倒れこんだ。

「だ、大丈夫っ!？」

「まあ……何とかね……今日は相当消耗したからかなりヤバかったけど……」

無理もない、限界まで振り絞って精神力を使い倒していたのだ。普通の人間ならとつくに氣を失っていてもおかしくないだろう。

「……あの子……命みことって子、何者なのかしら……?」

「さあな……」

先ほど見せたそぶりから男もあの少女を知らないことは感づいていたけど、この世界であれほどの力を持った存在をこの男が知らないなんて……

ふと、あたしはあの『命みこと』という少女が消える間際に放った閃光に貫かれ、風穴が空いた翼を手に取った。

自然に修復されたのか、穴自体は殆ど塞がれていたけど……これがあんな簡単に貫かれるなんて……

あの少女の持つ力は『美琴』のそれとは比べものにならないことは間違いない。

「そういえば『美琴』はどこにいったの……? まさかさっきの攻撃で本当に消し飛んだんじゃない……」

「いや、それは無いな。もしさっきので『美琴』が倒されていたら、その場でこの世界も一緒に消え去っていたはずだ」

確かにこの世界そのものである『美琴』が消滅したとなれば、この世界も消えるのが筋ではある。

『美琴』とそして『命』が去り、穏やかな風景を取り戻してこの世界は今なおその存在を維持していた。

「でも、美琴ちゃん目が覚めたんでしょ？ どうしてこの世界、まだ消えないのかしら？」

「まだ微睡んでいると言ったところかな……特に美琴は低血圧だから朝にとっても弱かった。だから布団から起き出てくるまでが長いんだよ……」

あたしもさほどの低血圧というわけじゃないけど割と朝は弱い。

その時、半分夢の中にいるようなぼーっとしたような状態にはなるけど、ちようどあれと同じような状態なのかしらね？

「ま、とりあえず今日のところは無事とは言い難いが……何とか耐えられたな……」

「……ほんと、無事とは言えないわね……これは……」

地面に突っ伏している男の方は翼を失って背中に傷を負うわ、精神力は使い切っているわ……あたしの方がかすり傷程度で済んだのが奇跡的なくらいである。

「それで、晶、その力はいったい……」

いまさらながら男が突然変貌を遂げたあたしの姿について尋ねてきた。

あたしの背中に生み出された大型の翼は、未だにゆったりと広がってその存在を堅持してい

る。

「美琴ちゃんに……会ったのよ……」

「み、美琴に!？」

目を剥いてグツタリとしていた身体を跳ね起こしながら男が叫んだ。

「正確に言うと、『会った』というのは正しくなくて、あたしの心の中に美琴ちゃんが直接語りかけてきた……って本人は言っていたけどね」

「それじゃ、あの君が聞いていた声というのは……」

「そう、美琴ちゃんだったのよ。そして、そのときあたしの中にある『力』を引き出してくれるって……」

「力を……」

難しい顔を見せ、男はあたしの背から生えた翼に目をやる。

「たった……あれだけの想像を行使するだけで、あれほどの力を発揮するとはな……」

感心を優に通り越して呆れたといった感じで男は肩を竦ませた。

「ところで、この翼ってどうやって消せばいいのかしら……?」

あたしは自分の背中から伸びている翼を指さす。

ちなみにこの翼『光の翼』だけど、元ネタはどこだったかあまり記憶がない。どこかで見た記憶があるんだけど何処だったかな……

美琴ちゃんはあたしがこれまで知っていた魔法を詳細に思い出させることによって、攻撃想像を発現させていたみたいだけど、呪文の一字一句まで再現させたのは驚きではある。

「それよりも、光の翼を想像するのはいいけど、服のほうはどうかならなかったのか？」
言われてみれば、確かに今のあたしの服装はファンタジックな白い翼にパジャマ姿というミスマッチ極まりない、まことにお間抜けな格好になっている。

「う、うっさいわね！ とっさのことだったから服装まで気がまわらなかったのよ！」
あたしは頬を真っ赤に染めて叫んだ。

「……消えて欲しいと想えば消えると思うよ。今の君なら簡単に消すことが出来るんじゃないのか？」

「そ、そうなのかな……うーん……」

あたしは頭の中で翼が消えてゆくさまを思い浮かべる。

そうすると背中から生えている翼は徐々に薄れ光を失い、最後に翼を構成していたあの光の粒子が霧散して、翼は完全にその場から消え去った。

「ほ、ほんとだ……」

あたしは先ほどまで翼のあった背中を覗き込んだが、そこには翼があったことを物語るようなものは何も残ってはいない。

本当に背中から生えていたわけではなかったのか、背に手を回して触ってもパジャマに穴が

空いているということもなかった。

「ところで……その心の中で会ったという美琴はそのあとどうなったんだ？」

「消えちゃった……」

「な、なんだったって!？」

あたしに詰め寄る男の言葉には怒気のようなフイーリングが含まれていたが、思わず取ってしまった行動なのだろう、

「ご、ごめん……」

あたしに掴みかかろうとしていた手を引つ込めて、目を伏せる。

普段ならあたしも怒るところだけど、理由が理由なのであえて気にしていないというそぶりを見せて言葉を続けた。

「あたしの力を引き出してくれたあと、美琴ちゃんは消えちゃったんだけど『しばらく会えなくなるかもしれない』ってわたしは大丈夫です』って言ったのよ……」

「……しばらく会えなくなる……? どういうことだ……?？」

「さあね……あたしにも何が何だかさっぱりよ……」

男も別に答えがほしくて呟いたわけでは無いだろうけど、あたしとしてはそう相づちを返すしかない。

「起きたら病院に行ってみるしかないんじゃないの? 少なくとも今までの傾向なら起きてい

るはずだしね」

今回もちゃんと『美琴』に夢の中で会っているのだから、朝、目覚めないということはないはずだ。

「そうだな……」

心配なのはあたしも同じだが、今ここでウジウジと悩んでいても仕方がない。

次は朝起きてからの話なのだ。

「それにしてもアンタとは違って美琴ちゃんって本当にいい子よねえ」

「……いい加減、アンタはよしてくれよ……俺にだって名前があるんだから……」

男はウンザリとした顔で呟いた。

「そういえば名前……聞いていなかったわよね……」

まあ、シスコン男、変態男、兄馬鹿、キス魔、変質者……等々……心の中では罵詈雑言のオンパレード（参勤交代の大名行列並み）で識別していたこともあり、あたし的には用が足りていたので名前を聞く必要が無かった……とはコイツには言わないでおこう。さすがに阿蘇山みたいに凹むだろうし。

それでも美琴ちゃんの兄なのだから名字の『東陽』という単語が思い浮かばなかったのは、あたしがどれほど本当の名で呼びたくなかったことを如実に表しているかもしれないけど。

それはともかく……

「……レン……」

「レン？」

「俺の名は『東陽煉夜』……美琴には『レンお兄ちゃん』と呼ばれているから『レン』と呼んでくれればいい」

……さすがシスコン男、やっぱり判断基準の中心が『妹』のようである……

ツツコミを入れたいところだが、言っても聞きそうに無いので黙っておいた。

しかし、高校生にもなって『お兄ちゃん』と呼んでいる美琴ちゃんも美琴ちゃんなんだろうけどね。

「レン……ね？ 分かった……わ……」

そのとき頭の片隅で『何か』が引つかかったのだが、それに思考を移す前にあたしの体がグラリと揺らぎ、まるでスローモーションを見ているみたいに雲の地面が大きく拡大されて……

「……えっ!？」

ドサツ!

「ぐえええ!？」

足下にいた男ことレンが蛙が潰されたような声を上げる。

突然倒れてきたあたしの下敷きになったのだからしょうがないけど……

「お、重い……」

「し、失礼ね！」

めちやくちや失礼な呻き^{うめ}声を上げるレンであった。

「いいから……は、早くどいてくれ……」

どうもみぞおちに入ったらしく、レンは痛みで動けない模様。

あたしは慌てて体を起こすと、雲の地べたで大の字に倒れているレンの隣に腰をおろした。

「や、やっぱりな……」

ようやく体を起こしたレンが納得顔で呟いた。

「やっぱり？」

あたしがオウム返しに聞き返したとき、目の前のレンの姿が蜃気楼のように霞を帯びて徐々にその姿を失って行くところだった。

「ど、どうしたの!? レン！」

あたしは慌ててレンに近寄ろうとしたが、あたしの足はその場に釘付けされたみたいにも動かすことが出来ない。

「ど、どうということ!?」

「心配しなくていいよ。美琴がちやんと目を覚ましたんだろう」

レンの方は特段慌てた様子も無い。

ということは、ようやく今夜の夢に終わりがきたのだろう。

「『美琴』と共にあった俺達の夢もようやく終わる……君もじきに目を覚ますよ」

「そう……」

レンの言葉にあたしは思いつきり息を吐いて体中から力を抜いた。

気を張り続けていたのはあたしだって同じだったのだから。

「……一つだけ、言っておくよ」

消えかかりながらもレンが言葉を紡ぐ。

「今日、学校には無理して行くな……」

「え……？ どうし……」

あたしの問いにレンは答えようとしたみたいだけど、口をパクパクさせたのが見えただけでその内容はあたしの耳には届かない。

——そして、あたしとレンの存在がその世界から消えた。

あたしは目を覚ます。

昨日の朝と打って変わり、飛び起きることも無い、静かな目覚めだった。

昨夜の……最後の記憶の通り、枕元に転がっていた文庫本を手に取ると、目が覚めたというより『戻ってこれた』ということのことをことさらに実感する。

パジャマの袖を捲めくってみても『美琴』の攻撃で傷ついたはずの右腕には何の痕あとも残っていない。当たり前だあれは夢の世界なのだから……

あたしは腰から上を起こすと、カーテンごしに窓の外から漏れる朝日の光を受けた。

ふと出窓に置いてあつた時計を覗くと……長針が二時、短針が八時……

「は、はちじじゅつぶん……って！ 昨日よりもピンチじゃないのおおおおお!!」
慌てふためいてあたしはベッドから飛び降りる。

ぐらっ

「え……」

床についた足が自分の体重を支えるのを拒否するかのように膝が折れた。

「うわっ!」

思いもよらぬ足の挙動にバランスを崩し、そのまま床に転倒するところだったけど、とっさ

にベッドの端につかまって踏み止まる。

足だけじゃない、今は動いてくれたけどベッドを掴んでいる腕も、いつもより何となく反応が鈍い感じがした。

「……体が思うように動いていない……？ どういうこと……よ……」

『今日、学校には無理して行かない方がいい……』

あたしは夢の中に出てきた美琴ちゃんの兄、レンが言っていた言葉を思い出した。

「こういうことなのね……」

恐らく夢の中であれほどの力を使った反動で、気力が回復していかないせいなのだろう。現実では寝ていたのだから、体力的には回復しているみたいなんだけどね……

「といっても……今日はテストがあるのよね……」

そのテストは受けないと進級にかかわるものではないけれど、合格点を取るまで何回でも再テストがあるという、生徒の間では『蟻地獄』などと揶揄されている恐怖のテストだ。

もちろん休んだ場合でも再テストを受ける必要がある。

あたしはしばし思案するものの、再テストという事態を避けたいということからゴソゴソと着替える準備をはじめた。

「再テスト……放課後にやるんだもんね……」

貴重な放課後という時間が失われるというだけで、今日日の高校生にはかなりの打撃である。
「うんしょつと……」

あたしは制服に着替えるとカバンを手にして部屋を飛び出す。

「晶、ご飯はどうするの？」

階段を駆け下りるあたしの足音を聞きつけたお母さんが台所から声を掛けてきた。

「それどころじゃないわよ！ それなら食べられるように起こしてよ！」

昨日と同様、なぜか時間通りに起こしてくれなかったお母さんに文句を並べながら玄関で口
ーフアーに足を突っ込む。

「いってきます！」

「いってらっしゃい、気を付けてね」

玄関のドアを開けると春の日差しが目に突き刺さり、目が眩くらんだけれどそれも一瞬のこと、
あたしはそのまま駆け出していた。

「な、何とかぎりぎり間に合うかも……」

腕時計を目の下に置きながら、あたしは学校までの道のりをひた走る。

桜の花びらが舞う春の空は穏やかに晴れ渡っていた。

まるであの夢の蒼い空を写し取ったかのように……

第3話
完

夢の残照

奥 付

著者 風野旅人

URL <http://mypage.syosetu.com/138756/>

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)

